

通信教育部論集

尾熊治郎教授退職記念号

第 18 号

2016年3月

創価大学通信教育部学会

通信教育部論集

尾熊治郎教授退職記念号

第 18 号

2016年3月

創価大学通信教育部学会



尾熊 治郎 教授

目 次

特 集

尾熊治郎先生 退職記念号の発刊に寄せて	花 見 常 幸	1
仰ぎ見る人間教育の体現者	有 里 典 三	3
果てしなき探究の対話—尾熊治郎、その人と思想—	坂 本 幹 雄	6
「不在化」の時代と宗教の構造的変容 —宗教と歴史との「再結合」の時代—	尾 熊 治 郎	16
尾熊治郎教授 略歴・著作目録		28

講 演

出会いは人生の宝物 —女性の世紀を生きる—	島 田 歌 穂	33
-----------------------------	---------	----

論 文

レジリエンスの築き方に関する考察	木村 富美子	50
創造的日本語教育と価値論	山 本 忠 行	67
現代都市計画制度についての考察	劉 繼 生	88
部門別資金過不足と IS-LM 分析—試論的考察—	堂 前 豊	106
芭蕉とカント —俳句の論理構造—	石 神 豊	121

講演会報告		31
活動日誌 [平成 26 年度]		139
規約		140
創価大学通信教育部学会会員一覧		142

Review of the Division of Correspondence Education

No.18, March 2016

Contents

Published in Honor of the Retirement of Professor Jiro Oguma	
Preface	Tsuneyuki Hanami 1
A Respectable Professor Who Has Experienced Humanistic Education	
.....	Norimitsu Arisato 3
Unended Conversations	Mikio Sakamoto 6
The Era of “Nullification” and the Transformative Renewal of Religions	
The Structure of Religious Life and the Historicalness of Religions	
.....	Jiro Oguma 16
Curriculum Vitae of Professor Jiro Oguma	28
Lecture	
Meeting is Treasure of Life	Kaho Shimada 33
Articles	
Building Resilience	Fumiko Kimura 50
Language Education based on Value Creating Pedagogy of Makiguchi	
.....	Tadayuki Yamamoto 67
A Study on Modern City Planning System	Jisheng Liu 88
The IS – LM Model and Financial Surplus or Deficit by Sector	
.....	Yutaka Domae 106
Basho and Kant : Logical Structure of Haiku	Yutaka Ishigami 121

The Academic Association of the Division of Correspondence
Education

Soka University

1-236, Tangi-cho, Hachioji, Tokyo, Japan

尾熊治郎先生 退職記念号の発刊に寄せて

通信教育部長 花見 常 幸

1971年（昭和46年）の本学開学、そして76年（昭和51年）の通信教育部開設以来、本学と通信教育部の建設と発展のために、教育と研究の両面において、多大な貢献をされてこられた尾熊治郎先生が、本年3月をもって、定年退職を迎えられた。長年にわたる尾熊先生のご功績は大きく、そのご恩に少しでも報いるために、通信教育部学会は、退職記念号を発刊する運びとなった。これは、通信教育部学会のみならず通信教育部としても、大いなる喜びとするところである。

尾熊治郎先生は、1944年7月に広島県にお生まれになり、1967年に中央大学法学部を卒業後、同大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程に入学され、西洋哲学を学ばれる。この大学院時代に、西洋哲学とくにニヒリズム研究の大家である斎藤信治先生に師事し、ニーチェとハイデッカーの研究を開始され、以来、今日までニーチェとハイデッカーの宗教に関わる部分の研究を続けられている。

大学院在学中である1971年、本学創立者池田大作先生が示された「人間教育の最高学府たれ」との建学の精神に深く賛同された尾熊先生は、開学した本学の文学部助手として赴任され、開学当初の草創期の大学建設に、とくに学生部員として学生の育成に尽力された。個人的なことで誠に恐縮であるが、私自身も本学の1期入学卒業生として尾熊先生にお世話になった学生の一人であり、大学院受験を控えた3ヶ月間ほど、図書室が午後9時に閉館になった後に、先生の研究室の一角をお借りして勉強させていただいたことがあった。大変懐かしい思い出であり、学生思いの先生のお人柄を示すエピソードとして、紹介させていただいた。

1976年の通信教育部の開設と同時に通信教育部に移られ、インストラクターとして草創期の通信教育部の基礎作りのために力を尽くされる。1981年に通信教育部専任講師、2008年には教授に就任され、本年まで通信教育部において39年間教鞭をとられてきた。通信教育課程では、教養教育分野の中心者として、「哲学」、「自学習入門」、「共通総合演習」などの科目を担当されるとともに、通学課程でも、「哲学」、「宗教学」などの科目担当を通して、本学の建学の理念を教養教育の中に具現化する努力を続けられてきた。また、1971年の開学以来現在まで、学生のクラブ団体である「生命哲学研究会」の顧問を続けられており、「学生のための大学」である本学の発展のために、課外活動の分野でも、尽力されている。

研究業績としては、『哲学』をはじめ、『人権は誰のものか』、『女性学へのプレリユード』などの著書があり、ニーチェおよびハイデガーに関する多くの学術論文も執筆されている。さらに、通信教育部では、2005年からの開設30周年の記念事業

として、創立者池田先生の思想を研究するプロジェクトを立ち上げ、その成果をわが国における創立者研究の第一歩として、『創立者池田大作先生の思想と哲学』という3巻からなる書籍として出版したが、尾熊教授がその研究プロジェクトにおいて、大きな貢献をされたことも忘れることはできない。

以上のような、尾熊先生の本学並びに通信教育部における教育および研究上の多大なご貢献に対して、通信教育部教員会は先生を本学名誉教授に推挙申し上げ、3月の第41回卒業式の席上、名誉教授称号の授与がなされた。先生はご退職されたのではあるが、先生が身をもって示して下さった「学生第一」の精神と行動は、不滅のものであり、後に続く通信教育部教員である私どもが鑑とすべきものである。

尾熊先生が、これまでも増して、益々ご壮健であられ、ご活躍されることを深くお祈り申し上げ、本記念号の献呈の辞としたい。

2015年10月2日

尾熊治郎教授のご退職に寄せて

仰ぎ見る人間教育の体現者

有里 典三

また一人創大通教部から名物教授が退職された。その温顔がなんともいえず魅力的であった。日に日に寂しさが募る思いがする。尾熊先生とは、通信教育部の専任教員として、4半世紀の時間をごいっしょさせていただいた。私にとっても決して短くはない人生の貴重な時期に、尾熊先生からは公私にわたりさまざまなご教示とご鞭撻をいただいた。今、心からの感謝の意を表させていただきたい。先生の御退職に際し、われわれ後進が何を継承しなければならないかをじっくりと考える意味で、私の心に残っている思い出の一端をここで振り返ってみたい。

1989年（平成元年）の3月29日。新任の助手として採用が内定していた私は、先輩の専任教員の方々とお会いするために、旧通信教育部棟の2階にあった共同研究室をはじめて訪問した。そこで、当時まだ専任講師であった尾熊先生とはじめてお会いした。先生は40代の半ば頃であったと思う。先生の第1印象は、温厚で人情味のある教育者というものだった。その後、交流が深まるにつれ、後輩思いの誠実な方という印象が強まった。また、哲学がご専門であることから、要領を追わず、常に物事の本質を問題にされる方だということがわかってきた。特に感銘を受けたのは、言葉の端々に通信教育部に対する熱き情熱が脈打っていたことである。

尾熊先生は、平日にはいつも夜の8時過ぎから11時頃まで、ご自分の研究室で熱心に講義の準備をされていた。私が助手から専任講師の頃のことだが、当時私の研究机や書棚は共同研究室の奥まった窓側の一角に設置されていた。通教の共研は、人の出入りが激しく専任教員のサロンのような場所になっていた。それで、授業が終わる午後6時ぐらいまでは集中して仕事ができなかった。（もっとも、そうした家族的な雰囲気が通教部の強みでもあったのだが）。そこで私は、研究は午後6時以降から深夜までと割り切って共研の奥で研究や日々の業務を行っていた。まだ30代の前半から中盤の頃である。体力にも自信があったので、週に1～2度は共研に泊まり込んで朝方まで研究に没頭した。尾熊先生は私のそんな姿を見て、「有里先生は瞬発力があるね。今は忍耐強く時を待つことだよ」とぼつりと言われたことが心に残った。

そんな研究生活が助教授時代に二人部屋になってからも数年続いた。本部棟に移動する1999年の夏までと記憶している。その間、尾熊先生とは夜に共研でごいっしょする機会が増え、頻繁に対話を重ねた。今振り返ると、私にとってはたいへん

に貴重な時間だった。共研での夜の対話を通して、先生は創立者との金の思い出、大学の草創期のエピソード、通教開設の経緯、創立者の通信教育部に懸ける思い、創大生・通教生に対する渾身の激励、人間教育を担う教員の姿勢や研究の要諦など、創大に奉職する教育者として研究者として、心に刻み付けておかねばならないことを数多く教えてくださった。未熟で短気な性格の私にとっては、心に染み入るような指導・激励の一時であった。

教育者としての尾熊先生の最も優れた点は、創価大学から、通信教育部から新たな人材を輩出しようといつも真剣に考えられていたことである。私にはこの点が特に印象的だった。先生の教育姿勢の特徴は、創立者の精神を基盤にして、常にそこから学生の育成、通信教育部の存在意義と発展を発想されていた点にある。私は、「これは並みの教員ではないぞ。創価大学が標榜する『人間教育』とは、こうした本物の教員の、透徹した覚悟をもってしか達成できないにちがいない。まさしく教師こそ最大の教育環境なりだな」と少しずつ「人間教育」への理解を深めていった。先生は開設30周年を記念する座談会のなかで次のように発言されている。真の「人間教育の体現者」としての面目躍如たるものがある。

「強調したい点は、30年前に創立者が示された『人間としての完成』を目指すという創大通教の原点が、現代の教育のあり方そのものを問い直し、その転換を図っていくことになっているんだ、ということですね。……一人ひとりが、『人間としての完成』を目指す生き方を徹底することによって〔教育目的の逆転現象を〕転換していく、そういう大きな歴史的役割を創大通教は担ってきたと思うんです。」(『学は光—創立者の指導集—』p.167参照。)

次に、尾熊先生の研究者としての一面に触れておきたい。先生の大学院時代の研究テーマは、人間の有限性と時間性を突き詰める中で、「人間の生き方・あり方」の本質的なものをとらえ直そうとした「ハイデガーの存在論」である。指導教官は中央大学の斎藤信治教授である。その後、ハイデガーにアプローチする一つの方法としてニーチェに着目されるようになった。先生の研究方法とテーマに影響を与えたのは、西田幾多郎門下の西谷啓治教授である。西谷教授はニーチェのニヒリズム論(ハイデガー・ニーチェ研究)の大家で、創価大学が開学した1971年当時、代々木にあった東洋哲学研究所において3年ほど「哲学演習」を担当されていた。その直系の弟子である刈田喜一郎創大教授からの勧めもあり、西谷教授の演習に参加するようになったと語られていた。

ニーチェは、「生のあり方」すなわち「生と価値の関係」を徹底的にさぐった哲学者として名高い。有名な「ニヒリズムの三段階」を想定し、受動的ニヒリズムから積極的ニヒリズムへ、そして現実を受け入れ、これでいいと肯定しうる生のあり方へと脱皮する道筋を探究した。いわば、ニヒリズムの徹底による自己克服の追及である。そして、ニーチェは西洋思想の伝統を自己批判的に越え出ようとした。そうすることで、西洋思想と東洋の大乗仏教が根本的に出会う場を開いた。私が先生

ご自身の生涯の研究テーマについてお尋ねしたところ、「西谷先生のハイデガー・ニーチェ研究に学びながら、東洋思想の現代的意味や射程を明確にすることです」と一言一言確認するようにお答えになっていた。

社会学を専門にしている私には、先生の深遠な研究テーマを正確に理解する能力はない。しかしながら、私は研究者としての尾熊先生からも多くのことを学んだ。その一つが「問い」のもつ重要性である。先生と対話をするたびに、私の研究テーマについて度々質問され、何度も本質的な問いかけをしていただいた。よく「問いの意味を問え」といわれていたことを思い出す。問いの意味を考え、物事の本質を抉り出すような問いを立てることの大切さを強調されていた。若い頃の私は、重厚な学問の雰囲気、優れた教養主義の雰囲気が横溢する先生の研究室で、そうした哲学的な刺激を受けるたびに途惑うばかりであったが、内心ではとても楽しい満ち足りた気分を味わっていた。なぜなら、非暴力運動の指導者マハトマ・ガンジーが指摘したように、真理の探究と把握には大きな歓喜がともなうからである。

もう一つ研究者として大きな影響を受けたのは、先生が異なった考えの持ち主であってもこだわりもなく容易に対話をされる姿だった。対話をしているうちに、いつの間にか相手を巻き込んでしまわれるのだ。個性がぶつかり合い人間関係がギクシャクした場面でも、尾熊先生がそこにおられると不思議と雰囲気が和むことが多かった。まさしく日常生活における潤滑油の存在であり、人と人をつなぐ連結器のような才能をもっておられた。今思えば、「対話の達人」だったことがわかる。創立者はことあるごとに「対話の重要性」や「対話のあり方を問うことの重要性」について言及されている。決してことばの呪縛にかかってはならない。独断と偏見で対象を固定的に見てはならないと。しかし、こうしたエゴに対する執着を超えた柔軟な態度を維持することは実際には難しい。考え方や性格の異なる相手に寛容でいられるほど人間は忍耐強くない。先生は「対話のあり方」について、哲学的にも実践的にも、何か信念と教訓をおもちであったと想像している。

尾熊先生は、ご退職後の今も、「NPO 法人 滝山城跡群・自然と歴史を守る会」（在籍者数65名）の副理事長として活躍されている。今年の8月で結成満10周年の佳節を迎えられたそうだ。前身は「郷土を知る会」という地域住民の親睦団体であったが、先生ご自身が発起人となり著名な城郭研究家の協力を得て、うずもれている地域文化を蘇らせようと長い間尽力されてきた。着実に組織も発展し、今では隣接するあきる野市や昭島市にも会員の輪が広がっている。このように、人をまとめる行動力も、実は先生の隠れた才能の一つである。忍耐強く裏方に徹しながら誠実に事を処理していく能力である。先生の行動力に溢れた姿はいつ見ても若々しい。先生、これからもますますお元気でご活躍ください。私も創大通教部の専任教員の一人として、先生に負けないようにこれからも精進いたします。そして、創立者の精神を我が心とする真の「人間教育者」に成長したいと決意しています。今後とも、通信教育部に対する変わらぬご支援をお願い申し上げます。尾熊先生、長い間、本当にありがとうございました。 以上

尾熊治郎教授のご退職に寄せて

果てしなき探究の対話 —尾熊治郎、その人と思想—

坂本 幹雄

尾熊治郎先生には、公私にわたり四半世紀以上にわたって、たいへんにお世話になりました。謹んで深く感謝の意を表しつつ、ここでは主として私が尾熊先生とかかわった仕事＝教育＝研究＝その他に関して記していきます。それによって「尾熊治郎一人と思想」の一端を明らかにしたいと思います。

1. 哲学する！— 哲学入門物語

経済思想史専攻の私は、本学通信教育部に奉職後、同僚となった哲学専攻の尾熊先生に「これ幸い、哲学を教えていただける」とばかりにいろいろと質問しました。尾熊先生はいろいろとお話ししてくださるのですが、「何と！ いつも答えがない！」。Aと考えられる、Bとも考えられる……Nとも考えられる。かくして私はいつもイライラするばかりでした。「問いのみあって答えなし。やれやれ、質問してもどうせ答えは得られない」と当初は諦めてしまいました。

しかし、そのうちそもそも尾熊先生に答えるつもりはないのだと気づきました。哲学は問いのみあって答えなし。果てしなき知の探究があるのみ。尾熊先生いわく「脱皮変容不断自己革新……」。私は、あらためて哲学は「哲学する」と動詞で表現した方がよいと思うようになり、その晦渋な文章と同様の難解な発言ぶりの尾熊先生に対するイライラ感が消えました。かくして哲学を「哲学する」と動詞で捉えてから尾熊先生との哲学対話を楽しむことができるようになりました。

「経済思想前史としてプラトンの分業論があります。「汝自身を知れ」とは自分の職業を弁えて分を尽くせという程度の意味でしょう。あなたは大工であって、靴屋ではないとか……。「無知の知」だったらアインシュタインの方がわかりやすくはないですか……」と仕掛けます。これで哲学者尾熊先生が引き下がるはずはありません。尾熊先生は「ソクラテスの「汝自身を知れ」、「無知の知」と関連するデルフォイの神託には深い意味があつて……」と説きはじめます。

創価教育の創始者「牧口先生の「学は光、無学は闇」の精神は、プラトン由来でよろしいのでしょうか」

「実はその点はよくわかりません」

「思い込みはよくないですね」

「そうだね」

「洞窟の比喻ばかりだと……」

「そうなんだよね」

「そういえば、まずナレッジとオピニオンのような議論に焦点があたるせいか、洞窟から出る方ばかり議論されますが……」

「そうだね」

「Keyes (1966) の『アルジャーノン』のエピグラムは出入りをあげて印象的ですね」

「そうなんだ」

「洞窟から出たときと戻っていくときとどちらが重要なのかしら」

「それはやはり合体して議論すべきでしょうね」

「……」

「ハイデガーによれば、人間は世界の中に投げ出されています」

「世界の中に、私はいる。私はある……ですか」

「人間は「現存在」であり、「現存在」は「世界・内・存在」として生きる……」

もしかするとこのあたりにあるんだな、尾熊先生の晦渋さの淵源は……

「現存在は自己の根源的な生の忘却者です……」

「人間だけが忘れることができる。動物に忘却はない。「忘却とは忘れ去ることなり」。これは意味がちがうか。失礼しました。話の腰を折ってはいけませんね。それで……」

「今度のガイダンスで、ラクダ・獅子・幼児をあげて人間の成長・精神の成長を話そうと思います」

「自己超克ですかあ」

「まあね」

「永劫回帰だとか超人だとか難しくならないですかあ」

「まあ、さわりだけでもね」

「尾熊先生、最近、必要があって『ツァラトゥストラ』を訳をかえて読み直しましたが、意外に面白くて、わかりやすかったですね」

「翻訳はいくつかあるよ。ニーチェはわかりやすいよね」

「ええっー！」

「ぎりぎりのところで考えていたからね」

「……」

こんな感じで、四半世紀以上にわたって、プラトン、ハイデガー、ニーチェ、イスラム教、西谷啓治宗教学、牧口価値論そしてガンディー等々、哲学と宗教学について実にさまざまなことを教えていただきました。次にそうした中から尾熊先生が

ご退職直前に再び取り組まれるようになった牧口価値論研究について紹介しましょう。

2. 牧口価値論研究

尾熊先生は寡作でした。その中で私が代表的な論文としてあげたいものは、『東洋学術研究』の特集「牧口常三郎の〈価値論〉研究」に収録された尾熊（1986）です。牧口価値論は前期と後期とに分けられます。牧口価値論では真理と価値、認識と評価が峻別され、真・善・美の価値のトリアーデから真を外して利を入れ、利・善・美のトリアーデに変換されています。経済学史上の主観的価値説とも類似しています。これがよく知られるようになった牧口価値論ですが、これは前期の価値論です。後期の価値論は宗教を軸に据えて大きく変化しています。同特集の中で、前期価値論については関（1986）が主として左右田喜一郎の経済哲学との関連から論じています。これに対して尾熊論文は後期価値論に焦点をあてています。後期価値論は真理＝価値の文脈が復活しています。ただし真理の価値は変化します。それが問題です。尾熊論文は牧口思想における真理の価値の変化・相対化を日蓮教学の五重の相対論や（なぜかカントやベルグソンではなく）ニーチェ哲学との関連から把握しようとしています。

私は経済学徒として、やはりまず関（1986）を参考に経済学の観点から前期牧口価値論の形成にアプローチしようと思っています。当時の経済学書や左右田哲学との関連を再検討し、その上で尾熊（1986）を参考に前期から後期への変化をたどって牧口価値論の形成と構造をまとめてみようかと考えています。

3. ザ・会議！

尾熊先生の会議に臨む姿勢は、まさに模範となるものだったと思います。尾熊先生は会議における発言率がたいへんに高かった。その分、時には発言の限界効果は逡減的だったかもしれません。しかし組織の一員としての主体性と責任感からのその情熱・姿勢に誰もが学ぶべきではないかと思います。「尺進あって寸退なし」、「どこまでも粘り強く」、「会議は踊るは許さない」。発言の結果、自分の仕事が増えるなどと脳裏をよぎりかねない私などとはちがうでしょう。ともかく尾熊先生はガンディー主義だったのでしょう。人生は奉仕＝自己犠牲＝宗教実践です。

尾熊先生の性格を浮き彫りにするため、尾熊先生と私の発言の性質・次元・視点を比較してみましょう。そうすると著しく異なる特徴・正反対・「真逆」の特徴があります。尾熊先生は主として理論・長期・理想主義・ロマン主義・ヴィジョン・意味・意義・抜本改革等々。私の方は主として実践・短期・制約条件・実行可能性・コストパフォーマンス・インセンティブ・漸進改革等々。

このように尾熊先生と私は対蹠的ですからガチンコ・バトルのときもありました。「ヴィジョンをしっかりと打ち出して、〇〇を進めていかなければなりません」

「それはコストがかかるわりに、成果が見込めませんね」

「尾熊先生と坂本先生が何かわけのわからないことを言い合っている」という声が……

しかし共同戦線のときもありました。いろいろあっても、結局はこちらの方が多かったように思います。

「尾熊先生、その〇〇の件は前回、たしか否決されましたよね」

「うん、そうなんだけど〇〇は大事だからね」

「たしかに。でも同じことを言ってもだめですよ」

「そうかな」

「そうでしょ。何か工夫しないとまた同じことですよ」

「たしかにそうだね、どうすれば？」

「じゃあ、どうしてもまたやるというなら、尾熊先生、□□で提案してください。

私が△△案で具体的に補足しますから」

「じゃあ、それでいきましょう」

これでだめでもさらに「ええっ、また同じことを提案するんですか」

「そう。ここは何度でも言わないとね」

「しょうがないなあ。じゃあまた何か考えましょうか」

「そうして」

こんなパターンは実に多かった。尾熊先生は決して諦めないのです。

今にして思えば「着眼大局・着手小局」、補完的關係で案外よかったのではないかと思います。尾熊先生と議論ができる機会がなくなり、この点でも淋しくなりました。

4. 共同研究プロジェクト！

本学通信教育部では2003年から、「人間学コース」「平和環境コース」「文学歴史コース」「健康生きがいコース」の4コースを立ち上げました（2008年終了）。尾熊先生はこれに並々ならぬ情熱を傾けました。尾熊先生の熱意に触発されて、私も講師の確保や講座の担当に参加し、楽しい思い出の1つになりました。

とりわけ私がご紹介した「健康生きがいコース」の「自分を磨くファッション」の講師沖倉康子先生はズバズバとダメ出しをしてとても強烈でした。「好きなカラーと似合うカラーはちがいます。自分を知みましょう」。たまたまその沖倉先生に尾熊先生のファッションチェックをしていただきました。尾熊先生はグリーン系が合うとのことでした。素直な尾熊先生は早速、グリーン系のスーツを着込んで、確かにとてもお似合ひでした。さらに気をよくした尾熊先生は、地元のセミナーの講師に沖倉先生をお招きしました。私もそのセミナーのお手伝いをしました。これも楽しかった思い出の1つです。

われながら意外なことに尾熊先生との共同論文が1本あります¹⁾。尹・佐瀬・坂本編（2006）『高齢学へのプレリュード』の最終章「高齢思想のフロンティア」を

第1節「人間は途中で死ぬ」(坂本)と第2節「変容する老いと成熟の間―「近代批判」に関連して―」(尾熊)として分担執筆しました。私の書いた内容はエッセイのようなものですが、記録・思い出として残りたいへんうれしく思っています。

本学会は、本学創立者思想研究プロジェクトとして通信教育部学会編(2005 - 2007)『創立者池田大作先生の思想と哲学』全3巻を発刊しました。本学会ならではの学際研究書として執筆者は20名以上になりました。尾熊先生にはこの執筆者の確保にご尽力いただき、編集担当であった私はほんとうに感謝しております。ほんとうに助かりました。プロジェクト成功の大きな功労者です。また創立者関連文献をいつも惜しまず快くご提供いただき、この点でも助けていただきました。

各巻が完成するたびに、尾熊先生と高村忠成通信教育部長(当時)と私の3人で、都内へと創立者へのご報告と献呈に出かけて行きました。創立者から望外の励ましをいただき、尾熊先生との最高の思い出になりました。

5. 危機!

2011年3月11日東日本大震災による福島原発事故! このとき尾熊先生も私も原発のことを調べまわりました。この時の対応が尾熊先生と私とはまたまた対蹠的でした。尾熊先生は、なぜかチェルノブイリ原発事故や高木仁三郎先生の著作のリサーチに集中していきました。私は、生活防衛とばかり食材の安全性や放射線測定器市場の方に集中していきました。

「ええっ、先生、今は福島でしょ!」

「うん、でもチェルノブイリの教訓が活かされていないから……」

哲学者尾熊先生のミネルヴァの梟的センスだったのでしょうか、所詮、世俗学問の経済学徒である私には、そのあたりのことはよくわかりませんでした。しかししばらくすると、「食の安全は今、どうなんだろうか」と聞かれました。

「ええっ、何でまた今ごろ、だから言ったのに……」

「いや、孫が心配でね……」

「そうでしょー」

6. 本・本・本……本の森、あるいは本の本による本のための本!

尾熊先生は大の蔵書家です。尾熊先生を語るにこの点を外すわけにはいきません²⁾。研究室は本の森状態。本の本による本のための本…… 私は経済思想史専攻の文献学ですから蔵書は多い方ですが、尾熊先生にはとてもかないません。さまざまな全集の量も私の何十倍もの蔵書があったはずです。全集の全集による全集のための全集…… すっかりインターネット時代になって、デジタル・ライブラリー派・検索依存症気味の私と尾熊先生との蔵書量というアナログ・ディバイド(?)は開く一方だったと思います。

好奇心無限。気になった本や雑誌をすぐに購入されている尾熊先生の姿にたびた

び驚かされました。

「ええっー、もう入手している、はやっ」

尾熊先生は、研究費だけでは全然たりず、身銭を切ってお金を惜しまず本を買うタイプの先生でした。

「そんなに買って大丈夫ですか。ご家族が心配しませんか……」

「そろそろ、そうなんだけどねー……」

尾熊先生は、2012年頃から、研究室が蔵書で埋もれたせいか、震災で本棚が倒壊した影響があったのか、共同研究室にすることが多くなりました。共同研究室に本や学生のレポートが山ずみとなって「実効支配」「第2個人研究室」などと冗談・話題になりました。しかし私にとっては、最後にお話しする機会が増えて、結果的にとても良い思い出になりました。それに共同研究室には何よりも尾熊先生がいつも新しく購入してきた本が置いてあります。

「拝見します」

「どうぞー」

しっかり（ちゃっかり？）チェックできて書店の新刊書コーナーはオーバーにしても、ある種の分野については、それにつながる感がありました。

7. さらに本よ

尾熊先生のご退職に際し、研究室からの撤収にともなう蔵書処分が当然ながら大問題となりました。ご自宅にすべての蔵書を引き上げることはできません。床が抜けてしまいます。尾熊先生がご自宅を住宅メーカーに調べてもらったところ、すでに少し傾いているそうです。

「先生、持ち帰っても全部は読めないでしょう」

「そうなんだけどね」

「ある程度は処分するしかないですよ」

「そ、そうだね」

蔵書家がスーパー蔵書家に残酷なことを言う。

尾熊先生はあれこれ思うのでしょうか、撤収が一向にはかどりません。

「私も研究室の蔵書を整理しますから。尾熊先生、古本屋さん呼びますけど、いいですね」

「そ、そうだね。じゃあ、お願いしようかな」

尾熊邸の状況は他人事ではありません。わが家も心配になりました。「愛読書なんてそうないんだから。二度読んだ本なんてそうないんだからね」と自分で自分に言い聞かせる。「断・捨・離、センチメンタル・バリア・フリーかあ」

「そうそう」とスペースが広がるから、家族はうれしそうです。「所詮、スペース確保はマネーの問題だ。大量の蔵書を維持するには時間とコストがかかりすぎる

んだ……」とひとりごちるのです。『決断の3時10分』と『3時10分、決断の時』、『勇気ある追跡』と『ツルー・グリッド』…… マニアックなDVDも見たばかりの『アメリカン・スナイパー』の映画のパンフも処分だ…… ビデオテープもCDもDVDもその他も……「決断、勇気、さらば友よ……全部意味がちがうか」

かくして尾熊先生のご退職をきっかけに私自身が自宅の蔵書類を何千冊か処分しました。さよなら、本の本による本のための本。何となく眺めていた本、何かアイデアの源泉だったかも。そんなこともないか。眺めたり、所蔵意識で何か癒しになっていたのでしょうか。「あれ、こんなところにあったのか」と隠れていた本。

「未練がましそうね」

「そりゃ、そうだよ」

とりあえず研究対象以外の本はさようなら。さよなら愛蔵書。さよなら本。

8. ガンディーと宗教をめぐって

2014年9月、私はガンディーの経済思想をまとめるために、その宗教についてあらためて調べてみることにしました³⁾。ガンディー思想は宗教に包摂されているからです。そう話すと尾熊先生は、研究室からガンディーの著作や研究書をドサッと持ってきてくれました。「ガンディーの宗教の立場は宗教多元主義ということですが、どのような性格のものなんでしょうかね。スーパー宗教、メタ宗教でしょうか……」。すると今度は、ジョン・ヒックなどの宗教多元主義の文献をまたまたドサッドサッと持ってきてくれました。

かくしてガンディーの宗教論を契機として、21世紀の宗教の可能性について、延々と議論することになりました。

「先生、ポスト世俗社会だというのに、宗教学はいったい何を問題にしているのですか。マジョリティーの無宗教者に冷たくないですか？」

「確かにそうだね」

「当然なのかな」

「それに民間信仰などに対してもそうだね」

「そうなんだ」

「無宗教は厳しいね」

「デュルケムは宗教なき道德にチャレンジしましたね」

「デューイの『だれでもの信仰』あたりが重要になってくるかな」

「ヒックの排他主義⇒包括主義⇒多元主義⁴⁾の宗教進化論のようなものは単純すぎないですか。宗教が宗教である以上、そのアイデンティティーにかけて、排他主義も、包括主義も消えるものではないでしょ」

「それはそうだね。でも宗教間対話を進めていかなければなりません。互いを尊重し、共通点を探っていかなければならないでしょう」

「宗教間対話なんて必要なんですか」

「何ということ、現に……」

「失礼しました。そうすると結局は、多元主義でいかざるを得ませんね。どうにか折り合いをつけていかなければと……」

「そうしないと宗教間対話は進みません」

「そうすると各宗教の教義と実践が変化するんですか」

「随方毘尼といいます。そうなるところもあります。キリスト教も時代の変化に対応して変容してきました」

「それはわかりますけど、ディマーケイションがどうにも気になるなあ……先生、教えて」

「私にもそれはわかりません。個別問題になります」

「……」

「ガンディーは神の声を聞いたと言っていますね⁵⁾。内在と超越といいますが、神観念は私には持ちようがないのですが……。超越なんていう概念なしではいけないんですか。不断の自己革新だけじゃだめなんですか」

「そうはいかないね」

「脳科学と宗教学の共同・対立はどうなっているんでしょうか⁶⁾。ヒックは脳科学には批判的ですね⁷⁾」

「そうだろうね」

「結局、またまたむかしよく議論した脳と心とか、脳と意識とかに戻るのかあ……私はどこにある……」

「そうかもね」

「あいかわらず脳科学ブーム続いていますね。たしかにガザニガとかダマシオとか面白いですね。あっ、先生、授業にいきましょう」

「おお、そうだ！」

もう朝から会うなり授業にいく直前まで、つつい白熱対話となってしまうのでした。

9. 対話は続くよどこまでも—

乱反射しつつ、対話は続くよどこまでも— 尾熊先生は論文などの文末にハイフン—を多用していました。意味は分かりません。私はこれまでにたぶん使ったことがありません。今回、記念の意味を込めてハイフンをまねてみましょう。私が今後、使うことはまずないでしょう、たぶん—

またハイフン多用のほかに尾熊先生の著作の大きな特徴は、文献学の私もびっくりのその異様な長文引用でした。対談の引用もあり、さらにそれが長文引用となつて、二度びっくりしました。せっかくですから私も対談から引用してみましょう。

敬愛するサーラ・ワイダー先生に対話に関する素敵な文章があります。長文とい

うほどではないですし、「まえがき」で対談内のものでもないのですが、記念の意味も込めつつ、次に引用します。

「対話」とは「旅」です。いくつかの言葉のやりとりから会話は始まります。この思考は、どこに向かうのか。あの意見は、どう深まっていくのか。私たちの思考は、立ち止まることはなく、また立ち止まらせてもなりません。私たちが、自由に率直に物事を考えるとき、特に他の誰かと一緒に考えているときに、行動が生まれます。そういう奇跡の中の奇跡が起こるのです。考え方が変わり、違う見方を学ぶ。他の人と活発に考えを分かち合うことで、自分一人では辿り着けなかった場所に行き着くのです。」(ワイダー・池田 (2013) 9頁、Wider, Ikeda(2014) p. xix)。

尾熊先生との対話は続くよどこまでも、といいたところですが、ご退職されて今までのようにお話しできずまことに淋しくなりました。

最後に尾熊先生があつてこそ、私の研究と教育が広がり深まったと改めて深く感謝し拙稿を捧げます。「長い間お世話になり、ほんとうにありがとうございました」。末尾ながら尾熊先生のご健康とご長寿を心よりお祈り申し上げます。

注

- 1) 尾熊先生と私の共著として、他に佐瀬・尹編 (1994)、佐瀬・尾熊・尹・有里・坂本・栗原 (1995)、創価大学通信教育部学会編 (2005-2007) があります。
- 2) 他に滝山城研究があります。本学会では尾熊先生のご尽力で城郭研究家の中田正光先生を招いて講演会や研究会を開催いたしました。中田 (2009)、本誌「活動日誌」参照。
- 3) 坂本 (2015) 参照。
- 4) Hick (1985) 参照。
- 5) 坂本 (2015) 参照。
- 6) 「尾熊先生、中野信子先生の『脳科学から見た祈り』(中野 (2011)) というエッセイはさわやかですね」。そういうと、翌日には、その本を早速、購入して「これだね」と持ってきました。またもや「ええっー、はやっ」。2・3日後、さらに中野先生の本を何冊か買ってきました。「ええっー、また買ったのー……拝見しまあす」「どうぞー」
- 7) Hick (2006) 参照。

文献

* 古典等は省略します。

Hick, John (1985) *Problems of Religious Pluralism*. London: Macmillan. 間瀬啓允 訳『宗教多元主義—宗教理解のパラダイム変換』法蔵館、1990年。

—— (2006) *The New Frontier of Religion and Science :Religious Experience, Neuroscience and the Transcent*. New York: Palgrave Macmillan. 間瀬啓允・

- 稲田実訳『人はいかにして神と出会うか—宗教多元主義からの脳科学への応答』法蔵館、2011年。
- Keyes, Daniel ((1966) 2005) *Flowers For Algernon*. Mariner Books :New York. 小尾美佐訳『アルジャーノンに花束を』早川書房、1989年。
- 中野信子 (2011)『脳科学から見た祈り』潮出版社。
- 中田正光 (2009)「戦国サバイバルから平和令へ—滝山城を題材として—」『通信教育部論集』(創価大学通信教育部学会) 所収 第12号 1 - 18頁。
- 尾熊治郎 (1986)「後期牧口価値論の世界—「法」主体の自己更新」『東洋学術研究』所収 第25巻第2号 76 - 94頁。
- 尾熊治郎・坂本幹雄 (2006)「高齢思想のフロンティア」尹龍澤・佐瀬一男・坂本幹雄編『高齢学へのプレリュード』所収、232 - 264頁。
- 坂本幹雄 (2015)「ガンディーの宗教思想—ガンディー経済思想研究序説—」『創価大学人文論集』(創価大学人文学会) 所収 第27号 33 - 56頁。
- 佐瀬一男・尹龍澤編 (1994)『人権はだれのものか』有信堂高文社。
- 佐瀬一男・尾熊治郎・尹龍澤・有里典三・坂本幹雄・栗原淑江 (1995)『女性学へのプレリュード』北樹出版。
- 関順也 (1986)「左右田哲学と牧口価値論」『東洋学術研究』所収 第25巻第2号 19 - 38頁。
- 創価大学通信教育部学会編 (2005-2007)『創立者池田大作先生 of 思想と哲学』全3巻、第三文明社。
- サーラ・ワイダー・池田大作 (2013)『母への讃歌 詩と女性の時代を語る』潮出版社。Wider, Sarah., Daisaku Ikeda (2014) *The Art of True relations : Conversations on the Poetic Heart of Human Possibility*. Cambridge : Dialogue Path Press.

(2015年4月2日)

最終講義

「不在化」の時代と宗教の構造的変容 —宗教と歴史との「再結合」の時代—

尾熊 治郎

はじめに

本日の「宗教学入門」（第15回目）の公開授業をもって、「最終講義」に替えさせていただきます。15回の授業の最終回でもありますので、本日の「最終講義」に御出席頂きました皆さんの中には何かと解りにくい処もあるかと思いますが、ご容赦いただければ幸いです。こうした形での最終講義について御了解をいただき、晴れがましい場をお持ちいただきましたことに対し、通信教育部の皆様方に心からの御礼を申し上げます。本当に有難うございました。

改めて、この場を借りて創立者に心よりの御礼を申しあげさせていただきます。また、ご縁のありました諸先生方、並びに、学生、卒業生の皆様方にも心よりの御礼を申し上げます。

古来、「最初と最後を一つにする」ことが出来る者は幸せである。「成長し続ける者は幸福である」といわれます。然し、いまだ、なお未熟な「途上にある者」です。今日をまた、私自身にとりまして、新たな始まりの時とさせていただければ、と考えております。

私事に及びますが、“今・ここ”で、こうして最終講義をさせていただくに至った経緯の一端を簡潔に回想させていただきます。中央大学文学研究科の院生時代、斎藤信治先生のもとでのハイデガー研究の最中に西谷啓治先生(1900～1990)の『ニヒリズム』(1949年)、更には『宗教とは何か』(1956年)という、今では古典ともなっている名著に偶然に出会いました。その後、本学に助手として奉職させていただいた際には、期せずして、西谷先生の命脈を継ぐ直系の弟子である刈田喜一郎先生との不思議なご縁をもたせていただきました。また同時期に、東洋哲学研究所の草創の時代の研究員にさせていただきました。その仕事のなかで、東洋哲学研究所主催の「哲学演習」などの機会を通じて、西谷先生とは誠に貴重な触れ合いの場を幾度となく持たせていただきました。今振り返ると、在り難い、誠に稀有な出来事でした。こうした度重なる不思議な因縁をも回想しつつ、本日の最終授業においては、西谷宗教論の一断面に触れさせていただきます。

本年度の「宗教学入門」の主要なテーマでもある「不在化」の時代と宗教の構造変容、とのテーマに即しつつお話をさせていただきます。そのことが創立者の思想の成り立ちの場の一端を宗教基礎論的な立場から際立たせることにも通じているとすれば、望外の幸いでございます。

考察の視座：現代世界に生じたグローバルな「宗教復興運動」の現在、どのように受け止められようとしているのでしょうか。宗教現象に対する基礎的な理解は、時代を生きる上での避けがたい教養となっています。現代世界に生じる宗教的な諸現象についての宗教基礎論的な立場からの理解は、どのような意味を持つのでしょうか。

西欧近代世界の成り立ちの場そのものに孕まれていた構造的な危機の諸問題は、21世紀に入り、よりグローバルな構造化された避けがたい危機、という形で一段と身近なところに噴出しています。近年では、特に1970年代あたりから、改めて現代世界における「宗教の役割」という基礎的な問題が問い直され続けてきました。

本日の最終講義では、こうした大きな精神史的な構造変容の渦中に於いて、改めて西谷宗教哲学（特に「宗教基礎論」）のもつ現代的意味とその射程について捉えなおす機会とさせていただきます。

<宗教基礎論的省察の意味>：宗教の成り立ちの場そのものの構造とその働きについて根本的に省察し、そこに見出される歴史的、構造的な諸問題を解きほぐしつつ内発的・脱皮的に構造的変容をもたせようとする。

西谷啓治（1900～1990）は、1936年の論稿「宗教・歴史・文化」の中で「歴史的宗教の本質的生命を、既に克服された古き諸観念との癒着的結合から開放し、その生命の発展すべき地平を開拓する」（『宗教・歴史・文化』1936年、『根源的主体性の哲学』所収、著作集、第1巻、p.45）ことが宗教哲学の任務であると規定していた。

1. 「現代世界」の危機的な問題状況の只中に投げ出されている宗教―宗教基礎論の立場からの省察

西欧近代文明そのものの、いわば、終末期ともいえる「現代世界」は、グローバル化する構造的な危機の諸問題群に強いられつつ、危機の自己克服に向けた様々な形での「宗教復興」への運動を繰り返し経験してきた。

21世紀の現代世界は、なお、そうした繰り返される「宗教復興の時代」の渦中にあるといえるのか。そうであるとすれば、そこに於いて見え出られなければならない基礎的な問題とは何か。20世紀以降の「イスラーム復興」に象徴的にみられるような諸宗教の復興運動とその潮流は、「宗教基礎論」の立場からは、どのように見通され、位置づけることが出来るのであろうか。激変する現代世界の「水底の動き」（トインビー）は、「歴史の遠近法」的な大局においては、どのように見定められるのであろうか？

(配布資料、参照：西谷啓治「現代における宗教の役割」、「宗教の役割研究会」基調報告(1972年)、著作集第16巻 p.230、レジュメ、15巻 p.168 トインビー・池田対談(1972～73年)『21世紀への選択』第3部第2章「近代西欧の三宗教」：対談のこの箇所では、トインビーの『一歴史家の宗教観』(トインビー著作集4、社会思想社、1967年)のエッセンスが語られている。)

<「ニヒリズム」(不在化、空洞化)の時代に生じた「宗教復興」—その行方を問い直す>

西欧近代の影響下にある多彩な歴史と、その「根本動向」に見いだされるニヒリズム(不在化、空洞化)という出来事に注目しつつ考察する。中でも「現代的なニヒリズム」の形は、現代世界においては「宗教不在の現代・現代不在の宗教」(西谷啓治)という表・裏一体の構造化され形として捉えることができる。そこに、現代人の置かれている避けがたい根本的な境位がある。

→特に1970年代以降、グローバルな危機の身近なところでの顕在化に応じつつ、近代化論・世俗化論の予想に反したグローバルな「宗教復興」という出来事が噴出してきた。そうした渦中で改めて、宗教(性)の「現代世界において果たすべき役割」が求められてきた。

近代化・世俗化の行き着こうとする窮みに、世俗化論の予想に反して生じてきた各種の「宗教の再生・復興」の形とその行方は、宗教理解に際しての大きな問いとなってきた。(以下では、宗教基礎論的な立場からの考察を試みる。：本年の「宗教学入門」の基調をなすテーマである。)

<「ニヒリズムの時代」：(救いの根拠、目覚めの場合そのもの不在化・空洞化)の極みに生じた各種の「宗教復興運動」と、そこに孕まれている問題場面(最終回に際しての半期の授業の「立ち回り」)>

・「我々は、通常の虚無が克服されるはずの宗教の次元にまで虚無が忍び入った時代に、つまりニヒリズムの時代に生きている。その様な時代状況の中で宗教がいかなる方向を示しうるのか、宗教はどのようなものでなければならないのか。」(講義用テキスト、『新しい教養のすすめ—宗教学』p.10)

→現代世界の直中に深く食い込んできた「無は、根源的な意味での巧業の原点」でもある。グローバルな危機を介して東西、さらには南北の伝統的な精神地盤そのものの根本的な変容の場を開こうとしている。(刈田喜一郎「ニヒリズムと宗教性—ニーチェの場合—」『哲学』p.266。そこでは、ニーチェと仏教との幾つかの接点を踏まえた、『ツアラトゥストラ』の要所についての実存的な解釈が試みられている。)

・トインビーの宗教史観と現代：人は宗教的な空白に耐えることができない。17世紀以降のキリスト教の衰退によって生じた「宗教的空白」は「西欧近代の三宗教」によって埋められようとしてきた。ナショナリズム、科学技術信仰、共産主義の

「近代の三宗教」は、いずれも代替宗教（疑似宗教）として生じてきたといえる（『21世紀への選択』第3部第2章「近代西欧の三宗教」）。そこに生じてきた問題場面を踏まえた、現代世界に耐え得る新たな文明、宗教の条件が究明されている。

→現代世界に復興してくる伝統的な宗教、あるいは疑似宗教は、いずれも、「不在化」するという時代の歴史的な環境の中に埋め込まれており、その時代の価値観の影響を受けざるをえない。とすれば、時代に支配的な価値観による「自己呪縛」からの自己解放は、一度は、受け入れてきた伝統的あるいは時代の価値観そのものの「自己解体」の道を歩まざるを得ない。時代の課題を担い、抗いつつ生きるという中で、伝統を受け取り直し、再解釈することが求められている。

→再説、現代世界の歴史の根本動向として繰り返される中心軸の「不在化」「空洞化」に根差した諸現象

最も身近な基礎的な関係の成り立ちの場そのものの中に、根本的なズレ・歪み・転倒が深刻な形で生じてきている。現実世界の基礎となっている政治、経済、科学・技術、教育などの成り立ちの場そのものを、その根元から崩し、断ち切る「悪の力」、「魔的なるもの」の力が随所に増大している。それらの諸悪（トインビーは、貪欲・戦争・社会的不公正・人為的環境を挙げている）に抗しつつ克服する力を与える、新たな宗教が求められている。

→そうした「不在化する」という、現代世界の動向の中に埋め込まれた「宗教復興運動」は、絶えず時代の支配的な価値観に左右されがちである。新たな宗教復興運動そのものの中にも基礎的な価値秩序の混乱、歪み、更には転倒が生じてくる一。

→「宗教的精神」に貫かれた宗教的人間にとっては、宗教は絶えざる「自己克服的」、「自己超越的」な働き方として現れるはずである。そうであったとしても、人間の本性に根ざす根深い自己中心性は、人間と宗教との関わり方そのものを容易に転倒させ、宗教の排他的、独善的な「自己目的化・自己絶対化」を生じさせ勝ちとなる。

現代世界に噴出する「待てない人々」（「宗教的原理主義者」）の過激主義、集団主義は、悪を自己の「内なる悪」としては見ない。他者の中にもみ悪を見る。それは、現代世界において様々な形で「テロ」として噴出し続けている一。

（配布資料参照：森孝一「『宗教国家』アメリカは原理主義を克服できるか？」（『現代思想』2002年10月号）、「アメリカ宗教から読む21世紀の世界」、『現代世界と宗教』世界書院2000年）

2. 現代世界は、再び、歴史と宗教との「再結合」の時代へ

（＊創価大学生へのメッセージとして）

—現代世界に生じた「宗教復興運動」とその俯瞰—

- 1962年～1965年 第2バチカン公会議の開催：現代のキリスト教世界は、「第2の千年世紀末」を前にして開かれた公会議において「宗教間対話路線」を鮮明にする。
- 1971年 創価大学開学：文明の自己批判として生じた「大学紛争」（1968年）の最中、新たな理念に基づく民衆立の大学として誕生する。
- 1972年、1973年 『生の選択』トインビー・池田対談：時代に呼応する先駆的な「文明間・宗教間の対話」の源流・原型を築くと共に、21世紀に求められている新たな文明間・宗教間対話の在り方を明確にした。
- 1977年 創価学会 第1次宗門問題（「52年問題」）の勃発：伝統教団からの「脱皮的変容・再解釈」とその波紋
- 1978年 イラン・イスラーム革命の衝撃：西欧世界の「近代化論」、「世俗化論」の予期に反し、イスラーム法に基づく「イラン・イスラーム共和国」の誕生。20世紀における「イスラーム復興運動」の高まりを象徴する。
- 1990年 ソ連邦の崩壊とロシア正教の復活：宗教の持つ歴史的な「再生力」を示す。
- 1990年 創価学会 第2次宗門問題（「平成の宗教改革」）：時代と切り結びつつ時代を生きる宗教としては、「伝統の再解釈」は避けがたい必然的な出来事であった。そのことが歴史の直中で明確化される。
- 1993年 創立者、第2回ハーバード講演「21世紀文明と大乘仏教」（主催、ハーバード大学「世界宗教研究所」）：キリスト教世界との宗教間対話
- 1995年 オウム事件：戦後の日本社会に生じた、「精神的空洞」に改めて気づかせる。
- 1997年 イラン、ハタミ大統領の登場：イスラーム世界からの「文明間の対話」の提唱 国連、2001年を「文明間の対話年」に決定
- 2001年 9.11テロ以後：ブッシュの原理主義とビン・ラディンの原理主義との衝突は、文明間・宗教間の対話路線を中断させ、「文明の衝突」を現実化させてしまう。
- 2011年 若者たちによる「ジャスミン革命」と、その後の混迷。「文明災害」としての福島原発事故は「安全神話」を崩壊させた。
- 2014年 グローバル化した「宗教的原理主義者」のテロ（ホームグロウン テロ等）の頻発

- ・ 小杉泰 「現代イスラーム世界」は、いま「非西欧の現代文明」としての新たな「イスラーム文明」創出への産みの苦しみの渦中にあるともいえる。「政治主義的イスラーム」ではなく、日常生活に根ざした「草の根のイスラーム」に注目する中でイスラームの全体像をよりよく理解することができる。
（配布資料参照：小杉泰「異文化をつなぐ知恵—イスラームの倫理と共存の仕組み」2000年）

→一神教における「7世紀の宗教改革」としてのイスラームは、現代世界に生じたウンマ解体（植民地化）の危機を介して、新たな「宗教改革」（伝統の脱皮的な再解釈・自己変容）への胎動期の最中にあるといえるのか？

→「新鎌倉時代」？としての現代的状況：不在化の時代としてのとしての現代世界は、歴史と宗教とが切り合い、現実と仏法とが結びつく時代、宗教的時代へと入っている。

「現実と仏法との分裂ということは、そこに本当の現実感が一方で生まれてきたということ、同時に他方では本当の仏法の本来の姿にだんだんと気づき始めてきたということ、そういう二重の意味を含んでいる。或いはそういう両方向への動きというものが萌し始めてきた……つまり、仏法が現実を貫いてくる、現実が仏法の領域に触れてくる、という切れ会った結びつき……目的とか手段という関係を超えて、両方が切れ会って結ばれるという関係が、どうしても出てこなければならぬ……仏法の超越性というものが……現実の一番深い底を照らし出す生きた力として現実というものの内に働いてくるということ、現実と仏法との結合が要求されてくる。その要求の実現が鎌倉仏教の出現だと思う。」（「日本的なるもの」西谷啓治著作集19巻 p. 33以下）（第3節で再説する。）

3. 「宗教的生」とその根本構造についての理解は、無用な混乱を避けることに通じる。

宗教は、時として国家以上に、人を排他的・独善的にさせる。「自分自身の宗教の枠組みの＜外＞に出ることは、意外に難しいのである。」時代の教養として、宗教現象（宗教の持つ可能性と問題性）に関する基礎論を身につけることが求められている。

自らが特定の宗教の教義や信条に根ざしつつも、他者の宗教的世界観、価値観に対して真摯に身を開き得ているのか、が問われている。「宗教的な伝統の内と外に同時に立とうとする立場」を身に付けようとするときに、宗教基礎論的、本質論（構造論）的な理解を深めることの意味は大きいと思われる。

（配布資料参照、西谷啓治『宗教とは何か』1961年、第1章「宗教とは何か」の冒頭の一節とその解釈：『新しい教養の進め—宗教学』第1章、「現代世界における宗教の役割、第2節」、「宗教の役割研究会」基調報告1972年など）

＜「生そのもの転換」と宗教基礎論的洞察＞

「宗教は生そのものにとっての大問題である。」宗教は、「生における生そのものの根本的転換」として生じる。「人間のうちから宗教というものが起こってくる『もと』を、現在における自己の身上に、主体的に探求する。」

→「宗教とは何であるのか」：裏から見ると「宗教は我々にとって何のためにあるか」（必要性の有無）という問いの段階から→「自身が問いに化する」、「自身の根底

に虚無が現れてくる」：「我々自身が何のためにあるか」という問いの段階へと深まる。そこにおいて、生における宗教の避けがたい「必然性」が自覚されてくる。

自然的・本能的生の段階

↓ ↑

：通常は自然的・文化的生の段階にとどまっている。
それらを超えた「宗教的生の立場」との間には、越えなければならない大きな関（しきい）がある。

文化的生、歴史的生の段階

↓ ↑

「宗教的生（生源）の開け」

：「宗教的生」は独自の領域として成り立っている。宗教は人間をして、その原点としての生命の根源に帰らしめる。その＜大いなる開け＞は、宗教的生（生源）の開けとして多様な生を生かし返す。

「通常我々は、絶えず何かあるものを目掛けて先へ先へと進んでいる。絶えず自己の外の、また内の、何ものかに係わっている。そしてそういう営みそのものが、今いったような自覚を塞いでいる。……我々の生の根底に虚無の地平が開けることは、生における根本的な転換の機である。その転換は、自己中心的な或いは人間中心的なあり方、すなわちあらゆるものに関して我々にとって（ないしは人間にとって）どうかと問う態度から、我々自身が（また人間が）何のためにあるのかという問いへの転換に外ならない。」（『宗教とは何か』冒頭の一節）

＜信仰の逆転—「信」の徹底の難しさ＞

「人間は、自分を捨てて神に仕える生活、仏に仕える生活に入ったという場合でも、そして自分でもそう思い、他の人々にもそう思われる場合でも、なかなか本当には自分というものが捨てきれない。神とか仏に仕えるということとは正反対な、我意我欲が絶えず頭をもたげてくる。……そういう信仰の逆転は、キリスト教でも、一般にどの宗教でも起こりうる。信仰ということのうちに、自分と他とを比較する意識があり、いわゆる『勝他』の気持ちがある限り、神とか仏を私しているような心状、誇り高ぶる傲慢の心が必然的に現れてくると思われる。……信仰といわれるものの内に信仰以前の心、信仰とは反対の心が出てくることである。自分を捨てたという立場が一層深い『我』の立場になる。」（「信仰ということ」1957年 西谷啓治著作集第20巻 p.18）

＜「礼拝的信仰」—キリストの伝統的「神格化」＞

「キリストは十字架の上で、『我が神 我が神なんぞ吾を捨て給うや』と叫んだといわれる。……キリストは隣人のために或いは『人』のために、自己の理想が実現されないのを悲しみ、その悲しみを神に訴えたのである。その叫びの背後には、初め

から人のために自らを捧げた人の一生が在る。これに反してキリスト教徒にとっては、自らの魂の救済が究極の問題であった。彼等が自らを捨てて人の為に働くという時も、それが結局自らの霊を救う所以だからである。彼等が人の為というのは、根本においては自らのためである。自らを捨てるというのも自らのためである。……この相違は一般にキリストの精神とキリスト教の精神との相違である。

キリスト教徒はキリストの如くに生きることよりも、むしろそれを模倣して生きれば救われるという約束の保証者として、キリストを礼拝の対象とした（神格化）。……これは既にキリストの没直後に於いて始まった歪曲であった。そしてキリスト教の教会王国とその神学体系の龐大なる建築は、かかる歪曲の基礎の上に立っているのである。」（「宗教雑感」1928年、西谷啓治著作集第2巻 p.165）。「宗教雑感」の中では、「礼拝的信仰」、「自己自らへの信仰」、「惰性的信仰」、「文化的信仰」、「敬遠的信仰」「聖貧」などの信仰の諸形態を取り上げつつ、その問題場面を際立たせている。

→ニヒリズムの徹底と、そのヒリズムの「自己克服」は、「宗教的生」（生の根源性）へと至る上での要所である。ニヒリズムを生抜き、自己克服した所に、仏教の「空の立場」は開かれてくる。（『宗教とは何か』第2節『虚無と空』）

→創作者：「大乘仏教でとかれる『空』の概念は、ニヒリスティックでスタティック（静的）小乗的な概念とは、180度様相をことにし、刻々と変化し生成躍動し行くダイナミックな生命の働きそのものなのであります。……この大乘仏教の「空」が内包しているところの、生成脈動してやまぬダイナミズムを『創造的生命』と名づけておきたい」（『21世紀文明と大乘仏教』1996年、聖教新聞社）と語っている。大乘の「空」とは、伝統的に「無自性」「縁起」などとして語られてきたが、固定化する見方を「空する」こととして、「創造的生命」の開花の場を現に開くということである。詳細は、拙論「現代文明の変容と宗教間対話」（尾熊治郎、山崎達也著『哲学』創価大学）の中で紹介させていただいた。

→西谷啓治：『ニヒリズム』（1949年）に続く、『宗教とは何か』（1961年）においては、ハイデガー、ニーチェとの対決の道行が残されている。その中では、伝統的な仏教理解、「空」解釈そのものを脱皮させる強靱な思索が展開されている。『宗教とは何か』の目次のみを紹介する。「1宗教とは何か 2宗教に於ける人格性と非人格性 3虚無と空 4空の立場 5空と時 6空と歴史」『宗教とは何か』は、現代に於ける宗教間対話の足場を開く思索の軌跡として高く評価されてきた。

→西谷啓治は、宗教が宗教として成り立つ、独自の領域としての「絶対的なもの」は、「世界と自己とを絶対的に超越したものでなければならない」としながら次のように述べている。

＜絶対的なもの＞

「人間の普通の生き方は、本質的な意味で迷妄や罪のうちに在り、宗教にはそういう一般の人間に絶対的なものへの道を示す人間がいなければならない。そういう人間はその教えや生活や行為によって、身をもって絶対的なものへの道となり、絶対的なものを証する。そういう人間が絶対的なものから来たもの、人間界へのその表れと感ぜられたのは自然である。そういうことは宗教の歴史のほとんどどの段階にも見られるが、とくに世界宗教においては、絶対的なものが人間として世界のうちに現れるという内在性が徹底され、仏教に於ける仏の三身説やキリスト教に於ける三位一体の神観を成立させた。そこでは絶対的なものは、彼方に止まるだけでなく、此方の世界の唯中に来て、そこに自らを開示し、迷妄と罪を克服し、人間を（あるいは衆生を）それらから開放するもの、人間をその根底から「救い」上げるものとして受け取られる。そこでは絶対的な者において、徹底的な内在性と徹底的な超越性という二つの矛盾した面が一つである。それは徹底的に内在的であることにおいて却って徹底的な超越性を現す。絶対的なものは、そういう風にしてみれば、その真の絶対性において見られる。」（西谷啓治著作集19巻 p.128）

＜「心の透明さ」、と「生の絶対的な肯定」の立場＞

「宗教の特質を私は、絶対的なもの（the absolute）に関わる立場、科学の立場は絶対ということと異なって、無限のもの（the infinite）—これも有限なものを超えた立場ではあるが—に立脚する立場だという見方で考えてみたい。……

先ず、宗教は安心立命の立場である。……自分の存在自覚が『安心』ということである。障りとは、まだ心に暗いところを持っているということで、自分が自分自身に明らかになっていないという意味である。つまり心の透明さの問題である。

そこで心の自覚・心が心自身に明らかであって、暗いまの部分がなく、内的な清浄があるという場合、それが『基礎付けられている明らかさ』かどうかが問題である。……仏教的に言えば『証』という性格が含まれているということである。……自覚の明証性が神や仏とかいう『絶対的なもの』を明かするという意味にもなっているということである。根拠を持った明らかさというのは、宗教上ではよく光のシンボルでしめされる。心が心の根底から光に貫かれたことをさす。その場合の根拠というのは、超越的という性格を持つので、つまり超越的な根拠の上に心が、人間という存在が、安立することができるということである。……

立命とは自分の生に対する絶対的な肯定の立場といえる。『命』という言葉は、いのち、生命という意味と同時に、命令の『命』であって、何か自分の根拠になっているものからの方向付けが、あちら側からなされるということである。それは自分の側で、たとえば天命とか運命とか言うように、『命』として受け取られる。一言でいえば、自己の生が絶対的な命として立つ、建立される、或いは現成してくるということである。そういう『安心立命』は、どの宗教にもいつも含まれているものだと思う。」（西谷啓治著作集15巻 p.178）

4. 宗教的真理と歴史との「再結合」の時代へ

―「宗教的生」の“三～一性的構造”論の立場からの展望―

「宗教復興運動」の諸潮流は、21世紀に入り一段と混沌としてきたかのような様相を呈している。時代の厳しい生命の現実と、宗教的真理とが再び切り結び会う場が随所に切り開かれようとしている。その中で、歴史的宗教の大きな脱皮の変容の場も開かれてきた。文明間・宗教間の対話の深まりがその道筋を確かなものとして開き始めている。

とすれば、そこでは、改めて歴史に現れ出てきた多様な「宗教的生（真理・精神）」の成り立ちの場そのものに孕まれている“三～一性的構造”を、それぞれの歴史的宗教の立場で確かなものとして捉え直し、顕しだすことが求められている。現代世界に求められているのは、それぞれの歴史的宗教が歴史のただなかでの脱皮的な変容の道筋を開き、維持し続けていくことである。

＜「宗教的生」そのものの根本構造―「同一（合一）～伝統～創造」の三～一性＞

「同一（合一）～伝統～創造」の三つの契機は、それぞれが「生の根源性」に於いて一つに結びついている。

生の根源性・自己同一性（神秘的合一）の開け―「直接経験」の立場（「原光」と反射光とが一つになる。）

生の根源性に根ざす伝統形成の立場―教義・儀礼・教団などの形成（現実に入り切る立場を欠くとき、宗教的生は立ち枯れとなる。）

生の根源性に根ざし、現実世界を貫き包む立場―価値創造的変容（「根源に返ることが、新しい展開を生む。」）

＜歴史的宗教と、その現代の変容の事例

―「私の見た創価学会―日常生活の情意に根を張る―」の場合―

（西谷啓治へのインタビュー、1980年）

「在来の仏教、神道など伝統的な各教派が、戦後の一切の価値観が崩れたときに、力が出ていなかったようです。それぞれが古い殻に固まっていたし、教理は学問化してしまい、庶民の生活には社会慣習として形式化したものしかなかった。戦後はそんなものでは間に合わなかったんですね。日本には宗教界の地殻変動が起こったんですね。新宗教が、従来の伝統を破った形で出てきたわけです。

それも、戦後に突然出てきたというのではない。創価学会の場合でも、もっと前に根みたいなのがあって、戦後、押さえられていた芽が取り払われ、芽が出てきた。そのことが大きかったのではないのでしょうか。それと日常の普段の生活と結びついていたことがよかったと思う。……そこに根を下ろしていながら……勉強するということは、精神を絶えず活発に目覚めさせるということですから、そういう学会が小さく固まらないで、非常に開かれた体制として発展していけるところを含んでいるということでしょうね。

今に時代に、どの宗教でも、昔からの形で教えを伝えるということは出来ないでしょう。現代の社会では、宗教が一般の人々の生活の中で力を失って、宗教は減びるんじゃないか、などという声もあります。もちろんそんな風に簡単にはいえません。仮に現在の既成宗教の全てがなくなった時代が来たとしても、何か宗教的なものを求める気持ちは人間の心の中から抜け去ることはしないと思います。だから、やはり、宗教的な道が求められて、そこから新しく宗教の生命が湧き出てくる。おそらく伝統的な教えの中から、その教えの核のようなものがつかみ出されてくると思うのです。……

実はもともと、宗教には、いつも、いじめられて、それで生きていくという、矛盾したところがあります。常に社会の重い課題に向き合って、重い荷物が肩にのしかかっているような形になっている。そしてその中で、自分のうちから力が出てきて、その力で社会の中へ伸びていかねばならないという、そういう宿命的なものがあるのです。それがなくなると、宗教は、社会慣習になり習俗化してしまうでしょうね。世界の人類が一番困っている問題に対して、それに答えて、根本的な解決の道を示していくという、しかもその道を人間の生活面にまで浸透させていくということが、宗教の立場です。

もちろんその教えを、一方では政治の領域まで反映させていくこと、他方では教学の面で、教えを構築していく作業、それも大事です。

日蓮上人が生涯、様々な挫折を味わいながらも、耐え抜き、自らを変えつつ、最後まで教えを深めていかれたようにですね。」(西谷啓治「私の見た創価学会－日常生活の情意に根を張る－」(インタビュー)、『大白蓮華』1980年、11月号)

＜宗教の本質としての「神秘主義」(「直接経験」)

－「直接経験」(「生の根源性の開け」)の現代的意味＞

「ミスティークは、世界宗教といわれるキリスト教、仏教、イスラーム教のどの宗教の中にも現れてきている。そういう意味では、ミスティークは一種の普遍性を含んだ立場として一世界宗教の内部での普遍性を代表する視野を含んだものとして一現れている。そして、ミスティークはそれぞれの宗教においてエキュメニカルということが問題になってくる場合に、基礎的な契機として出てくる。

どういう意味においてミスティークが普遍的な立場であるのかを問題にすれば、幾つかの角度、視野が考えられる。その一つは、ミスティークが人間性そのものであるということである。つまり、民族、人種といった特殊性とは違って、その特殊性を含みながら、同時に集団を形成している存在が人間であるということを通に含んでいるということである。……

現代の最も重要な問題はというのは、世界宗教がそれぞれ、キリスト教と仏教、キリスト教とイスラーム教、イスラーム教と仏教という形で互いに接触し合い、いやおうなしに付き合いをせざるを得ない段階にたっているということである。それぞれ皆、世界宗教という立場だから、世界とか人類という地盤に初めから立っている。だからその接触の仕方というのは、それぞれが自分自身のうちで基礎的な立場

へ引き戻されて、全て人間という存在が宗教的に見てどういうものであるかという問題への自分の宗教の解答を、自己反省的に吟味することから出発しなければならない。たとえば、キリスト教の場合ならば、他の宗教との接触に入ることによって、自らをキリスト教として自覚し、自らのうちへ反省する。仏教その他も同様である。それによって自らの内部に教团的な分裂がいろいろあっても、この自己反省はエキュメニカル機能を働かすものである。

仏教とキリスト教のごとき二つの世界宗教の出会いにおいて、それぞれが自らを他と別なものとして自覚し、おのおのが自らの自己同一性へと自己反省する。この出会いは、それぞれが全く自らの独立性へと帰る。そこにいわば絶対の『二』、絶対的な『差別』が出てくる。しかしそれぞれが互いに独立となって、同時にまた、相手が自分と同様に独立であることを知ることでもある。つまり、相手も自らと同じ基盤、つまり同じ『世界』、同じ普遍的な人間性、同じ『人類』的立場に立っていることを知る。……そこではキリスト教と佛教のごとき二つの世界宗教が本当にそれぞれの基盤から、ミスティークな合一になることが出来る。むしろ神秘的な合一にならねばならない。これが本当の方向である。」

（『宗教の本質としての神秘主義』『神秘主義と現代』所収、現代キリスト教学際叢書 1986年 星雲社）

おわりに

時間的な制約などもあり、お渡しさせていただいたレジュメについては言及できない個所が多く残ってしまいました。解り難い処も多かったことかと思います。要所については「関連資料」をも付けさせていただきました。恐縮ですが、ご関心のある方はレジュメを参考にいただければ幸いです。

以上、本年の「宗教学入門」（テーマー現代世界と宗教の変容）の総括的、振り返りの最終回の講義をもって、私の最終講義に替えさせていただきます。諸先生方には、お忙しい中ご参集いただき誠にありがとうございました。

わが胸中に太陽を登らせつつ、生の根源性に根ざしつつ、現実世界を生き抜いていく。大いなる志を共有されている創大生の皆様方の、今後の一段のご成長を祈念しつつ最終講義を終わらせていただきます。本日は大変にありがとうございました。

2015年1月15日

尾熊治郎教授 略歴・著作目録

略 歴

- 1944年7月 広島県に生まれる
- 1963年3月 広島県立福山誠之館高校卒業
- 1967年3月 中央大学法学部卒業
- 1971年4月 創価大学文学部助手
- 1972年3月 中央大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了
- 1976年4月 創価大学通信教育部インストラクター
- 1981年4月 創価大学通信教育部講師
- 1988年4月 創価大学通信教育部准教授
- 2008年4月 創価大学通信教育部教授
- 2015年3月 創価大学退職

受 賞

- 1986年5月20日 東洋哲学文化賞（東洋哲学研究所）
- 1999年12月9日 創価大学荣誉賞（創価大学）
- 2014年3月20日 名誉教授（創価大学）

著作目録

著 書

- 『牧口常三郎全集』（宗教論集・書簡集、脚注・補注）第三文明社、1987年「価値創造」
- 『人権はだれのものか』共著、有信堂、1994年、「第9章 精神史立場から見た人権」
- 『女性学へのプレリュード』共著、北樹出版、1995年、「フェミニズムと脱神話化への動向」
- 『創立者池田大作先生思想と哲学』（第1巻）創価大学通信教育部学会編、2005年、第三文明社、「第4章 創価の「人間復興」運動」
- 『高齢学へのプレリュード』共著、北樹出版、2006年、「第9章 2 変容する老いと成熟の間」
- 『創立者池田大作先生思想と哲学』（第2巻）創価大学通信教育部学会編、2006年、第三文明社、「第3章 文明間・宗教間対話の新展開」
- 『哲学』共著、創価大学通信教育部、2012年、「第3部 現代世界の問題と哲学」
- 『自立学習入門』吉川成司編著、創価大学通信教育部、2013年、「序章「自立学習入門」とはどのような科目か」

論文

- ハイデガーの思惟の場面と東洋的思惟の場面（上）、『東洋学術研究』、第10巻第2号、1971年4月、東洋哲学研究所
- ハイデガーの思惟の場面と東洋的思惟の場面（中）、『東洋学術研究』、第10巻第4号、1972年2月、東洋哲学研究所
- ハイデガーの思惟の場面と東洋的思惟の場面（下）、『東洋学術研究』、第11巻第3号、1972年10月、東洋哲学研究所
- ハイデガーにおける「性起」の究明をめぐって、創価大学『文学部論集』、第5巻1号、1976年3月
- 後期ハイデガーの思惟の動性—立場としての「所在究明」をめぐって—、『創価大学10周年記念論文集』、1980年11月
- 法と主体性、『創価大学創立15周年記念論文集』、1985年11月
- 後期牧口価値論の世界—「法」と主体の自己更新—、『東洋学術研究』、第25巻・第2号、1986年11月
- ニーチェにおける「生と認識」の問題—「生の自己更新」を中心にして—、創価大学『比較文化研究』、第4巻、1987年3月
- 『ツァラトゥストラ』における「変容」とその地盤—生の自己更新とその地盤—、創価大学社会学会『ソシオロジカ』、12巻2号、1988年3月
- 『開』の所在をめぐって、『生と思索』、刈田喜一郎退職記念論文集、1990年5月
- 脱底的自覚とその位相—西谷哲学とその成立地盤、創価大学、『創立20周年記念論文集』、1990年11月
- 宗教的生の構造と宗教の歴史性、『東洋学術研究所紀要』、第9号、1993年12月
- 生の根源性をめぐる問題場面—自然的・文化的生と信仰の間、「創価大学創立25周年記念論文集」、1995年12月
- 『脱底的自覚』とその現代的意味、創価大学『通信教育部論集』、第2号、1999年8月
- ニーチェ的生と牧口価値論（1）、『東洋哲学研究所紀要』、第30号、2014年12月

その他

- 大学通信教育における「レベル」をめぐる問題について—生涯学習の観点からの再検討—、『開放制教育研究会、研究委員会報告』、9号、私立大学通信教育協会、1982年9月

随想

- 「学光」に思うこと、『学光』、第1巻3号、1976年6月
- フライブルグ雑感、『学光』、23巻8号、1998年11月
- 今、よみがえる滝山城、『学光』、34巻12号、2008年3月
- 「通信教育」にこそ、人間教育への大道が、『学光』、39巻3号、2015年3月

教材解説

教材解説 哲学、『学光』、第2巻11号、1977年2月

教材解説 哲学、『学光』、第3巻29号、1978年12月

哲学のレポートとしての要約について—哲学の本性との関連にて、『学光』、第5巻8号、1980年11月

思想の成立地盤と生の位相—「わかる」の諸相(層)について、『学光』、第7巻3号、1982年6月

哲学的思索への道—「たじろがぬ眼」・「全身で考える」、『学光』、第7巻7号、1982年10月

科学・哲学・宗教の間に交渉の気運—求められる根源的生との関連の場、『学光』、第11巻6号、1986年9月

「問いを立てる力」と価値転換、『学光』、第38巻7号、2013年10月

書 評

小杉泰 『イスラームとは何か—その宗教・社会・文化』、1994年、講談社、『学光』、第27巻1巻5号、2002年8月

阿部勤也 『日本人の歴史意識—世間という角度から—』、2004年、岩波書店 『学光』第29巻12号、2004年3月

安田喜憲 『巨大災害の時代を生き抜く—ジェオゲノム・プロジェクト』、2005年、株式会社ウエッジ、『学光』第33巻1号、2007年4月

安田喜憲 『生命文明の世紀へ—『人生地理学』と「環境考古学」の出会い』、2008年、第三文明社、『学光』、第35巻2号、2008年5月

モハマド・ハタミ 『文明の対話』、2001年、共同通信社、『学光』、第34巻2号、2009年5月

西垣通 『ネットとリアルの間—生きるための情報学』、2009年、筑摩書房、『学光』、第35巻7号、2010年10月

高木仁三郎 『チェルノブイリ原発事故』、2011年、七ツ森書館、『学光』、第36巻3号、2010年3月

浅井幹雄編 『ガンディー 魂の言葉』、2011年、太田出版、『学光』、第36巻3号、2012年2月

山崎亮 『コミュニティデザイン—人がつながるしくみをつくる』、2011年、学芸版社、『学光』、第37巻3号、2012年6月

金田章裕 『文化的景観—生活となりわいの物語』、2012年、日本経済新聞出版社、『学光』、第38巻1号、2013年4月

中田正光 『戦国の城は民衆の危機を救った—関東王国の平和を求めた八王子城城主氏照』、2013年、揺藍社、『学光』、第38巻1号、2013年4月

小杉泰 『9.11以後のイスラーム政治』、2014年、岩波書店、『学光』、第39巻12号、2014年3月

《講演会報告》

通信教育部学会第17回講演会

出会いは人生の宝物 —女性の世紀を生きる—

講師 島田 歌穂

2014年8月17日（日） 19時～20時30分
創価大学本部棟 M401 教室



本部棟 M401 教室

創価大学通信教育部学会は、例年、夏期スクーリングの際に、講演会やシンポジウムを開催しました。まずは授業の予復習や試験準備のあるご多忙な中、これまでご参加いただきました学生会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

さて回を数えて第17回となる2014年度の講演会は、講師に著名な女優・歌手の島田歌穂氏（大阪芸術大学教授）を迎え、「出会いは人生の宝物—女性の世紀を生きる—」とのテーマのもとにご講演をいただきました。

講演会場の本部棟 M401 教室は、満員の大盛況となりました。冒頭、主催者を代表して花見常幸会長より謝辞と講師紹介がありました。

講演では、デビュー 40 周年記念の佳節を迎えられた講師の珠玉の出会いが多数の写真を用いて紹介されていきました。まず音楽一家に生まれた生い立ちから始ま

って、TVドラマでデビューした子役時代、アイドル歌手の時代と振り返られました。次に18歳から始めたミュージカルへの挑戦、修業時代のご苦労が明かされました。そして一大転機となったミュージカル『レ・ミゼラブル』との出会いと創立者との出会いが語られました。やがて歌手としても大活躍されるようになります。そのようなご活躍の中でも、ご両親が他界されたご苦労とそこへのご両親への感謝が明かされました。また音楽家とご結婚され、現在、ご夫婦で音楽活動されていることも紹介されました。さらに大阪芸術大学でのご活躍、そして創大通教生としての挑戦も語られました。講演の後半では2008年に出版された『私の祖母は「101歳のお嬢様」』の内容を紹介されました。激動の時代をたくましく生きた祖母からの影響を語られ、芸術家としての社会貢献の決意表明をされました。最後に「母」の歌が聴衆にプレゼントされ感激の大きな拍手をもって講演会は終了しました。

参加者にとって希望と勇気と向上心を養う貴重な講演会となりました。当日、講演会に参加できなかった会員の皆様のために、その模様をお伝えいたしたく、ここに掲載いたします。明るさとユーモアに満ちたお話と偉大な美しき芸術家の気骨あふれる生き様をぜひお読みいただければ幸いです。なお掲載にあたり、講師ご本人により、加筆・修正をいただきました。

(文と写真：坂本幹雄)

出会いは人生の宝物 —女性の世紀を生きる—

島田 歌穂

司会：講演に先立ちまして、通信教育部長・花見先生よりご挨拶並びにご紹介がございます。

通信教育部長：みなさんこんばんは。一日の授業が終わりまして、大変お疲れのところにもかかわらず、こんなに多くの方が参加していただくことになりました。大変ありがとうございます。私ども通信教育部学会では、毎年この夏のスクーリングの時に特別講演会という形で素晴らしいゲストの方をお迎えして毎年講演会を行っています。今回は、大拍手で登場されたわけでありますけれども、女優・歌手として大活躍をされる一方、大阪芸術大学教授として大学でも教鞭をとられていらっしゃる島田歌穂さんをお迎えいたしました。大変有名な方でございまして、私から改めてなにかご紹介しなくてもいいのかなと思いますが、簡単にご経歴を紹介したいと思います。

1974年に子役としてプロデビューをされます。82年に、ミュージカル「シンデレラ」で初舞台を踏みます。87年には「レ・ミゼラブル」で大きな脚光を浴びられ、出演回数は、なんと1000回を超えたそうでございます。また、この「レ・ミゼラブル」の世界ベストキャスト、もっともすばらしいキャストにも選ばれ、イギリスの王室主催のコンサートにも出演されました。それを収録されたアルバムが、インターナショナルキャスト版という形で収録をされ、それがアメリカでグラミー賞を受賞される。実はわたくしの妻が島田さんの大ファンでございまして（笑）、以前、帝国劇場での「レ・ミゼラブル」のミュージカル、私連れていかれて、拝見したことがございます。本当にすばらしいミュージカルでございました。代表的なそれ以外の出演作品として、「ロミオとジュリエット」、「黙阿弥オペラ」、「ウエストサイド・ストーリー」、「江利チエミ物語」、「蝶々さん」など、もっとたくさんありますが、多数の作品にも出演されております。女優歌手としてミュージカルから演劇・コンサート・ライブ・CDなど幅広く活躍されています。楽曲のレパートリーはミュージカルはもちろんのことジャズからポップス、民謡まで幅広くカバーされているそうです。さらに素晴らしいと思いますが、芸術選奨文部大臣新人賞、紀伊國屋演劇賞個人賞、読売演劇大賞優秀女優賞など多くの賞も授与されています。先ほど申し上げた通り、現在、大阪芸術大学で教授も務められていらっしゃるわけです。

なお、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、先ほど手を振っている方もいらっしゃいましたが、島田さんは、実は本学の通教生のお一人でございます。「出会いは人生の宝物—女性の世紀を生きる—」というテーマでご講演いただきま

す。興味深いお話を伺えるものと大いに期待をしているところでございます。どうか今日のご講演をしっかりと聴講していただき、明日の勉学に挑戦する新しいエネルギーに変えていただければと思う次第です。以上、簡単ではございますが、わたくしの挨拶とさせていただきます。大変にありがとうございました。

司会：どうも、ありがとうございました。それでは余計なことは司会は言わず、ただいまから、ご講演いただきたいと思います。それでは島田歌穂先生よろしくお願いいたします。

みなさまこんばんは。ただ今ご紹介いただきました島田歌穂と申します。連日本当に蒸し暑い中、いまちょうどスクーリング半ばごろでしょうか。みなさま本当にお疲れもたまっている頃かなという時に、それも明日試験！という、そんな大変な時に、こんなにたくさんお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

今ご紹介いただきましたが、私は通教生で、実は入学は2003年なんですね。11年前なんです。もしかして同じぐらいの入学の方は…… あ、いらっしゃいました！もうかなり年月が経ってしまいましたが、とにかく私はスクーリングが大好きで、でもレポートを書くのが大の苦手で（笑）。これじゃ卒業できないと思いながら、今年は、来月に舞台の本番があり、ずっと稽古が入っておりますもので、夏期スクーリングは出られないなと本当に残念だったんですが、思いがけず今回このような形で講演をということでお話をいただきました。でも、私はあくまで一通教生という思いですので、創価大学で講演なんてあまりに恐れ多くて、ご辞退申し上げたいという思いでいっぱいだったのですが、本当にテーマは自由で大丈夫ですからと先生方に励ましのお言葉をいただきまして…… このような光栄な場を与えていただきましたことに感謝いたします。今日は、去年の夏以来ですので一年ぶりに創大に伺わせていただき、なんだか涙が出るぐらいすごく嬉しくて、懐かしいお顔も拝見できまして、懐かしい先生方にもお会いできまして、一気に学生気分に戻らせていただいております。

今日は、テーマは自由でいいですよとおっしゃっていただき、「出会いは人生の宝物－女性の世紀を生きる－」という、何だかたいそうなテーマをかかげってしまったなと思っておりますが……。実は、私は今年でデビューして40周年になりまして、（拍手）ありがとうございます。島田歌穂っていったいいくつなんだろう（笑）という素朴な疑問をお持ちになられていることかと思います（笑）。こういう節目の年になりまして、今回ちょうどこういう機会をいただきましたので、今日はこれまでのいろいろな出会いを少したどらせていただけましたらと……。振り返りますと、本当にたくさんの出会いをさせていただいてきて、その出会いどれ一つが欠けても、いまの自分はないなと、本当に出会いの一つ一つが人生の宝物なんだなということを、この節目の年に、あらためて感じさせていただくことが多いんですね。まだまだ拙い人生ではありますが、今日は、これまでの様々な出会いをご一緒に振り返ら

せていただきながら、私にとりまして、これをまた新たな決意の時間にさせていただけましたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。座らせていただきます。

さあでは…… 今日はいろいろ写真をご用意させていただきましたので、少し…… これぐらいの照明にさせていただきますが、みなさまちょうど夕食を召し上がった後で眠くなれる照明かもしれませんが、その時はどうかご自由に居眠りなさっていただいても結構です（笑）。

ではまず、私の生まれた頃に話を遡ってみたいと思います。これを言うと年がばれますが…… 昭和……（笑）もういいですね言っちゃいますよ。昭和38年。音楽家の父、これは父の晩年の写真ですけども…… 私は父と瓜二つですね。そして母。母は宝塚歌劇団の女優から、転向してジャズ歌手になったという人でありました。母はなかなかの美形だったんですが、私はまぎれなく父親似ということですね（笑）。小さいころによく「歌穂ちゃんお父さんにそっくりねー」って言われると泣いて怒っていたらしいんですけど…… 今思えば、父にかわいそうなことをしたと思っております（笑）。そんな両親の間に、私は一人娘として生まれました。わあ、かわいい！（笑）かわいかったですねー！ ちっちゃい頃。父の名前が島田敬穂、尊敬の敬、敬礼の敬という字に稲穂の穂と書いて敬穂という名前でした。その「穂」をもらって、やはり父も母も音楽の世界に生きた人でしたので、「歌」という字をつけたいなと思ってくれたらしくて、歌に穂で歌穂という名前をつけられました。本名に歌という字を入れられてしまったという、何だか運命をここでもう決定づけられたような、そんな名前をつけてもらったんですね。母は私がお腹の中にいる時にまだジャズ歌手として現役で歌っておりました。ですから、もうまさに胎教から母のジャズの歌声を聴いていたような状況だったんですね。父は家で作曲したり編曲したり、またボイストレーナーとして歌を教えておりました。自宅には毎日のようにお弟子さんが次々といらしてレッスンしているんですね。ですから私は隣の部屋で、子守唄代わりのようにその発声練習ですとか、洋楽の英語の歌とかを聴いて、何だかわからないまま一緒に口ずさんだりしていました。まあ、今から思うと、ずっと家の中に音楽があふれていたような中で私は育ったんですね。また、物心ついた時からなぜかバレエを習わせてくれておりまして、気がついたら私は歌ったり踊ったりすることが大好きな子供になっていたんです。

そして、この世界に入るきっかけがありました。昭和49年、1974年。バレエを習っていたことがきっかけで、テレビドラマに出てみませんか？ というお話をいただきました。やはり、テレビドラマもすごく興味のある世界でしたので、ぜひ挑戦したいと思い、私は子役としてデビューすることになりました。デビュー作は、これは今思うとすごいタイトルです。「どっこい大作」という番組があったんですが、覚えていらっしゃる方おられますか？…… ああ！ いらっしゃいますね。世代がわかりますが（笑）。この番組、池田先生ご存じでいらしたでしょうか。主人公が大作君っていうんですよ、すみません、大作君なんて言っていていかわからないですが（笑）。つらいことがあると、主人公が夕日の見える丘に登って「どっこい！ どっこい！ どっこい！」って自分を鼓舞して頑張るという、いわゆる根性もののドラマ。

それに出演したのが私のデビュー作です。

そのあと初めてレギュラー番組が決まりました。それが、「がんばれ!!ロボコン」という番組でした。はい、先ほど「ロビンちゃん!」とお声をかけていただきました(笑)……ありがとうございます! 私はロビンちゃんというバレリーナ・ロボットの役を演じさせていただきました。……ご覧になられていた方いらっしゃいますか? わあ、たくさんいらっしゃいますね、嬉しいです! これがけっこうな人気番組となったんです。……ロビンちゃん、この写真ですね。当時、ロビンちゃんに憧れてバレエを習い始められたお嬢さんがけっこういらしたようなお話をうかがいました。この番組との出会いをきっかけに子役としてすごく順調にお仕事が続いていきました。

これがその後の子役時代ですね。いろんな番組に出させていただきました。これは「俺はあばれはっちゃく」。はっちゃくのお姉ちゃん役ですね。次々と子役としてのお仕事が続いていきました。私も学校に行くよりも撮影所に通う方が楽しくなってしまうと、子供心に「絶対女優になる!」なんて夢を描いた、そんな時代でした。

ところが、子役というと、やはり子供から大人に切り替わる時期って、誰もが必ず苦労するんですよね。私も「歌穂ちゃんも、もうすぐそういう時期だから頑張れよ」なんて周囲の方に励ましていただく中、ちょうどそんなときに「アイドル歌手をやってみませんか?」というお話があったんです。アイドル歌手なんて柄じゃないな……と思ったんですが、その頃ちょうど第3次アイドルブームで、松田聖子さんとか、田原俊彦さんとか、わーっとアイドル時代が来たときで、せっかくのチャンスだからと、私もアイドルデビューを決意しました。これが昭和56年。デビュー曲「マンガチックロマンス」。すみません、照れちゃいますね。聖子ちゃんカット風にしちゃって……やはりちょっと無理しながらアイドル歌手やってみました(笑)。一応4曲のシングルレコードを出させていただいたんですが……ちなみに、アイドル時代の島田歌穂をご存じの方いらっしゃいますか?……いらっしゃらない(笑)。いいんです。当然なんです。本当に売れなかったんです。ちょうど近藤真彦さんと同じ年のデビューだったんですが、私は全然売れなくて……いやーどうしようかな、やっぱり私はこういう芸能界は向いていないのかな、なんてちょっと悶々とし始めた中、また次の出会いがありました。

ミュージカルのオーディションを受けてみることにしたんですね。ミュージカルと言えば、歌って踊ってお芝居して、と、好きなことがいっぱいできる、いつかは挑戦してみたいと思っていました。とにかくアイドルで売れなくて悶々としていてもしかたがないので、いちかばちかミュージカルのオーディションを受けようと、「シンデレラ」というミュージカルのオーディションを受けました。するといきなり主役のシンデレラ役で合格することができたんですね。18歳で初舞台を踏むことになります。これがシンデレラの時の写真、最初のボロボロの、いじめられている場面のシンデレラですね。これが私の初舞台となりました。でも初舞台でいきなり主役をいただいてしまって、本当に私につとまるんだろうか……と不安でいっ

ばいな中、必死で稽古を重ねて初日を迎えました。いざメイクをして、衣裳を付けて、お客様の前に立ったとき、何だか、自分がいままでまったく知らなかったような、ずーっと胸の奥底に眠っていた不思議なエネルギーみたいなもののお客様の前でブワァって出てくるような気がしたんですね。それで、「うわあ！ 楽しい！ もしかしたらここが一番自分が輝ける場所かもしれない！」って。「よし、私はこの舞台女優への道を歩いて行こう！」って、初舞台の初日の舞台の上で私は固く決意させていただくことができたんです。忘れられない瞬間でした。この初舞台で、私は自分の進むべき道を決意させていただくことができました。これは大きな出会いでしたね。

そして。決意をしたら、アイドル歌手はなんの未練もなくスパッとやめて（笑）、一からレッスンをやり直して、アルバイトしながらオーディションを受けて、という日々が始まりました。オーディションもいっぱい受けました。受かった作品もありましたが、落ちた作品もいっぱいありました。受かったといっても、そんなに急にいい役がもらえるわけではなく、いわゆる「アンサンブル」といって、端っこの方で歌ったり踊ったり、セリフも一言あるかないかという感じで、なかなかスポットライトも浴びることができなくて。時々主役の方が近づいて来てくださると、その主役の方に当たっているスポットライトの端っこのへんまで来たりするんですね。そうすると一生懸命そこに乗り出してスポットライトの中に入る（笑）、いかに目立つかっていうような、そんな戦いの日々だったんですけれども。でも、そういう中でも一つ一つ作品をやるごとに、「歌穂ちゃん、こんな役があるけどやってみる？」って言っていただいたり、「今度こんなオーディションがあるけど受けにおいでよ」って声をかけていただいたりして、少しずつ役をいただけるようになっていきました。

これがいわゆるミュージカルのアンサンブルやっていた時代の写真ですね。ここにいる、胸に大きな星の付いた衣装の……これが私です、ぷりっぷりでまん丸な顔……（笑）若さいっぱい、元気いっぱいでミュージカルをやっていた時代です。

そして……本当にありがたかったのは、この頃、ミュージカルをやりながら同時に、井上ひさしさんのお芝居にも出演させていただけたことです。これが初めて井上ひさしさんの作品に出させていただいた時の写真です。こまつ座公演「日本人のへそ」。一番左の端で大きな口開けて歌ってるのが私なのですが、ミュージカルではなくてお芝居の世界で、日本語の深さとか、難しさとか、言葉の大切さというものを学ばせていただいて、ただただカルチャーショックで、これが舞台人としてかけがえのない出会いとなっていきました。

また、この時期ちょうどアルバイトをしていたんですが、どんなアルバイトをしていたかと言いますと、当時たまたま私の父がピアノを弾いていたお店がありました。そこで二年半くらいの間アルバイトをさせてもらったんですが、ありがたかったことに、そこでアルバイトをしながら、毎日ジャズのスタンダードナンバーをお客様の前で歌うことができたんです。気づけば、バイト時代にジャズの基礎をしっかり学ぶことができたんですね。なかなか売れなくて、役ももらえなかったり、ち

よっと苦しい時代ではあったんですけど、今振り返ってみると何一つ無駄がなかったなって。歌・踊り・芝居、一つ一つの基礎を、その苦しかった時期に間違いなく学ばせていただくことができた。これも本当に大切な出会いの時期でありました。

さあ。そんな中で、また人生を大きく変えてくれた出会いがありました。昭和61年、1986年。ミュージカル「レ・ミゼラブル」のオーディションを受けたんですね。このポスター、みなさん一度はお目に触れたことがあると思いますが…… ある日、帝国劇場にミュージカルを見に行ったときに、大きな金色のポスターが貼られていました。このコゼットの絵を真ん中に、「あなたに白羽の矢が立つ」と大きなキャッチコピーが書かれていました。うわあ！ なんだろう、とよく見てみると、「レ・ミゼラブル」というミュージカルのオーディションが大々的に行われると、その応募要項が書いてあったんですね。これは何かすごいことが起きそうだなと思いました。でも、とにかくこれだけ大々的なミュージカルなので、絶対有名な方が大きな役をされるに違いないと思いましたし、ただ、海外からスタッフが来てオーディションしてくださるとのことで、これはもう参加することに意義がある！ という思いで応募しました。全国から老若男女プロアマ問わず1万2千人ぐらゐの応募者がありました。私はその中でも3千人以上という一番競争率が高かったエポニーヌという役で応募したんですね。

それが1次審査、2次審査、3次審査、4次審査と進み…… 最終的にそのエポニーヌの役で合格することができました。(拍手) ありがとうございます。でもこの時ばかりは、嬉しいというよりも、あまりに大きな作品でいきなり大きな役をいただいってしまったので、本当に私につとまるんだろうか……って。稽古が始まり、稽古をすればするほど、これはドッキリカメラじゃないんだろうかと(笑)、もう本当に不安でいっぱい。でも、今の自分に与えていただいた使命の場であるならば、最大限に力を出させてください！ と、本当に毎日必死に祈りながら稽古を重ねていきました。

そして、いよいよ初日まであと1か月となった、忘れもしない1987年5月10日という日。ありがたいことに、人生の師匠、創立者池田先生に初めてお会いする機会に恵まれたんです。この時は第10回芸術部総会という大きな会合がありまして、そこに先生をお迎えすることができました。その会合で先生は、北原白秋の生き方を通して、長時間ご指導してくださいました。その時、私が命に刻ませていただいたご指導は、「本物になりなさい」というご指導でした。「大事なことは本質が光っているかどうかである。本物はどこまでいっても本物であり、偽物はどこまでいっても偽物である」。「芸術の道を探求されている皆さまは、世間の風評などに左右されず、自らの道を、日々、確かな足どりでたゆみなく進んでいただきたい」。……それぞれの技術を磨くとともに、生命の鏡をただただひたすら磨いて、なにものにも揺るがぬ本物の芸術家になりなさい！ というご指導でした。この「本物になれ！」というご指導を私は生涯の指針として深く生命に刻ませていただきました。これが私にとって、人生の師匠との原点を刻ませていただいた、生涯忘れえぬ瞬間でありました。

こうして、師匠に大きな勇気をいただき「レ・ミゼラブル」初日を迎えることができました。そして、この「レ・ミゼラブル」という作品は大評判となったんですね。……もしかしてご覧になられた方いらっしゃいますか？……すごい、たくさんいらっしゃる！ありがとうございます。帝劇でご覧になられましたか？あとは大阪とか……大阪でご覧になられましたか。10回?!すごい、ありがとうございます！あと名古屋公演もあったんですが、名古屋公演はご覧になられた方いらっしゃいますか？……あと札幌とか仙台でもやりました。福岡でもやりました。……あの方々は東京でご覧くださった方ですね。ありがとうございます！嬉しいですね。この作品、本当に大評判となりまして、各マスコミ、新聞、雑誌、いろいろなメディアでこの作品が取り上げられ、中でも新人の島田歌穂という女優がとても頑張っているというふうに書いていただきまして……先ほどもご紹介いただきましたが、この作品により芸術選奨文部大臣新人賞をいただくことができました。そして、NHKの「音楽・夢コレクション」という音楽番組……ご覧になられた方いらっしゃいますか？レギュラーでやらせていただくことになり、それをきっかけに88年、89年と二年連続で「NHK 紅白歌合戦」にも出させていただきます。また、イギリスの王室主催の「ザ・ロイヤル・バラエティー・パフォーマンス」という毎年伝統的に行われておりますイギリス王室主催のチャリティー・コンサートへの出演というチャンスもいただきました。これは、毎年世界中のアーティストが集まって、女王陛下の前でそれぞれのパフォーマンスをお見せするというチャリティー・コンサートなんですが、87年に「レ・ミゼラブル」のカンパニーが出演することとなり、せっかく各国でやっているのでも世界中のメンバーを集めようということで、ニューヨークのカンパニーのアンジョラス役の方、また、当時イスラエルでも「レ・ミゼラブル」は公演中で、イスラエルのジャン・バルジャン役の方、そして、エポニーヌ役は日本から歌穂を呼ぼうということで呼んでいただき、あとはイギリスのカンパニーの皆さんと一緒にエリザベス女王陛下の前で歌わせていただいたんです。これは、パフォーマンスが終わってから女王陛下が出演者一人一人にお声をかけてくださって握手していただいた時の写真です。これは、ちょっと手が写っていませんが……ちゃんと握手していただいています。女王陛下へのご挨拶の言葉で、「I'm very honored to meet you」という丁寧な言葉を教わっていましたが、もう、女王陛下が握手して下さった瞬間、ぱあーっと飛んでしまい「Thank you very very much!」としか言えなくて（笑）、ベリーベリーマッチ……そんな情けないことになっちゃったんですが、本当に光栄な瞬間、すばらしい瞬間を経験させていただきました。このパフォーマンスには、日本人で出演したのはバレリーナの森下洋子さんがお一人目だったそうで、日本人としては私が二人目の出演者だったということなんですが、かえすがえすも、本当に夢のような舞台に立たせていただくことができました。

また、先ほどもご紹介いただきましたが、88年に「レ・ミゼラブル」の世界のベストキャストを集めたアルバムを作ろうということになりまして、その時も日本代表としてエポニーヌ役でオファーをいただき、シドニーにて全部英語でレコーディ

ングをさせていただき、それがミュージカル・ベスト・キャスト・アルバムに選ばれ、グラミー賞を受賞することもできました。本当にこの「レ・ミゼラブル」と出会えた瞬間に、私は舞台女優としての道を一気に大きく開いていただくことができました。

そして、その後、ずっと「レ・ミゼラブル」はロングランが続きました。私は2001年までの14年間、そのロングランに参加させていただき、出演回数は1000回を超えました。この間は、ずっとこの「レ・ミゼラブル」を柱に、女優としても歌手としても、どんどん順調にお仕事の幅を広げていくことができました。たとえば舞台では、「アニーよ銃をとれ」という作品で初めて主演をさせていただいたり、民音ミュージカルでも「スターライト・ムーンライト」というオリジナル・ミュージカルでずっと全国公演させていただきました。この時私は、月子ちゃんと星子ちゃんというまったく性格が真逆の一人二役。この写真ですね…… あれがちょっと暗い月子ちゃん、こっちがとても元気の星子ちゃん。二役なので早替えに次ぐ早替えで大忙しの作品だったんですが、初めて民音ミュージカルで主演させていただいたことがやはり生涯忘れられない、感謝の思い出の作品となっております。

そして…… 歌手としても、ドラマ「ホテル」の主題歌を歌わせていただいたことは大きな出会いでした。このドラマ、ご覧になられていた方いらっしゃいますか？ 高島政伸さんが主演でホテルマンのお話で、いつもホテルにちょっと問題を抱えられたお客さまがいらして、その高島政伸さん扮する熱血ホテルマンが、毎回その熱い頑張りで問題を解決して、お客さまが元気になって帰られる、というとても元気になれるドラマで、その主題歌・挿入歌を歌わせていただいたんです。「ステップ・バイ・ステップ」「FRIENDS」「君にできること」「約束」、このようなシングルCDを出させていただき、これがですね、島田歌穂にとっては本当に貴重な、数少ないヒットソングとなっております（笑）、またこれをきっかけに、歌手としてもシングルCD、アルバムを次々出させていただけるようになり、民音コンサートを始め、全国のコンサートツアー、またライブ・ツアーなどもさせていただけるようになりました。あ、これは「スウィート・チャリティー」というミュージカルで主演させていただいた時の写真ですね。本当に「レ・ミゼラブル」ロングランの期間、女優として、歌手として、仕事の上では順調に、大きく世界を広げていただくことができました。

しかし、実はこの間、人生の上では、1990年には…… 次の写真、何だかすごくプライベートな写真で申し訳ないんですが、これは父と母とともに写ってる貴重な写真、数少ないスリーショットを今日お持ちしました。1990年には母が肺がんで亡くなり、1998年には父が心不全で他界しました。大きな出会いであった「レ・ミゼラブル」をやっている間に、両親との別れという、大きな別れの経験があったんですが、でも、父も母もそれは見事な最期を見せてくれました。母は食道から肺にがんが転移したんですが、これが本当に苦しまなかったんですね。いわゆる末期がんの壮絶な苦しみというのは一切なくて、穏やかに穏やかに、淡々とがんと向き合うという闘病生活の末、私がちょうどコンサートツアーで東京を離れていた間に母

は息を引き取りました。容態が急変して亡くなったので、ツアー先だった私は死に目には会うことができなかつたんですけれども、母の訃報を聞きながら何とか踏ん張ってコンサートを終えて東京に戻りまして、最初、母の寝ている姿を、顔を見るのは辛かったんですが、勇気を出してその寝顔を見たときにですね……もう本当に母がきれいなすっきりとした顔で待っていてくれたんですね。気持ちよさそうに安らかにほほえんで眠っていたんです。私はその母の寝顔を見たとき、それまでの悲しい気持ちが一気にどこかへ飛んでしまって、私は思わず母に「ああ、お母さんよかったね！ 大成仏だね。おめでとう！」っていう言葉をかけていたんです。……まさか「おめでとう」なんて言葉が自分の口から出るなんて思いもよらなかつたんですが、その母の笑顔は一瞬にして、死ぬということは決して悲しいことではないんだって、母は母の人生を精一杯生きて生きて戦い抜いて、何も悔いはないんだなって、これは「別れ」ではなくて、母にとってはここからまた新たな次の人生が始まる「出発」のときなんだ、ということを教えてくれたんですね。母の笑顔が、私に「生と死」、「生死」というものを前向きに受け入れさせてくれた、これも忘れえぬ瞬間でありました。

また、父はですね、もともと高血圧で、心臓系がちょっと弱い人だったんです。晩年、脳梗塞で二度ほど倒れ、でも本当に守られて、またすぐ社会復帰することができていたんですが、結局最終的に心臓が持ちこたえられなくなってということで……。実は父は北海道の美深町という町がふるさとで、そのふるさとに素晴らしい音楽ホールができることになり、父がそのこけら落しの音楽祭の構成・演出・音楽などの一切を任せられ、私も一緒に出演することになっていたんですが、父はその全ての準備を終え、その本番の直前に倒れ、急逝してしまいました。あまりに急なことに愕然とするばかりでしたが、ふるさとのみなさんが「お父さまの遺志ですから」と、予定通り音楽祭をやりましょうと、それも追悼コンサートとして、ふるさとのみなさんが父を送り出してください、という感動的なコンサートにさせていただいたんです。もう、あとから考えれば考えるほど、父は最後までやるべき仕事は全部やりきってぎりぎりまで頑張りぬいてその時を選んだんだなって、父も間違いなく、父の人生を悔いなく戦い抜いたんだなって。人生を誇らしく生きるということを父のその姿が教えてくれました。こうして、私にとって両親との別れは、本当だったら、私は一人っ子ですし、もうちょっと長生きしてほしかったとか、もしかしたら悲しい思い出として残っていたかもしれない出来事だったんですが、母も父も見事な最期の姿を見せてくれたことで、私の中では悲しい思い出ではなく感謝の思い出にさせてもらうことができた。なんて幸せな娘だろうって私は両親に感謝でいっぱいであります。

……すみません、かなりプライベートなお話になってしまいましたが……今日のテーマは出会いについてですが、この別れは、やはり大きなものを私の中に残してもらったので、ご紹介させていただきました。そして、実は、この両親との別れの間に、人生の上での大切な出会いもありました。これがですね……縁がありまして……伴侶との出会いがございました！ 1994年。音楽家……あ、ちょっと出家

したような髪型ですが(笑)、ピアニスト、作・編曲家、プロデューサーの島健という人と結婚いたしました。私、島田歌穂というのは本名だったんですが、結婚して今の本名は島歌穂なんですね。学生証も島歌穂となってるんですけど、島田の田が抜けて、たぬきになっちゃいました(笑)。夫はですね、いろいろなジャンルのアーティストの方々とお仕事を一緒にさせていただいています。サザンオールスターズさん、森山良子さん、加藤登紀子さん、それから若い方だとJUJUさん、中島美嘉さん、平原綾香さん、浜崎あゆみさん…… それからGRAY、ケミストリー、ゆず…… いろんなジャンルの、年齢層も幅広いアーティストの方々とお仕事を一緒にさせていただいてきました。私自身も音楽活動のほとんどは主人と一緒にやってきまして、こういったデュオのアルバムですとか、夫のプロデュースによるアルバムも出させていだいたり、また、音楽活動のみならず、ミュージカルもさまざまな作品の作・編曲、音楽監督として携わってきてくれました。これは「ザ・リンク」という作品の写真。お隣は夏木マリさんですね。この時の音楽監督も夫です。こちらの写真は「葉っぱのフレディー」という絵本を題材にしたオリジナル・ミュージカルで、これはずっと全国ツアーさせていただいたんですが、これ、私ちなみにフレディーという10歳の男の子役なんですけども、夫が全部作曲して、ピアノと弦楽四重奏で生演奏という、贅沢な、本当に手作りの作品ですね。

それから…… もう1つ作品の写真があります、これはずっとシリーズではほぼ毎年行ってきました「ダウNTOWN・フォーリーズ」。歌って、踊って、タップして、コントして、漫才もして…… という、なんでもありの大人のミュージカル・レビュー・ショーで、これもずっと夫が音楽監督をつとめてくれています。こうして、音楽活動、舞台での活動、一年の半分以上は夫とともに仕事させていただいてきているのですが、ふと気づきますと、私の両親も、父が音楽家で、母が女優・歌手という組み合わせだったんですね。ああ、なんだか不思議なもんだなあ、なんて思いながら、あっという間に今年で結婚してから20年…… 20周年となりました。(拍手) すみません。ありがとうございます！

デビュー40周年で、結婚して20周年。幾重にも今年は節目の年になっておりますが、こうして伴侶との出会いなどもあった中、2001年、いよいよ「レ・ミゼラブル」の舞台も卒業し、そこでさらなる新たな出会いがありました。2003年、大阪芸術大学より、突然、「うちの大学で歌の授業をやってみませんか」というお話をいただいたんです。私はただただびっくりしました。自分のことだけで精一杯な私が、まさか教育という場に携わることになるとは。教える立場になるなんて考えられなくてですね。なぜ私にそんなお話をいただいたんだろうとびっくりしました。悩みました。でも、いろいろ悩みながら考えていく中で、ふとあることに思い至りました。実は、私の父は晩年、ある専門学校で、ミュージカル俳優を目指す若い人たちに歌を教えていたんです。それで、いつも父はたくさんの生徒さんたちに囲まれてとっても嬉しそうに幸せそうにしている、「ああ、父にとって教え子の一人一人ってきっと宝物みたいなんだろうな」って感じていた、ふとその光景を思いだしたんですね。ああ、これは決して偶然ではないのかもしれない。これはやはりちゃんと

意味があってこのお話をいただいたのかもしれない。もしかして、父のその思いを、娘の私が少しでも受け継がせてもらうチャンスをいただいたのかもしれないと、このお話をお受けすることにしたんです。…… あ、授業風景の写真ですね、これは。学生と一緒にになって発声のレッスンをしているところです。

そして、ちょうど奇しくも大阪芸大で教えるというお話をいただいた時、大親友の田中美奈子ちゃんが「歌穂ちゃん、創価大学の通教やってみない？」と誘ってくれたんです。「そうかあ！」と思いました。教えるということになったけれど、私は何かが足りない、何かが足りないって思っていたんですね。ここまでお話しさせていただきましたように、私は小さい時からこういう世界に入ってしまったて、仕事をするばかりで学業はどんどん成績が落ちるばかりで…… とにかく命からがらなんとか高校を卒業したという、そんな情けない学歴でしたので、やはり私はここで、教えると同時に学んでいかななくてはいけないと、それも創価大学で学べたらこんなに幸せなことはないなあと思い、美奈子ちゃんからの誘いに私は二つ返事で、「やる！」と言って、2003年、彼女と一緒に創大通教生として入学させていただきました。その時、入学式には創立者池田先生もいらして下さり、本当に感動の入学式を経験させていただきました。とにかく、なにがなんでも頑張って、4年で卒業しようってあの時は決意をしたんですが…… もうこの今の情けない状況で……（笑）でも、とにかくやはり、スクーリングで嬉しい楽しいばかり言っているのはダメなので（笑）、今日また伺わせていただいて、非常に身の引き締まる思いで、決意を新たにさせていただいております！

こうして、まさに「教える」ということと「学ぶ」ということを同時にスタートさせた2003年という年も、忘れられない年となりました。そして…… 気づけばもう11年が経ちました。大阪芸大のほうは、最初は本当に試行錯誤しながらのスタートでした。私は舞台芸術学科のミュージカルコースというところで、歌の実技ですね、こうして学生たちと一緒に声を出しながら、教えるというよりも、私自身がこれまで現場で体験・体感してきたことの中から伝えられることを精一杯伝えさせてもらう、という思いで学生たちと向き合わせていただいてきました。でも実際には教えるというよりも学生たちから学ばせてもらうことの方が本当に大きくてですね、いつも学生たちと会うたびにたくさんパワーをもらうんですね。言い方を変えると、若さを吸い取っている？ とも言えるかもしれませんが（笑）。学生たちとの出会い、なんと大切な出会いの場を与えていただいたんだらうと、感謝することばかりです。いまではもう卒業した教え子たちが実際に社会に出て、どんどん舞台で活躍してくれるようになっていくんですね。私自身も学生たちと実際に同じ舞台で共演できるようにもなって、ああ、なんて幸せなんだろうって。これからも一人でも多くの卒業生と共演できるようにというのが、私にとって大きな励みの一つとさせていただいております。これからも「教える」ということはですね、拙いながらも、使命のある限り、精一杯頑張らせていただきたいと思います。と思っております。

こうして、本当に様々な出会いを経て、気づけば、生まれてはや、どう計算しても半世紀を超えましたが（笑）、でも、振り返れば振り返るほど、つくづく私は、

生まれ育った家庭環境の中で、ごく自然に、なんの抵抗もなく、両親と同じ大好きな芸術の道を真っ直ぐに、たくさんのお会い、たくさんのチャンスに恵まれながら歩いてくることができた…… 本当に幸せな人生です。

そして…… やはりそこにはいつも母の存在がありました。母の存在が本当に大きなものだったんですね。母の人生をたどっていくと、やはり幼い時から歌ったり踊ったりすることが大好きで、その夢を追いかけて、母もそのまま女優・歌手としての道を歩んだ。私を産んでからは、今度は同じ道を歩もうとする娘の私を、その道の経験者として、常に温かく厳しく見守りサポートしてくれた。最後まで母はショービジネスの世界、仕事一筋に生きた人でした。

そしてさらに考えますと、この母を育てた祖母の存在というのが非常に大きな、それは絶大なものでありました。この祖母はですね、特に母が亡くなってからは…… 母が亡くなったのは母が58歳の時でしたから、本当に早い死だったんですけれども、祖母はその悲しみを抱えながら、母に成り代わってという思いだったと思うんですが、私の舞台やコンサート、ライブ、1つも逃すまいという勢いで、2008年に101歳の誕生日の寸前に天寿をまっとうする、その亡くなる数日前まで、ずっと私の追っかけをし続け、「私がボケたり長患いをしてあんたに迷惑はかけたくないからー」って言いながら、最後まで一人暮らしを貫いた、そんな祖母だったんですね。この祖母は1907年に生まれまして、激動の生涯を生き抜いた人だったんですが、とにかく日頃いろんな会話の中で、ぼろっと出てくる昔話があまりにもドラマチックだったもので、その波乱万丈の人生を孫の立場から一冊の本にまとめさせていただこうということで、これは2008年に潮出版さんから出させていただいた『私の祖母は「101歳のお嬢様」』という本です。この本、実は祖母の101歳の誕生日に合わせて出版することになっていたんですが、残念ながらその5日前に祖母は急逝してしまいました。でも、この本で祖母を送り出す、という大きな意味のある本となりました。今日は、テーマのサブタイトルに、「女性の世紀を生きる」とさせていただきましたので、私にとっての、やはり一番大きな存在の女性である祖母について、ちょっとその人となりを表すような、この本の冒頭部分を読ませていただきますね。

『私の祖母である春子さん、通称春ちゃんは、明治40年生まれ。西暦でいえば1907年生まれで、いたって元気な101歳である。』…… これは101歳の誕生日を迎えるという想定で書きましたので…… 『それはそれは波乱万丈の一世紀を駆け抜けてきた人だ。映画館に行くことが不良とされた時代にも、ひとり堂々とハリウッド映画を鑑賞するなど、映画、音楽、演劇にはかなりのこだわりを持つ“元祖モダンガール”。現在も、東京都内や近郊で行われる私のコンサートや舞台には必ず足を運ぶ。その現役ぶりを物語るエピソードは数えきれないほどあるが、まずひとつ挙げるとすれば、6年前のニューヨークでの珍道中だろうか。当時、今より若いとはいえ95歳という高齢の春ちゃんが、私と夫が参加するニューヨークでのチャリティー公演に同行することになった。』…… ちょっと中略いたしますね…… 『95歳という高齢での渡米は不安もたくさんあるけれど、今回連れていけなかったら夫も私

も悔いが残る、ということで意見が一致。そこで、主治医の先生に相談することにした。「普通は止めますよ」というのが主治医の先生の第一声。でも、春ちゃんをよく知る先生は次のように続けた。「でも、あのおばあちゃんのことですからね」。高齢で飛行機に乗ることのリスクや、何が起ころかわからないことの心配などを挙げ、医者として、あきらめなさい、とおばあちゃんを説得することはできる、としながらも、「気持ちとしてはやっぱり行かせてあげたい」と言ってくださった。そして、リスクを家族がきちんと承知して、それでも連れて行ってあげたい、ということであれば、と、ニューヨークの知り合いの医師に手紙を書いてくださった。最後に「あのおばあちゃんならきっと大丈夫でしょう」という太鼓判を押して。私は春ちゃんに「ニューヨークに行きたい?」と尋ねた。すると、目を輝かせて「あらあ、行きたいわよ」と即答。「私は女学校の頃からニューヨークが憧れだったのよ」とそれは嬉しそうに語った。さすが「元祖モダンガール」。アメリカのカルチャーに魅了され、親しんできた彼女にとって、ニューヨークは特別な場所だったらしい。さあ、主治医の先生にもらった手紙をお守りのようにしていざ飛行機に搭乗。気圧の変化が心臓に負担をかけるのでは、と一番心配だったのだが、春ちゃんはそんな心配などどこ吹く風。機内食の和風懷石弁当を「あらあ、美味しいわあ」とパクパクとほぼ完食。飛行機が揺れ、「大丈夫?」とあわてて声をかけた際にも、「まあ、関東大震災に比べればねえ」と、なんとも力強い返事を返してくれたのだ。さすが、春ちゃん。これは先生の言う通り、きっと大丈夫に違いないと、私は妙な確信をもったのだった。』

……これが本の出だしなんですけれども、こうしてニューヨークに無事にたどり着き、到着したその日からですね、いつも私と夫は、例えば10日間だったら15本くらいのペースでミュージカルや芝居、バレエなどを見まくるんですけれども、もう春ちゃんは全部私たちと一緒に行動しました。劇場も全部一緒に行って、劇場を出たあとはライブハウスも一緒に行って、五番街で一緒にお買い物もしまして。自由の女神も見に行きました。この写真、右に立っているのが自由の女神。左にピースしているのが春ちゃん。これ題しまして「二人の女神」という写真です（笑）。こんなことで、春ちゃん、本当にニューヨークを堪能いたしました。ニューヨークの滞在のエピソード、まだいろいろ書いてあるんですが、あと少しだけご紹介しますね。……『結局、10日間に及ぶニューヨーク旅行は、ほとんど奇跡に近かったのかもしれないけれど、主治医の先生の手紙の出番もなく、ともかく無事に終了した。ニューヨークに一緒に行けたこと、そしてなにより、ニューヨークの舞台で歌う姿を見せられたことは、いいおばあちゃん孝行になったかなあ、と思う。ニューヨークに行くという約束を果たし、すっかりほっとしていたのだが、最近になって春ちゃんががばりと漏らすには、「本当は私が一番行きたかったのは、ハリウッドなのよ。ニューヨークは2番目」とのこと。なるほど、映画好きだもんね。春ちゃん。ああ、春ちゃんの尽きることのない好奇心には、いつも圧倒されるばかりで、孫ながら「カッコいいなあ」と感心させられてしまうことしきりなのである。』

……これで、春ちゃんの人となりを少しお感じいただけたかと思うんですけども、

本当に私の祖母は、常に私のそばでいつも力強く、勇気や元気を送り続けてくれた祖母でありました。実は祖母はかなり厳格な家に育ちまして。映画が大好きで、自分も女優もしくは映画監督になりたかったという人だったんですね。でもやはり時代が時代で、なかなかそういうことが許される時代ではなくてですね。関東大震災の時も、実は春ちゃんはいつもの通り、ひとりで映画館に行っていて、そこでぐらっと揺れて、外に飛び出したらうわーっと逃げる人の波。どんどん崩れていく建物。次々と火事が起こって、「こっちに避難してください」と大勢の人が誘導されていたそうなんですけれど、春ちゃんは子供心に「家に帰りたい」と思い、その人の流れに逆らって歩き、小高い丘の桜の木の下で一晩過ごして家にたどり着いたそうなんです。あとからわかったことなんですけど、その誘導された方向は、ご存知の方もおられると思うんですが、上野の被服廠、そこに避難したみなさんが火の粉で…… みなさん亡くなられてしまったんですね。…… なんて運の強い祖母なんだと、もしその時誘導された方向に行っていたら私なんかいないわけですので、祖母の強運に感謝するばかりです。

それから、春ちゃんいわく、「私はおてんば娘だったのよ」と。当時、自由恋愛ということ自体が許されない時代で、ある日、親から突然お見合い話があり、もうそのお見合いが嫌で嫌で、家の窓から逃げ出して、その頃ヴァイオリンを習っていたハンサムなヴァイオリニストと駆け落ちをして結婚してしまうんですね。なかなか最先端を駆けた人だったんです。結婚して私の母とその兄、二人の子をもうけたのちに離婚。なんと、新橋第一ホテルのフロントでホテルウーマンとして働きながら、女手一つで二人の子育てをしていました。戦争中もずっとそのホテルで働いていたんですが、その中で東京の大空襲も乗り越えて…… ところが戦後、そのホテルが接収されるということがわかって、祖母は退職します。さあ、どうやって生きていこうと考え、よし！ 新宿駅の近くでお店を開こうって、最初は、甘味処、甘いものを提供するお店を開いたんですね。飲み屋さんばかりだった中に甘味処を開いてそれがとても人気店になり、でも、そのうちそこが立ち退きとなり、よし！ じゃあ今度はジャズバーを開こうということで、「ノック」という名のジャズバーを開きます。当時はまだジャズのレコードをかけるお店というのが珍しかったようで、ジャズメンの方たちがいっぱい常連さんとして集まってくださったそうです。激動の時代の中を、祖母は本当に根っからの楽観主義で、音楽を愛し、演劇を愛し、その社会のど真ん中で女性として母として生き抜いた人でありました。で、祖母は、先ほどもお話ししたように101歳寸前に亡くなったわけなんですけど、これがまた本当に見事な、最後まで周囲に迷惑をかけないようにと…… あ、これはちょうど100歳のお誕生日の時の写真ですね。親戚一同と、親しい方々も集まって下さり100歳のお祝いをする事ができたのですが、最後まで自分の生き方、ポリシーを見事に貫き通した祖母でありました。その祖母のDNA、影響というのは、まぎれもなく私のなかに大きく息づいてるなということを感じる日々であります。

創業者池田先生は、21世紀は女性の世紀、と、女性が社会に果たしゆく役割に大きく焦点を当ててくださっておりますが、すみません、手前味噌かもしれませんが、

今回こういうテーマでいろいろと思い起こさせていただいた時、本当におこがましいことなのですが、もしかしたら祖母は、知らず知らずのうち、ちょっとだけでもその女性の時代を一生懸命に引っ張ってくれていた、そんな一人だったのかもしれないなあ、なんて、孫ながら少し誇らしく思わせていただきました。と同時に、やはり私自身が、一人の女性として、祖母のDNAを継ぐ女性として、また一人の芸術家として、これからどう社会に貢献していけるのか、どう使命を果たしていけるのか、ということ深くまたあらためて考えさせていただいております。

とにもかくにも、今年はデビュー40周年ということで、この夏から秋にかけて、この40周年を記念して、大切なさまざま嬉しい出来事があります。これは新しいアルバムなのですが、「MY GRATITUDE」、私の感謝、という意味をこめたタイトルのアルバムを7月に出させていただきました。これはなんとアイドル時代から現在に至るまでの、ずっと歴史を追うような、過去を振り返るような、これまでの集大成のようなオールタイム・ベストアルバムとなりました。

それから…… すみません、ちょっと宣伝みたいになってしまいますが、今稽古している舞台が来月行われます。「三文オペラ」というプレヒトの作品で、東京の新国立劇場で9月10日から始まります。「三文オペラ」、きっとご存知の方もたくさんいらっしゃると思いますが、今回は、池内博之さんがメッキースの役、ソニンさんがポリーの役。そして、あめくみちこさん、山路和弘さん、大塚千弘さん、石井一孝さん…… 彼は「レ・ミゼラブル」でずっとご一緒してきた方ですね。こうした演劇界のすばらしい役者さん、ミュージカル界のすてきな役者さんたちと一緒に、今、連日稽古をしているところです。私にとって、また新境地への挑戦という、とてもやり甲斐のある重要な役をいただき、とにかくまずはこれを大勝利させること、これが私の目の前の目標であります。そして、この舞台が終わってすぐの10月1日、嬉しいことに、民音さん主催により、五反田ゆうぽーとホールにて「島田歌穂デビュー40周年記念コンサート」を行わせていただけることになりました。（拍手）ありがとうございます！ これはもちろん夫が音楽監督で、これまでの人生、歴史を振り返りながら、新たな出発のコンサートにできれば、というふうに思っております。感謝を込めて、必ず大成功させられるように頑張ります！

いま私は本当に幸せです。たくさん宝物のような出会いに恵まれて、たくさんの方々に支えていただきながら、大好きな仕事をずっと続けさせていただき……。そして、仕事をすればするほど、自分の中に、亡き母が、亡き父が、そして亡き祖母が、私の中に残してくれたものを深く深く感じさせてもらって……。実は、思えば、母の時も、父の時も、祖母が亡くなった時も、不思議なことに必ず私はコンサートで歌っていたんですね。ステージで悲しみをこらえて歌いながら、ああ、これはなにかを教えられているんだな、と、お前はなにがあっても歌い続けていきなさい、と言われていたような気がしたんです。もう、名前に歌という字が入っているのではないですね。私は、自分の子供を持つことはできませんでしたけれども、でもやはり、大学の教え子を始め、次代を担う後輩たちに、いつか、いつの日か、それがもしかしたら、なにか宝物になってくれたら、と祈りを込めながら、そ

の小さな原石になるようなものだけでも、自分の声の続く限り精一杯伝えていけたら、というふうに願っております。もちろん、通教も、あの、もうちょっと大学にいられるみたいなので(笑)、なんとか期限いっぱいまでに卒業できるように頑張りたいと思います！ 来年とか、もしスクーリングでまたお会いしましたら「スクーリングもいいけど、レポートやってる？」とちゃんと叱咤していただければと思います(笑)。今日は、母、また女性ということテーマとしてお届けしてまいりましたので、ここで最後に、創立者池田先生の、母に向けてのお言葉を少し紐解かせていただければと思います。

「私の偉大なる師である戸田先生が、ある時私の母の近況を尋ねてくださった。元氣な私の母の様子をご報告申し上げると、先生は、慈愛あふれる声で仰せになられた。「母の笑顔は一生涯心から消えない。僕もそうである。君もまた、同じだろう。世界を本当に明るくするものはいったい何か」。ある人が、「それは、太陽でしょう」と答えかけて、慌てて訂正した。「いやいや間違えた。それは、母の笑顔。お母さんの笑顔である」と。たとえ梅雨空が太陽を覆い隠そうが、吹き荒れる嵐の夜であろうが、わが母の笑顔がある限り私たちの生き抜く世界は永遠に明るい。何物にも屈せぬあの平凡にして偉大な私の太陽。私の全生涯にわたって、わが母の慈愛の心は決して沈むことはないだろう。母の笑顔、あの母の笑顔こそ、和樂と、平和と、幸福への不滅なる一家の太陽であるのだ。その母の樂觀主義の光は、地域の太陽となり、世界平和の太陽として昇り輝いている。ある哲人が叫んだ。「母を大切に。母が笑顔でいる日々、その一日一日こそが、最良の日であり、最善の日である。」そしてまた、ある世界的な女性作家は語った。「母は我が家の太陽です。もし母が陰気になってしまえば、我が家から晴れ渡る天気の日が消えてしまいます。」私たちはこの健気な母を幸福にする責任がある。否、使命がある。これが人生だ。この平凡にして偉大な母を幸福にしていくことこそが全世界の平和への第一歩である。平和とは、遠くにあるのではない。政治の中にのみあるのでもない。それは、母を大切にするという人間学の神髄の中にこそあるのである。」

…… 今回、この講演をさせていただくにあたり、本当にいろいろなことをあらためて考えさせていただきましたが、私も、これからも、いつの日もどんなときにも、母のような太陽の笑顔のを忘れずに、目の前のお一人お一人に勇気と希望を届けられる女性になっていけるよう、それにはやはり、ただただ自身の生命を磨き続けていく以外ないんだ、と師匠との原点のご指導を深く思い起こさせていただいております。これからも、とにかく自身を磨き続けて、笑顔を絶やさず、前向きに前向きに歩いていきます！ ということをここにお誓いし、本日の講演を締めくくらせていただきたいと思います。本日は長時間、本当にありがとうございました。

せっかくですので、一曲歌を歌わせていただきたいと思います。(拍手) ありがとうございます。…… では、今日は最後に池田先生の「母」についてのお言葉で締めくくらせていただきましたので、いろいろな思いを込めながら、やはりこの曲をお届けしたいと思います。これは、主人がピアノでカラオケを作ってくれました。今日、この場を設けていただきましたこと、こういうチャンスをいただきましたこ

と、先生方に、そして創立者池田先生に心から御礼申し上げます。そして今日お越しいただきましたみなさまに心から御礼申し上げます。どうか、明日の試験が大勝利となられますように！ また、今度お会いするときは通教生同士として、この学び舎でお会いできますこと心から楽しみにしております。私も頑張って卒業します！ では、感謝と決意を込めてお送りします。

「母」、お聞きください。

司会：どうもありがとうございました。それでは島田歌穂先生の40周年をお祝いして、花束を贈呈させていただきたいと思います。40周年おめでとうございます。素晴らしいご講演とお歌をありがとうございました。

それでは以上をもちまして講演会を終了させていただきます。みなさま、本当にありがとうございました。

レジリエンスの築き方に関する考察

木村 富美子

1. はじめに

近年、さまざまな場面で脆弱性（vulnerability）が議論されている。アメリカ、ヨーロッパでは若年層の高失業率、日本においても所得格差拡大、貧困問題（ワーキング・プア）、老朽化したインフラ、限界集落、財政赤字の拡大、財政難による社会福祉関連予算の縮小など、セーフティネットの不十分さによる社会的課題が指摘されている。また、東日本大震災から4年が経過するが、福島第1原発の収束過程もいまだに見えてこない。リーマンショックなど世界経済危機、自然災害の破壊的な影響、などによる混乱の影響も見られる。これらの混乱による衝撃を吸収し幅広い条件のもとで状況の変化にしなやかに適応する組織や機関、システムを構築するにはレジリエンス（resilience）の概念が有効であるとされる（Zolli, 2012）。

脆弱性に対処する概念として情報工学、統計学の分野では、頑強性（robustness）があげられてきたが最近では多様な場面で課題となる脆弱性に対処する概念として、レジリエンスが「自発的治癒力」の意味で注目されている。レジリエンスとは「外部から力をくわえられた物質が元の状態に戻る力」や「人が困難から立ち直る力」とされている（Zolli, 2012）。建築物・構造物に関しても、地震に対しては耐震構造から免震構造へと観点が移るなどの例も見られる。レジリエンスは物理学に起源をもち「外力による歪みを跳ね返す力」として使われ始め、復元力、回復力などと訳されることもあるが定訳はなくカタカナ表記が多数みられる。さらに現代では、「物質や人にとどまらず、物事が好ましくない状況から脱し、安定的な状態を取り戻す力」の意味で用いられている（Zolli, 2012）。また、カタカナ表記¹に関しても「レジリエンス」、「レジリアンス」、「リジリエンス」などがあげられている。本論文では英語に由来する「レジリエンス」を用いる。

本論文の目的は、近年注目されているレジリエンスに関して、語源、分野、使われ方、概念の変遷などを整理し、さまざまな課題に取り組む個人や組織にとってレジリエンスを高めるために何が必要かに関して事例をもとに検討し、その高め方のヒントを探ることである。論文の構成は以下のとおりである。第2章ではレジリエンスの語源および関連用語について整理し、複数の適用分野における概念の変遷を概観する。次の第3章でレジリエンス概念適用の具体例を検討し、第4章では、個人、組織それぞれがレジリエンスを高めるためには何が必要かを検討する。

2. レジリエンスの概念

2.1 レジリエンスとはなにか

(1) 用語

レジリエンスの概念は図1の左に示すような丸い容器の中のボールの動きで示されることがある。破線矢印のように外部から加えられる力が弱い場合には、ボールは多少移動するが内部にとどまり、やがて元の位置に戻ってくる。ところが実線矢印のように強い力が加えられると内部にとどまりきれず外に飛び出し新たな落ち着き場所まで移動することになる。ボールの抵抗力(ころがりにくさ)、容器の形状(深いか浅いか)、加わる力の強さ、などの要素が総合的に関連し最終的にボールが内部にとどまるのか外部に飛び出すのかが決まるとされる。これに対して脆弱性は図1の右のように不安定な位置にボールがある場合として示される。外力が加えられていない場合にはとどまっているが、少しでも外力が加わると現在の位置にとどまらず移動が始まる。

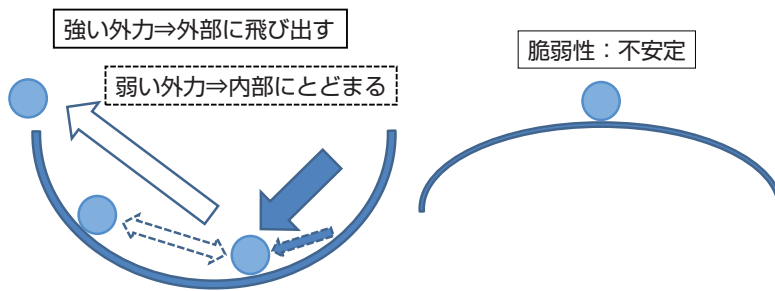


図1 レジリエンスと脆弱性のイメージ

レジリエンスの使われ方はさまざまである。土木工学の分野では建物などの構造物が損傷を受けた後に回復する性能を意味し、地震や洪水による緊急時の対応についてはライフラインなど市民生活に不可欠なシステムが被害から復旧するスピードを示す。一方、生態学では回復不能な状態を回避する生態系の力を意味し、医学の分野では「病気に陥らせる困難な状況、ひいては病気そのものを跳ね返す復元力、回復力」とされる。これは自然治癒力の解明とその治療的応用を指す流れをくむ発想とされる(大塚、2012)。また、心理学ではトラウマに効果的に対処する個人の能力を意味する。さらに、ビジネスの場面では業務継続(BCP: Business Continuity Plan)が可能ないように体制を整備する意味で用いられることが多い。

これらはいずれも環境の変化に直面したときの本来機能の継続性と回復というレジリエンスの二つの側面のどちらかに基礎をおいている。このようにレジリエンスはさまざまな分野で少しずつ異なった意味で使われているため、厳密に定義することは困難であるとされる。レジリエンスと関連する用語には、「頑強性」、「冗長性」、

「元の状態への回復」などがあるが Zolli はこれらを「レジリエンスではないもの」とし、レジリエンスの特徴は「絶えず変化する環境にあわせて流動的に自らの姿を変えつつ、目的を達成する」ことにあるとしている (2012)。レジリエンスと関連分野を以下に示す (図2)。

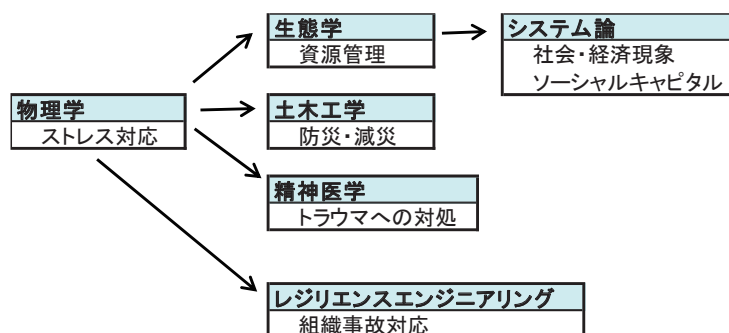


図2 レジリエンスと関連分野

(2) 語源

加藤は精神医学の立場からレジリエンス、ストレス、脆弱性などの用語を語源からたどり次のように整理している。レジリエンスは、元々はストレス (stress) とともに物理学の用語であった。ストレスは「外力による歪み」を意味し、レジリエンスはそれに対して「外力による歪みを跳ね返す力」として使われ始めた。イギリスでは1600年代から「跳ね返る、跳ね返す」の意味で使用され、1800年代には「圧縮 (compression) された後、もとの形、場所に戻る力、柔軟性」の意味で使われるようになった。フランス語では「跳ね返る、跳ね返す」を意味する動詞 *resilier* の古語は中世にさかのぼり、ラテン語 *resilire* に由来し、語源的には「再び跳ねる」を意味した。名詞 *resilience* が使用されるようになったのは最近のことであり、1900年代に入り物理学の分野で「衝撃強さ」の意味で使用されたと説明している (2009)。

半藤ほかは、システム論の観点から連続的に続く山と谷の例を示し、レジリエンスを「騒乱・攪乱などのショックに対しシステムが同一の機能・構成・フィードバック機構を維持するために変化し、騒乱・攪乱を吸収して再構築するシステムの能力」と定義し、物理学から生態学をへてシステム論にいたる変遷を示している。さらに、レジリエンスの用語を物理学や数学の世界から生態学、心理学、社会経済を含むシステム論などに転用したことにより、解釈に混乱がもたらされているとも指摘している (2012)。

2.2 レジリエンス概念の展開と定義

レジリエンス概念は前述のように、さまざまな分野に用いられているが、ここでは、生態学から社会経済分野 (香坂ら)、精神医学 (加藤ら)、レジリエンスエンジ

ニアリングの研究成果を参照しその概念の変遷を見ていく。

(1) 生態学から社会経済分野

レジリエンスは生態学の分野では Holling が提唱した概念である (1973)。ある種が他の種を食べたり食べられたりする二種の関係が時間の経過とともに数や数値が安定した平衡状態に落ち着くまでの分析から議論が始まり、数値があるタイミングで急激に変化しながら別の地点で落ち着くというパターンが見つかった。自然環境と生態系が外力を受けて再生するプロセスと合わせて、人間社会がどのように対処し反応したのか、そして何を教訓として記憶に残そうとしているのかもレジリエンスの範疇となる。香坂はボランティア、組合、企業やその連合体など、さまざまな組織がどのように大震災に対応し、再生の力となっていたのかを示し概念変化の背景には、資源管理についての考え方の変化があると指摘する (2012)。

レジリエンス概念登場以前の資源管理では資源を定常的な状態と捉え、それを効率的に管理し、最適に分配することが議論の中心であり専門家が立てた計画のもとに政策が実行された。ところが、自然災害や社会・経済の変化により生態系が当初の予想とは異なる状態に変化することが多くなると、専門家や行政主導の計画は長続きしないことも多くなった。その一方で、地域住民が意思決定に参加すると地元の生態系や資源についての詳しい知識や経験則が計画や決定に反映されるという効果が示されるようになった。このようにして「予想して計画に基づいて実行する」という前提が崩れ、レジリエンスという生態系にかかわる概念が登場したと指摘する。すなわち、生態系やコミュニティがダイナミックに変化する状況に応じて、いかに柔軟かつ自発的に自らのシステムの機能を維持するかに焦点が当たるようになった。科学の予想予測技術に限界があることを前提とした資源管理の在り方を議論するようになったことと並行してレジリエンスという概念が登場してきたとの指摘である (2012)。これは、都市計画において専門家のみが計画を策定するのではなく、当事者としての住民参加が議論になってきたことの背景でもあろう。

半藤らは、システムの安定性と、回復力とは別の概念であるとの Holling の主張を紹介し概念の変遷を整理した。生態学では安定性を表現する概念としてレジリエンスとレジスタンス (抵抗性) が数理的に定義された。この場合のレジリエンスは回復速度の意味が強く、元の状態を維持しようとする働きを示す。したがってシステムの回復プロセスであるレジリエンスは抵抗性を意味するレジスタンスよりも長い時間スケールで観察する必要がある、レジリエンスは変化に対するシステムの頑強性よりも柔軟性 (flexibility) の意味が強いとしている (2012)。スウェーデンのストックホルム大学のレジリエンスセンター (RC) はレジリエンスを「(回復できなくなるような) 境界線を超えない範囲で、システムが継続的に変化して適応していく能力」と定義し、適用分野の拡大について次のように示している (香坂、2012)。

- ① 森林の生態系が衝撃や変動に対してシステムとしてどのように対応し、自らの機能を維持しているかという議論

② 社会科学を含むさまざまな分野でレジリエンス論が展開

③ 日本では、生産を担っている農村や漁村など社会システムを含む領域での変動や変化に耐える力についての議論も活発化

さらに、半藤らは、レジリエンスの概念は1999年に設立された Resilience Alliance (以下 RA と表記) により整理され洗練されていくとし、次のように紹介している (2012)。

RA はレジリエンス思考法を提案し、レジリエンスの特長として次の4つの属性を示す。

① 許容度 (Latitude) : システムが変化しても回復力が機能する許容範囲。許容範囲を越えた変化は回復困難か、回復不可能になる。

② 抵抗度 (Resistance) : システムを変化させることの困難さ (感度の逆数とされる)。

③ 危険度 (Precariousness) : システム現状の危うさ。

④ パナーキー (Panarchy) : システムの階層構造において、1つの階層レベルが他のレベルに影響される程度。

①～③は「安定性地形」と呼ばれ、④は大小さまざまな安定性地形が相互作用を起こす。社会・生態システムにおいてレジリエンスを管理するのは人間である。現在運用されている環境政策は緩和、適応、転換の3つがあり、レジリエンスを向上させるための戦略を上の4つの特徴に対応して次のように示している。

(a) 許容度を拡大しシステムの現状を限界点から遠ざける

(b) 抵抗度を深くし限界点に近づきにくくする

(c) 安全な場所に移動させ、システムの現状を限界点から遠ざける

(d) パナーキーを適切に管理しレジリアンスの向上をはかる

(a) と (b) は安定性地形の改変、(c) はシステムの軌跡の制御、(d) はシステム内の相互作用を変化させることとしている。RA はレジリエンスと適応能力 (adaptability) とともに、転換能力 (transformability) という概念も示している。この概念は、現状のシステムが維持できなくなったときに、新しいシステムを創造する能力とされる。生物の進化も生物の転換能力といえる。RA の Folke ら (2010) は「小さなスケールの転換を起こすことで大きなスケールのレジリエンスを導く」ことを提案している。

(2) 現代精神医学におけるレジリエンス

精神医学の分野でも生態系と同様にレジスタンスとレジリエンスは区別され、レジスタンスは心理的な免疫 (苦痛、損害、機能障害に抵抗する能力) を示し、緊急事態、集団災害により社会が抱えたトラウマから脱却するプロセスをレジリエンスとしている。加藤の説明を以下に要約して示す。精神医学におけるレジリエンスの使い方は、① 防御因子、回復因子と、② 防御、回復に向けた過程とに大別できる。防御因子はさらに、個人特有のものと集団特性に分けられる。防御因子と防御に向けた

過程とは別の意味を有するため、これらを区別する意味で、「防御因子」にはレジリエンシー (resiliency) を使い、回復などの「過程」にはレジリエンス (resilience) を用いることが提案されたが、防御・回復に向けた過程は防御・回復因子を含むと考えられるため、レジリエンシーをレジリエンス因子と呼ぶ立場もみられる。レジリエンスを防御・回復に向けた過程ととらえると、レジリエンスは「対処行動」「自己治癒」などと解釈できる (2009)。

1970年ごろより精神医学の分野ではレジリエンスの概念に関心が集まり、環境に恵まれないトラウマを負った子どもたちが逆境を乗り越えられるように導く戦略を練るうえで「レジリエンス」の術語が使用され、1990年ごろよりフランス語圏で数々のトラウマに曝される子どもの問題をめぐって、この概念が本格的に導入された。小児精神医学の領域で1970年代にレジリエンスに関する初期の研究の多くが行われた。レジリエンス概念はイギリスでの孤児の観察・治療に起源を持ちハイリスクあるいは外傷を受けた子どもの長期観察から始まった。フランスでは、外傷を受けた子どもを早期から施設やチームで診ていくというセクター医療、小児精神科、臨床心理士を中心に関心が持たれた。貧困、暴力、両親の病理など環境的に不安定な要因があるハイリスクな子ども698人のコホート研究を行い、そのうちの三分の一が能力のある、信頼できる、配慮のできる成人となったとの報告が紹介されている。子供たちを面接し評価する長期研究から防御因子を検討し、子どもの養育環境と外部からの支援の質、子ども自身とその自己評価、援助者との一対一の関係、社会活動への参加が影響するとの結論が得られている (大島ほか、2009)。

不利な生活環境 (貧困、親の精神疾患など) により生活困難の危険性があると判断された子どもに焦点を当てた長年にわたる追跡調査の結果、不利な生活環境で生育しても立派に成長した子ども、精神病理の発生率がより低い子どもの存在が確認されたことから、良い自尊心や社会的支援などを健康や安らぎを促進すると思われる因子として同定した。以上を踏まえて1980年代から、精神疾患に対する防御因子と抵抗力を意味する概念として、レジリエンスに関する研究が成人の精神医学にも導入され始めた (田、2009)。

また、レジリエンス概念には逆境だけではなく、生活上のストレスも含まれるようになり、最近では戦闘、暴行、事故、自然災害などの急性心的外傷の場面でも使われるようになり、外傷後ストレス障害 (PTSD: Post-traumatic stress disorder) を対象とした研究が増加している。1995年のアメリカの論文には、アメリカ人の50%~60%がなんらかの外傷的体験に曝されるが、その全ての人がPTSDになるわけではなく、8%~20%がPTSDになると報告されている。レジリエンス概念の拡大により、PTSDの危険因子とともに、「防御因子」が注目されるようになった。レジリエンス因子を調査した臨床研究としてベトナム戦争中に極度のストレスを受けながらも、うつ病やPTSDを発症しなかった750人のパイロットを対象とした研究結果が報告されている。この研究では、レジリエンス因子として楽観主義、利他主義、他人との社会的サポートを有していること、使命感を有していること、何らかのトレーニングを受けていること、を挙げている。現代医学ではPTSD

に対する確立された治療法は、まだないとされるためレジリエンスをいかに高めるかが治療の大事なポイントであるとの指摘がある (田、2009)。

(3) レジリエンスエンジニアリング

レジリエンスエンジニアリング (Resilience Engineering、以下 RE と表記) の概念は効率性と安全性のトレードオフ問題への対処として 2001 年に提案され、最初の会議が 2004 年スウェーデンで開催された。この背景には 2000 年代はじめに、宇宙探査活動の中で生じた一連の事故を受け、NASA がリスクのあるミッションを管理するための方策を求めていることが指摘されている。RE の概念は安全に対する既存のアプローチへの補完的な考え方であるとして認知され、航空管制、医療安全など、安全問題へのより良い方策を求める分野への応用を通じて高度化されつつある。RE は「物事が悪い方向へ向かわない状態」(Safety-I) という従来の安全の考え方から「物事が正しい方向へ向かうことを保証する」(Safety-II) という新しい考え方への変革をうながすことを提唱している (Hollnagel、2014)。RE では、レジリエンスの要素は、① 悪いことが起きないようにする能力、② 悪いことが悪化しないようにする能力、③ 起こってしまった悪いことからリカバリーする能力、とされている。その目的は、組織、技術、システムが状況の変化に対処して活動を継続できることとされ、状況の変化は想定内、想定外 (unexpected) を含むとされる。レジリエンスとは「組織 (あるいはシステム) が外乱に対してなるべく早期に対応し影響から回復することによって、ダイナミックな安定性に最小の影響しかもたらないようにする能力」と定義されている。すなわち、変化や外乱の前、途中、後で、システムが自身の機能を調整し、想定内、想定外、いずれの状況に対しても必要な動作を維持できる能力としており、レジリエントなシステムの実現例として、環境の動的変化、変化に適応した動作の継続、破局状態の回避、活動目的の適応的・能動的修正、定常状態への復帰に至るプロセスをあげている (Hollnagel、2012)。

(4) 定義

以上のように多様な分野でさまざまな定義が示されているが、機能維持や目的に至るためのプロセスが重視されていることが見て取れる (表1)。

本論文ではプロセスに注目し、生態学 (レジリエンスセンター) の定義「(回復できなくなるような) 境界線を超えない範囲で、システムが継続的に変化して適応していく能力」を採用し、特に変化への適応能力を重視し検討していくこととする。

表1 レジリエンスの定義

分野／提唱者	定 義
物理学	外力による歪みを跳ね返す力
生態学	（回復できなくなるような）境界線を越えない範囲でシステムが継続的に変化して適応していく能力
精神医学	精神疾患に対する防御因子と抵抗力
システム論 （社会経済）	外からの変動や変化に対して、システムが反応し、衝撃を吸収しながら、自らの機能、構造を維持する能力
Zolli	外部から力を加えられた物質が元の状態に戻る力。人が困難から立ち直る力
レジリエンス エンジニアリング	組織（あるいはシステム）が外乱に対してなるべく早期に対応し影響から回復することによって、ダイナミックな安定性に最小の影響しかもたらないようにする能力

3. レジリエンスの適用事例

次に社会経済分野における災害からの回復過程に示されるソーシャル・キャピタル（社会関係資本、Social Capital、以下 SC と表記）の役割、RE の事例として組織事故への対応、の2例を用いてレジリエンスについて検討する。

3.1 災害からの回復過程と SC の役割

Aldrich（2012）は、1923年～2005年における4件の大規模災害（関東大震災、阪神淡路大震災、インド洋の津波、ハリケーン・カトリーナ）からの回復過程の研究を通して社会の資源が災害後の回復過程にどのように影響するのかを示した。具体的には被災後の回復の違いを SC の役割に焦点を当てて検討し、社会的ネットワークや社会的つながりはどのようにして被災後の回復エンジンを形成するのかをデータを用いて説明した。Putnum（1995）は SC を「信頼」「規範」「ネットワーク」の3要素を用いて定義した。また、SC の3つの次元として、bonding（結束、家族同様の関係、強いきずな）、bridging（橋渡し、地域外、他の人種、他宗教などとのつながり）、linking（連携）が示されており、Aldrich はこの3つの次元を用いた分析を示している。

（1）関東大震災

関東大震災（1923年）では、地区により震災後の人口の回復水準は大幅に異なっていた。そこで、SC の代理変数として「投票率」を用いて人口回復率と投票率との関係を分析した。1922年と1933年の選挙において、投票率が高くデモの多い地

区はレジリエンスを示した。また、強い社会的ネットワークは強い絆と恩恵をもたらすと同時に、負の外部性（デマによる韓国人虐殺など）をもたらすことも示した。これは結束 SC が強い反面、SC の橋渡し機能が欠けている場合には負の外部性の可能性があることを示しており、SC のダークサイドといえる。

東京地区では、1922年から震災後の1933年の間に近隣組織での「町内会」の数が452から986に増加したと報告されている。さらに、東京の都市計画者は、若者、女性、定年退職者などが地域活動のために集会所を利用できるように多くの集会所の設置を計画した。これは、欧米で教会が果たす役割を、小学校や近隣公園が果たせるようにするための計画である。

(2) 阪神淡路大震災

1995年1月17日の阪神淡路大震災からの回復に関しては、神戸市の18年間（1990～2008）、9区（垂水区、灘区、北区、須磨区、東灘区、長田区、兵庫区、中央区、西区）のデータを用いて分析した。2007年までに人口はほぼ回復したが一部の区は低い水準のままだった。具体例として同程度の2地区の比較を示した。長田A地区では長田出身者は10%未満、35%が賃貸住宅であり、リーダ（幹部）を当てにする傾向があり空洞化がみられた。一方、福島B地区では、75%は福島生まれ・福島育ちであり、賃貸住宅の割合は16%であった。伝統的な社会的絆による支援、強い絆は相互作用、協働、情報伝達を促進し、SCは全体的として回復率を決定づける要因であるとしている。

NPO 設立数を SC の代理指標として使用し、真野地区（SC 高い）と御蔵地区（SC 低い）との2組の事例比較により災害回復過程における SC の役割を示した。コンドミニアムの所有者の多くは、再建か修復かの合意形成が進まず、困難な状態であったが、SC が高い地域ではこの困難を乗り越え、修理のみならず、新しい集合住宅を建てた。真野地区では震災後ただちに、「共同建て替え」の議論に入り、古い戸建て住宅を防火・防震の集合住宅に建て替えたことが示され、「近所づきあい」の重要性を指摘した。地震被災者の300人が公園でのテント暮らし、共同体と離れて一人暮らしの仮設住宅での「孤独死」は120人以上と報告されている。「震災前は近所の住民をほとんど知らなかった。」との声が多かったが、1995年以降、神戸市は信頼と参加を目的としたプログラムを通して、強い連帯の構築を求めた。また、この地域の支援には63万人～100万人規模のボランティアがかかわった。日本政府はNPO、NGOの登録を促進し、1995年は「ボランティア元年」と言われるようになった。しかし、回復に必須の要素は、短期の外部者よりも、被災地の共同体の住民のネットワークが重要であることを示した。神戸のケースでは、1923年の関東大震災とは異なり、強い社会的紐帯の負の外部性は見られなかったと報告している。

(3) インド洋の津波

海底地震によるインド洋の津波（2004年）では、23万人が犠牲になった（インド、インドネシア、スリランカ、タイ）。その回復率はさまざまに異なるが、インドの

漁村（Tamil Nadu）の例では、災害直後に政府が混乱している時期にもかかわらず、死者、負傷者、再建のための必要物資、食糧、日用品などのリストを作成し支援物資を受け取り、住民に平等に分配した。すなわち、「uur panchayats（住民組織）」のある村落は、結束 SC、連結 SC、が住民を結び付け情報提供に役立った。

しかし、村落の主要グループのメンバー以外（未亡人、カースト最下位、イスラム教徒、その他村落の周辺グループ）は物資の分配から排除された。ところが、SC のない村落では復旧すら始まらなかった。これらの村落は回復過程の地図からも抜け落ちていたため NPO・NGO との連携も取れず、インド政府からも顧みられず、津波の被害を受けた多くの村落は援助物資をほとんど受け取れなかった。SC を強化するような措置を採る必要がある。

さらに、62 の村落と 1600 人のデータを用いた数量分析も行い、冠婚葬祭に出席する村人は社会関係の中に深く埋め込まれ、レジリエンスが強化されており津波後も資源へのアクセスが可能であった。標準的な災害支援手順では、物理的なインフラの損害の修復に焦点が当てられるが、SC は災害からの復旧には不可欠である。SC は共通の課題の解決をもたらすが、とくに、グループに所属していない人、地方組織の主要メンバー以外の人などに負の外部性が伴う。すなわち、SC はある人にとっては便益であるが他の人にとっては悪影響をもたらすこともある。

（4）ハリケーン・カトリーナ

ハリケーン・カトリーナ（2005 年）から 5 年が経過しても Lower Ninth Ward はゴーストタウンのままであり、カトリーナ以前の人口が回復した地域は 4 分の 1 である。しかし、中でも、Village de L'Est（ベトナム系住民が住む村）は甚大な被害を受け貧困状態で困難であったが、人口回復率は 90% を示し被災後 2 年以内にビジネスも再開した。この村では地区の活動家は、避難中もその後も、住民間の強い絆を維持することに努めた。すなわち、Vien 神父やその他のリーダーはハリケーンに備えて住民を避難所へ誘導し、全メンバーの写真を撮り、遠くの家族や友人への安否確認とした。さらにベトナム語のラジオ局を立ち上げ、村の再建計画を避難民に知らせた。このようにして SC は私的保険の役割を果たし、マルチタイプの SC はレジリエンスを強めた。

（5）SC の役割

以上 4 件の災害の検討結果は SC が回復のエンジンであることを示した。次に整理結果を示す。1923 年の関東大震災後の人口の回復水準は、地区ごとに大幅に異なっていた。1922 年と 1933 年の選挙において、投票率が高くデモの多い地区はレジリエンスを示した。1995 年の阪神淡路大震災からの復興では人口の回復には SC が重要であることを示した。さらに、NPO の設立数が多い地区の人口増加率は、NPO 設立数が少ない地区よりはるかに大きいことや、SC が豊かな地区は、地震直後の火災に対しても協力して消火に対応できたが、連携がない地区では火災により近隣が破壊される現場での住民たちの共同活動はみられなかった。2004 年のインド

表2 災害からの回復とソーシャル・キャピタル

災 害	発生 時期	調査対象 時期	データ	結 果
関東大震災	1923	1922 ~ 1933	範囲・単位：交番の範囲 (1.97km ²) 31 地区 項目：投票率 (SC の代理変数)	人口増加率と投票率との関係 山の手の方が下町より回復が速かった (SC) 平均以上：7%の人口増、平均以下：0%の人口増 負の外部性 (bonding SC) の可能性 SC (bridging SC 欠如) のダークサイドにも注意が必要
阪神淡路 大震災	1995	1990 ~ 2008	神戸市9区 項目：NPO 設立数 (SC の代理変数)	真野地区 (SC 高い) と御蔵地区 (SC 低い) の比較 長田A、福島B：近所づきあいが重要 SC は集合住宅の建て替え合意を可能にした
インド洋 津波	2004	2008	質データ：6 村落 (ケーススタディ) 量データ：60 村落 1600 人	SC は災害の復旧には不可欠 強い絆はメンバー以外 (カースト最下位、女性、高齢者) の排除という問題をもたらす
ハリケーン カトリーナ	2005	2006	範囲・単位：Zip コード 115 地区 項目：大統領選の投票率 (SC の代理変数)	NIMBY 問題の解決には SC が重要 SC は私的保険の役割 マルチタイプの SC はレジリエンス

出所：Aldrich, Daniel P. (2012)、第3章～第7章より作成

注：表中の SC はソーシャル・キャピタルを示す。

洋の津波では、結束と連携の SC が高い村落では、1つの SC あるいは SC がない村落よりもレジリエントであることが示された。住民組織のある村落では、NGO や政府との効果的な連携により、食糧、避難場所、支援の受け取り状態などが確認できた。このような組織のない地域は回復の地図にもものらず取り残された。ところが、強い絆は主要なメンバー以外（カースト最下位、女性、高齢者）の排除という問題をもたらす。標準的な災害支援手順では、物理的なインフラの損害からの修復に焦点が当てられるが、SC は災害からの復旧には不可欠である。

4 ケースはさまざまに異なるが、SC が豊かな地域は協同作業や活動などで効率的・効果的に危機からの回復を実現したことを示し、SC がレジリエンスを提供するメカニズムを以下のように示している。

- ① SC の深い絆は私的保険として機能し、災害後の相互支援を促進する。
- ② 深い社会的結束が集団行動で課題の解決を支援する。
- ③ 強い社会的絆は生存者の声を強くし、地区から離れる可能性を減ずる。

3.2 組織事故とレジリエンス

Reason は安全性とレジリエンスの双方に対する人間のかかわりについて、「大部分の大惨事は人間の不安全行動により引き起こされる反面、トラブルに見舞われた大惨事寸前のシステムを救うのも人間の対処行動である」と指摘している (2008)。事故をおこす人間という視点からは、ヒューマンエラーや違反行動が生じる心理学的メカニズム、組織事故発生メカニズム、事故調査における視点の変遷、の3点をあげ、危機を救う人間という視点からは、危機を切り抜けた事例（軍事、航空、医療など）、人間を「危機を救うヒーロー」とみることの重要性、の2点を指摘している。

(1) 個人の注意深さと集団の注意深さ

人間を潜在的な危険性として認識する立場からは、システム上の問題の認識と対策がとられる。事故・インシデント報告システムをうまく機能させることが重要であるため、システム管理者は、標準手順書、自動化、人間の行動の一貫性を高め、システムのパフォーマンスの一貫性を高めることが、好ましくない変動性に対する解決策であると考えられる。しかし、不安定で変動する世の中で不完全なシステムを維持できるのは、人間の変動性（タイムリーな補正、微調整、順応など）のおかげでもある。思いがけず起こる好ましくない出来事の可能性に注意を払い、好ましくない結果が起きる前に可能性を見つけ、正確に把握したり、リカバリーに必要な心構えを組織全体で共有したりすること、つまり、集団の注意深さ（Collective Mindfulness）や「報告する文化」が重要な役割を果たすとの認識が示されている。組織のレジリエンスの重要な要素には集団の注意深さが挙げられており、合理的な用心深さ（intelligent wariness）の維持には個人と集団における「注意深さ」が必要であるとされる。

(2) システムモデルとパーソンモデルのバランス

Reason は、危機を救う人間の視点（人間をヒーローと見なすこと）を重視する一方で、その弊害についても指摘している。たとえば、医療行為は「手作業」でありエラーの機会も多い、また、その場しのぎの問題解決は弊害をもたらす。その場しのぎの解決はシステム上の問題解決を図るべき人々に問題を報告していない場合があり、システム改善の機会を逸しており安全状態の劣化の前兆ともいえる。組織上の問題点には、①逸脱が当たり前になる、②無理して頑張る、③恐れを忘れる、の3つが挙げられている。人間を潜在的な危険性で見なすモデル（システムモデル）の復活はヒューマンエラーに注目した対応（自動化、チェックシステムなど）により、ヒーローに期待するモデル（パーソンモデル）よりも変動を小さくする。欠陥ゼロにはできないがレジリエンスを高めるためには、システムモデルとパーソンモデルのバランスを取り戻し、レジリエンスの向上、悪影響に強いシステムの構築が求められる。

(3) レジリエンスが高く安全な組織の要件

管理者の仕事は、システムを安全ゾーンにとどめ、外に引き出そうとする力を相殺するように補正を加えること、とされる。また、適正な補正に失敗すると、一時的にせよ安全ゾーンから外れることになるため、外力に対して同じ大きさの補正を同時に反対方向にかける（同時性原理）ことや、タイムリーに適正な補正を行うことも必要である。さらに、適正な補正を行うためには、摂動の発生を予測する能力・摂動を引き起こす要因の理解も必要である。したがって、RE の観点からは次の3つの能力の必要性が挙げられている。

- ① 予見する能力（anticipate）：何を予期すべきか知っていること
- ② 状況に対して注意を払う能力（pay attention to）：何を探索すべきか知ってい

ること

③ 対応する能力 (respond) : 何をすべきか知っていること

リスクの予見は、レジリエンスの本質であり、組織がダイナミックに安定な状態を維持するか、再獲得するか、を可能にする固有の能力であり、誤った判断の回避として、レジリエンスは予見されなかった外乱を、認識し対処できるように自分を適応化できる能力であるとしている。さらに、設計基準事象範囲の境界条件が変化しつつあることをモニターし管理することは、システムが環境中のどのような外乱に対して、どのようにして適応するのかを理解することである。レジリエンスに寄与するシステムの特性は以下の通りとされている。

- ① バッファ容量：構造を決定的に損なうことなく吸収・適応できる混乱の大きさや種類
- ② 柔軟性と剛性：システムが外的な変化や圧力に対応して自分自身を再構成できる能力
- ③ 余裕度：特性限界について近接しているか、または不安定になっている程度
- ④ 許容性：システムが境界の近くにある場合、ストレスや圧力の増大に対して緩やかに劣化 (graceful degradation) するのか、それとも適応能力を超えた際には急激に崩壊するのか。

RE は、どのようにすれば事故が起こる前に安全を創成できるかという課題に関する組織のモデルを再構成する認知プロセスの支援策を提供する。そのために、バッファ、柔軟性、不安定性、許容性などの特性や、レジリエンスに寄与する要因の評価指標を開発する必要がある。実際の結果が得られる前の段階で能動的にリスクを管理するためには、生産性指標や効率性にかかわる目的に関する要求緩和、すなわちトレードオフ型意思決定をいつ行うか知っている必要がある。さらに、短期的な目的集合と中長期的な目的集合とのバランスを調整する方法を提供すべきであるとして次の手法を提唱している。

第1ステップ: 設計段階で考慮していた不確実状態における競争力 (生産性など) と、設計基準事象の枠外に (システムを) 動かしてしまいそうな、設計段階では予見されなかった外乱との境界を監視できるツールを開発する。

第2ステップ: そのモニタリングによってシステムのレジリエンスリソースを消費したり流用したりするような、未予見外乱の兆候を認識できれば、システムのレジリエンスを再強化するような措置を採ることができる。RE の課題は、バッファが劣化し、安全余裕が不安定になり、プロセスが硬直的になり、締め付けが厳しくなるような状況において、レジリエンスを維持・向上・再確立するための方策を求めることである。これは、制御喪失からの回復というよりは、制御喪失の未然回避に焦点を当てているといえよう。

4. レジリエンスの築き方

レジリエンスの築き方は対象に応じて、さまざまに提案されている。精神医学では良い自尊心や社会的支援などを健康や安らぎを促進する因子として同定しており、レジリエンスをトラウマへの対応と捉え、PTSDを受けにくい、あるいは回復に寄与するレジリエンス因子として、楽観主義、利他主義、使命感、他人との社会的サポートを有している、何らかのトレーニングを受けている、などを挙げている（加藤、2009）。また、災害からの回復の場面では、地域やコミュニティの回復力とレジリエンスに注目し、SCの役割が重要であるとの分析結果が示された（Aldrich、2012）。REでは、レジリエンスとは、事故が起こりうるエリアの近くを、常に危険なエリアの外側にいる状態を保ちながら航海するために組織的な活動の舵をとる能力であり、レジリエンスは動的な舵取りのプロセスであるとし、以下の能力が必要とされる。

- ① 危険なエリアに対して組織が今いる場所に関する感度の高い認識能力
- ② 危険エリアへの接近のシグナルや現実の危険が検出された場合、それがたとえ予測されていない、あるいは未知のものであっても、迅速かつ効果的に対応する能力

バッファ、柔軟性、不安定性、許容性などの特性や、レジリエンスに寄与する要因の評価指標を開発する必要性が指摘されている（Reason、2008）。

Zolliはレジリエンスの特性、必要条件などレジリエンスの要件を、被害を受けにくい、被害を最小にする、回復期間が短い、としている。これはREの3つの要素（悪いことが起きないようにする能力、悪いことが悪化しないようにする能力、起こってしまった悪いことからリカバリーする能力）と同様である。また、被害からの回復には、被害を受けにくい設計、防御、迅速な復元、が不可欠であるとしている（2012）。以上のことから、レジリエンスを高めるということは、好ましい状態からはじきだされないように抵抗力を強化し、不測の事態に備えて適応力（状況の変化に適応しつつ自己の目的を達成する能力）の維持を図ることであるといえよう。

したがって、レジリエンスを築くことは、図3に示すように、環境からの影響を受けた個人やシステムが常に安全ゾーンに留まる能力、グレーゾーンへの接近をモニターし安全ゾーンに復帰する能力、一時的に安全ゾーンを離脱した場合には、安全ゾーンへの復帰に向けて、グレーゾーンや危険ゾーンから脱出する能力を蓄えることと考えられる。環境の変化に対して、安全ゾーンにとどまり続ける（悪いことがおきない）

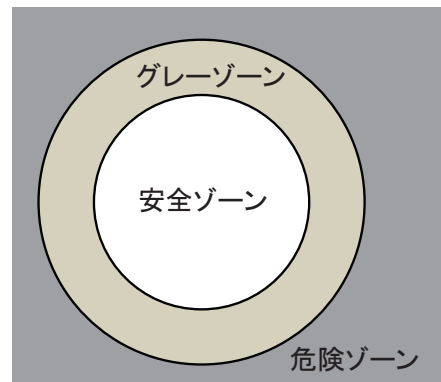


図3 安全とレジリエンス

ためには、踏みとどまる力（適応力）が必要である。すなわち、変化の影響を受けにくくすることであり、抵抗力を高めることである。これには、バッファ機能を強化・活用し衝撃を吸収し許容力の拡大をはかり、本来機能を維持し環境に適応することで対応が可能である。グレーゾーンへの接近、あるいは安全ゾーンからの離脱に際しては、安全ゾーンへの復帰が望ましいのか、あるいは新たな均衡を求めること（機能維持に向けた再構築）が望ましいのかを判断する必要がある。その場合には、現状認識力と予測力・判断力が必要となる。すなわち、安全ゾーンからの乖離の程度、危険度などにより、変化からの影響を認識・予測し、現状への復帰、あるいは新たな均衡への移動のどちらがより良いのかについて、実現可能性も含めて予測し判断する力が求められる。

環境の変化に対して、レジリエンスの観点からは次の3通りの対応が考えられる。

- ① 抵抗：許容量拡大・バッファ機能の活用により変化の影響を受けにくくする
- ② 適応：ショックを吸収し、変化に対応し本来機能を維持する
- ③ 転換：目的達成が可能となるようにシステムを再構築し新たな環境に対応する

以上よりレジリエンスが確保されるしくみ（制度設計）の要件は次のように考えられる。個人の場合では心身ともにバランスがとれている状態、組織の場合には安全性と効率性のバランスがとれており諸資源を動員した目標達成活動が可能な状態、を望ましい前提とすると、環境の変化に対して受ける影響の程度を事前に予測し、影響の最小化（減災）のための対処行動、影響からの回復行動などの計画を準備しておく必要があり、現状認識や事前の計画が重要であろう。

5. おわりに

本論文では、近年注目されているレジリエンスに関して、語源、分野、使われ方、概念の変遷などを整理し、レジリエンスを高めるために何が必要かに関して事例をもとに検討し、その高め方のヒントを探った。まず、レジリエンスの語源および関連用語について整理し、複数の適用分野における概念の変遷を概観した後、レジリエンス概念適用の具体例を検討し、個人、組織それぞれがレジリエンスを高めるためには何が必要かを検討した。レジリエンス概念は、さまざまな分野に用いられているが、いずれも環境の変化に直面したときの本来機能の継続性と回復というレジリエンスの二つの側面のどちらかに基礎をおいている。

生態学から社会経済分野（香坂ら）、精神医学（加藤ら）、レジリエンスエンジニアリングの研究成果を参照しその概念の変遷と概念の拡大を概観した。精神医学の分野では、PTSDの危険因子とともに、「防御因子」が注目されるようになり、レジリエンス因子として楽観主義、利他主義、他人との社会的サポートを有していること、使命感を有していること、何らかのトレーニングを受けていること、が挙げられている。現代医学ではPTSDに対する確立された治療法は、まだないとされ

るためレジリエンスをいかに高めるかが治療の大事なポイントであると指摘されている。

RE の概念は安全に対する既存のアプローチへの補完的な考え方であるとして認知され、航空管制、医療安全など、安全問題へのより良い方策を求める分野への応用を通じて高度化されつつある。本論文ではプロセスに注目し、特に変化への適応能力を重視し検討した。災害からの回復過程の検討結果はSCが回復のエンジンであることが示された。SCが豊かな地域は協同作業や活動などで効率的・効果的に危機からの回復を実現した。REは、どのようにすれば事故が起こる前に安全を創成できるかという課題に関する組織のモデルを再構成する認知プロセスの支援策を提供する。そのために、バッファー、柔軟性、不安定性、許容性などの特性や、レジリエンスに寄与する要因の評価指標を開発する必要がある。REの課題は、バッファーが劣化し、安全余裕が不安定になり、プロセスが硬直的になり、締め付けが厳しくなるような状況において、レジリエンスを維持・向上・再確立するための方策を求めることである。これは、制御喪失からの回復というよりは、制御喪失の未然回避に焦点を当てているといえよう。

レジリエンスを築くことは、環境からの影響を受けた個人やシステムが常に安全ゾーンに留まる能力、グレーゾーンへの接近をモニターし安全ゾーンに復帰する能力、一時的に安全ゾーンを離脱した場合には、安全ゾーンへの復帰に向けて、グレーゾーンや危険ゾーンから脱出する能力を蓄えることと考えられる。安全ゾーンからの乖離の程度、危険度などにより、変化からの影響を認識・予測し、現状への復帰、あるいは新たな均衡への移動のどちらがより良いのかについて、実現可能性も含めて予測し判断する力が求められる。環境の変化に対して受ける影響の程度を事前に予測し、影響の最小化（減災）のための対処行動、影響からの回復行動などの計画を準備しておく必要がある。

参考文献

- 大島一成・阿部又一郎「レジリアンス概念の歴史と現状—フランス語圏を中心に—」
加藤敏編著『レジリアンス 現代精神医学の新しいパラダイム』金原出版、2009、
pp.25-49.
- 大塚公一郎「文化の諸相とレジリアンクス」加藤敏編著『レジリアンクス・文化・創造』金原出版、2012、pp.16-29.
- 柏木克之『地域でめざせ社会的企業』2013
- 加藤敏「現代精神医学におけるレジリアンスの概念の意義」加藤敏編著『レジリアンクス 現代精神医学の新しいパラダイム』金原出版、2009、pp.1-23.
- 加藤敏編著『レジリアンクス・文化・創造』金原出版、2012.
- 香坂玲「レジリアンクスとは—生態学から社会経済分野へ—」香坂玲編『地域のレジリアンクス』清水弘文堂書房、2012、pp.16-33
- 河本英夫「経験の可能性の拡張とレジリアンクス」加藤敏編著『レジリアンクス・文化・創造』金原出版、2012、pp.154-169

- 田亮介「PTSDにおけるレジリアンス研究」加藤敏編著『レジリアンス 現代精神医学の新しいパラダイム』金原出版、2009、pp.75-92
- 半藤逸樹・窪田順平「レジリアンス概念論」香坂玲編『地域のレジリアンス』清水弘文堂書房、2012、pp.51-74
- Aldrich, Daniel P. “Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery,” Univ. of Chicago Press, 2012
- Folke, C., Carpenter, S. R., Walker, B., Scheffer, M., Chapin, T., and Rockstrom, J. 2010 “Resilience thinking: Integrating resilience, adaptability, and transformability”, Ecology & Society, Vol. 15, No. 4, 20.
- Holling, C. S. “Resilience and stability of ecological system”, 1973, Annual Review of Ecological System, Vol. 4, pp.1-23.
- Hollnagel, Erik “Resilience Engineering: Concepts and Precepts”, 2006、北村正晴監訳『レジリエンスエンジニアリング 概念と指針』日科技連、2012
- Hollnagel, Erik「Safety-I から Safety-II へーレジリエンス工学入門ー」吉住貴幸訳『オペレーションズ・リサーチ』日本オペレーションズ・リサーチ学会、2014、第59巻、第8号、pp.435-439.
- Putnum, Robert “Bowling Alone: America’s Declining Social Capital”, 1995, Journal of Democracy Vol.6 No.1, pp.65-78.
- Reason, James “The Human Contribution: Unsafe Acts, Accidents, and Heroic Recoveries”, 2008、佐相邦英監訳『組織事故とレジリエンス 人間は事故を起こすのか、危機を救うのか』日科技連、2010
- Zolli, Andrew “Resilience”, 2012、須川綾子訳『レジリエンス 復活力ーあらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か』ダイヤモンド社、2013

注

- 1 フランス語に由来する「レジリアンス」と英語に由来する「レジリエンス」が多用されている。

創造的日本語教育と価値論

山本 忠行

要 旨

価値論の観点から言語教育を考察すると、新たな気づきが生まれる。「利」の価値から考えれば、知識伝授型教育を生活の向上に役立つ効率的・効果的なものにしていかなければならなくなる。「善」や「美」の視点で見れば、教育のあり方や質はもちろん、教師の姿勢も変わらざるを得ない。価値論は、言語を教えていけばよいという姿勢に陥りがちな教師に、広い視野と使命感を与え、言語教育が何のために、何を目標とすべきかを自覚させるものとなる。

【キーワード】

創価教育、言語の価値、美利善、ウェルフェア・リングイステイクス

1. はじめに

これまで4回にわたって創価教育学に基づいた日本語教育を「創造的日本語教育」と名付け、技術面を中心に論じてきた。山本(2011)では『創価教育学体系』で説かれた「教育技師論」や「学習指導主義」の観点を踏まえつつ、「綴り方指導」に見られる「文型応用主義」が日本語教育にも有効であることを示した。山本(2012)では、特に「綴り方指導」に焦点を当て、作文教育の歴史的考察から「表現教育」の重要性を論じた。山本(2013)では言語教育改革運動の歴史を踏まえて、さまざまな形で誤解されている直接法による言語教育が本来どういうものかについて再考した。山本(2014a)では、「表現教育」と「事柄教育」について掘り下げて論じ、その違いは価値論に通じることを示唆した。

本稿では創造的日本語教育論の締めくくりとして、こうした方法論の基盤となっている価値論から言語教育のあるべき姿を探り、創造的日本語教育の原理構築を目指したい。ただし、本稿は「価値論」そのものを論じるものではなく、言語教育のあるべき姿を価値論から映し出そうという試みである。従来の言語教育論は効率性をめぐる議論が中心となる。しかし、言語教育の影響力を考慮すれば、社会的使命まで射程に入れて論じる必要がある。なぜなら言語教育は社会基盤を形成する行為であり、社会の要請に応えるものでなければならないからである。

本稿は価値をめぐる考察であるため、扱う内容は特に日本語教育に限定せず、国語教育や英語教育を含む言語教育全般について論じることとする。

2. 言語と価値の関係について

言語や言語教育について「価値」の観点から考察した論文は、経済や政治から論じたものぐらいで、言語教育に焦点を当てて論じたものは管見では見あたらない。しかし、言語教育の意義や使命について考えようとすれば、「価値」の問題に触れざるを得ない。牧口は価値問題を回避しては、創価教育学の真の理解は不可能であるとし、その理由として「人間の教育活動は人生の指導であって、人生は畢竟価値創造の過程である。故に教育活動は価値創造の指導でなければならぬ」(『牧口常三郎全集』第5巻:214、以下巻数のみを記す)と主張する。言語教育も例外ではなく、学習者が言語を学ぶことによって価値創造の人生を歩めるようにすることが目標となる。ただし、価値の問題はきわめて複雑であり、多岐にわたる内容を含む。そのため「創価教育の研究に於ても最難関である」(5:213)とも説く。

創価教育の出発点が作文指導であったことについては、すでに山本(2012)で述べたとおりである。これは当時の作文指導法が教科書の暗記と模倣であったために、非効率な上に、生徒の生活向上に役立たないという問題意識から考察が始まったことを示している。どうすれば生徒の自己実現を助け、幸福な生活を築く力を与えられる作文教育ができるのかという着眼点、教育実践における苦心や工夫が創価教育の出発点となったわけである。しかしながら、それ以後の牧口の関心は地理教育および教育政策や教育学などに移ったために言語教育と価値の関係については詳しく論じられないままに終わっている。知識の切り売りや詰め込みを批判する牧口にとって、地理学は価値をめぐる思索を深めるのに最もふさわしいものであったのかもしれない。だが、創価教育の着想が言語教育にあったことは、牧口の創価教育学の考え方をもとにすれば、言語教育を改革するための確固たる基盤となりうることを示唆する。

2.1. 言語の価値

世界に約6000あるとされる言語は、日々それを使いながら生活している人々にとっては水や空気と同じで、生きるために不可欠のものである。人間は言葉によって人となり、言葉によって社会を形成している。意思や感情を伝える道具として見れば、そこに機能的な差はない。一つ一つの言語はどれも何万年もの時間をかけてそれぞれの民族の中で徐々に発展し、継承されてきた貴重な遺産とも言える。ところが規模が拡大し、複雑になった現代社会では、ある言語を用いる人々は社会的・経済的に有利になり、それができない人は生活に窮するという、力の格差に直面する。

言語にはさまざまな価値があり、現実には平等ではない。だれもが学び、習得したいと願う、高く評価される有力言語と、使用者も少なく、無名の弱小言語がある。教育や研究、行政やビジネスなどさまざまな目的に利用され、有用と見なされる言語もあれば、日常語としてしか使われない言語もある。多くの書物が出版される言語がある一方で、書記言語が確立していない言語もある。インターネットの世界

も多言語になったとは言っても、英語と中国語の2言語で情報量の半分近くを占め、上位10言語で約80%に達する(2015年度調査)¹。日本についても同様で、方言と共通語の間には大きな格差がある。公的な場面で方言しか話せなければ、進学や就職にも影響する。

言語には社会的価値、経済的価値、文化的価値などが認められる。グローバル時代を迎え、人、モノ、カネ、情報が世界中を広く移動するようになったことによって国際共通語が求められる中、英語が圧倒的な地位を固めつつある。英語を母語とする人口は4億程度とされるが、英語を学習や仕事で日常的に第2言語として用いる人が急増している。その数は21世紀初めには第1言語として使用する人々の数を超えるだけでなく、さらに外国語として学ぶ者はその倍近い数になると予想されている(Crystal 1997)。

言語の価値は主として「使用価値」である。他の商品と異なり、使って消費されるものではなく、使用者が増えれば増えるほど、使用域が広がれば広がるほど価値が上がる。多数派(マジョリティ)言語使用者は有利になり、少数派(マイノリティ)言語使用者は不利な立場に置かれる。良質の教育、社会的上昇、より高い所得を求める人々によって、多数派言語には多くの学習者がもたらされる。「使用価値」の高い言語は、教育産業を創出し、さらに商工業だけでなく、マスコミ、出版、映画や音楽などへと拡大していき、「交換価値」も備えるようになるが、そういうことができない「使用価値」の低い言語は「交換価値」を持つどころか消滅の危機に直面する。こうした社会状況が「言語帝国主義」(Phillipson 1992)と呼ばれる現象を世界的に作り出しているわけであるが、多くの人々はそれを自覚していない。このことは言語教育において危険なことである。

2.2. 言語意識をめぐる問題

言語は道具の一つにすぎないという安易な考え方は、クリティカルな視点を失わせ、さまざまな弊害をもたらす。その一例を日本の英語教育に見ることができる。1998年の指導要領改訂によって小学校の総合学習の時間に英語活動が導入できるようになって以降、専門家や現場の反対の声を無視して、効果も不明なまま多額の費用をかけて英語教育の強化が図られている。2018年度からは教科化が進められることになっている。その影響は大学にも及び、2015年からはスーパーグローバル大学創成支援事業が開始され、選定された大学では英語によって大学教育を受けるコースが各学部設置される。留学生は日本語の壁を気にすることなく、英語だけで日本の大学で学ぶことができる環境が整えられるわけである。

グローバル化が進んでいるのだから、英語による教育を行って、英語が使える日本人を育てるのは当然のこととする意見もあるが、こうした政策決定の背景には英語ぐらいできなくてグローバル時代にどうするのかという考え方があることは間違いない。そこには他の言語に対する配慮がうかがえないばかりか、授業時間数などを見れば国語よりも英語が重視されていることがわかる²。このような政策導入によって、早期英語教育に拍車がかかり、英語教育産業は活気づいている。小学校の

英語活動はまだ正式な教科化が行われたわけではないにもかかわらず、首都圏の私立中学入試ではすでに30校以上で英語が導入され始めている(朝日新聞2015.1.1)。

英語が重視される一方で、多くの国で一般的になっている中学や高校における第2外国語教育はわずか1%ほどしか実施されていない。こうした英語偏重の外国語教育政策は、世界が目指している多言語・多文化の共生とは方向性が大きく異なっており、言語意識形成の観点からは、好ましい状況ではない。なぜなら、こうした政策は英語帝国主義を助長するものであり、他の言語の軽視や蔑視につながりかねないからである。また、外国語学習はその言語を話す人に親近感をいだかせ、それに関わる文化や価値観を無意識のうちに自分に取り込んでしまう働きがある。それは逆に自分がよく知らない言語文化に対する無関心につながり、子どもたちの目が英語文化圏以外の国や民族に向かなくさせる。場合によっては他の言語を話す人々やその文化に対する警戒心や恐怖感、差別意識や嫌悪感を抱かせかねない。英語を通じて入ってくる情報には敏感になるかもしれないが、それ以外の言語で発信される情報から遠ざかってしまうことになる。これが企業や個人のレベルではなく、国レベルとなれば、安全保障にも関わってくる。実際、アメリカはイラク戦争における情報戦の失敗に対する反省から情報戦略を見直し、2006年1月にNSLI(国家安全保障言語構想)を打ち出し、アラビア語やペルシャ語の語学要員の養成に乗り出すことになった。

英語ネイティブや英語が流暢な人に対しては、敬意や羨望の念をいだく一方で、英語を話さない人や英語が苦手な人を知らず知らずのうちに軽蔑してしまう。英語コンプレックスの問題も懸念される。英語やフランス語を公用語とするアフリカ諸国では、言語による社会格差や経済格差は深刻な問題であり、社会の発展を妨げる原因の一つとなっている(山本2014b)。日本でもかつて方言による差別があったことから分かるように、強者の言語、標準の言語が威信を持つほど、それ以外の言語の地位は低下し、それを話す人々は差別されたり、排除されたりするところに言語教育の恐ろしさが潜んでいる。健全な人間教育を通じて、よりよき社会を築いていくには、言語に対する意識問題を抜きにした言語教育はあり得ないと言えよう。

3. 価値論と創価教育学

教育について論じるときに、価値論がなぜ重要なのであろうか。牧口は価値論の第1章では「価値の考察は単に教育目的観念の内容としてに留まらず、教育目的を達成する方法上の原理としても、より多く為されねばならぬ」(5:215)と述べている。価値について考察することは、何のための教育かという理念と同時に、どのような教育をするのかという実践法を視野に入れていることが分かる。この二者は不可分であり、車の両輪のようなものである。

3.1. 教育の目的

ここでは、まず教育の目的や目標に関する一般的な認識を確認するために「教育

基本法」に定める内容を見ておきたい。

第一条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

第二条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。

二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。

(三、四、五は省略)

ここから読み取れるのは、法律が定める目的や目標は、「国民の育成」、すなわち日本という国家にとって必要な国民、有為な人材を育てるということである。

ここで視点を変えて考えてみよう。教育はサービス産業の一つである。とするならば、受益者である生徒にとって教育はどうあるべきなのかが重要になる。それを牧口は「生徒の幸福」であると喝破している。そして、このことを追究していくと、「価値」の問題に行き着かざるを得ない。子供たちは小学校に入って、読み書きや計算を習う。それは何のためか。国家としてみれば、生徒が一人前の社会人として生きていく、社会を支える人材となるために必要なこと、すなわち基本的な知識や技能を身に付け、規律や道徳を大切にする勤勉な人間となるように指導していけばよいのであろう。だが、生徒側からすれば、それが幸福な人生の実現とどう結びつくのかが大切である。教育は知識の伝授で終わってはならない。もし教師の職が知識の伝達にあるならば、印刷術の発達により書籍が普及すれば教師は不要になると牧口は主張する。そして教師の業について次のように述べる。

知識という名前で表されて居る真理、若しくは道徳を人生に応用して、価値を創造する力の啓培を図ることである。詳言すれば言語によって代表される真理を認識し、記憶するばかりでなく、それを生活に応用して、善と利と美とを創造する能力を増大する様、被教育者を嚮導することが、即ち教師の本務だということである。(6:247)

牧口の考える教師の使命は、生徒が習ったことを適切に使いこなし、自己実現ができるように支援し、幸福な人生を歩めるようにしていくことである。この裏には、従来の教育が知識の詰め込みに汲々とし、価値創造につながっていない、役立たないという問題意識がある。「創価教育学」という名称の中にすでに「価値創造」という意味が込められている以上、何をもって「価値」と考えるのかを明らかにする

必要がある。

3.2. 関係概念としての価値

牧口は「価値論」で、真理と価値の違いについてさまざまな観点から論じている。第二章の最初のほうでは「有りのままの実在を表現したものが、真又は真理であり、対象と我との関係性を表現したものが価値である」(5:218)と述べ、いくつかの考察を経て次の表にまとめている。

表1 真理と価値の関係 (5:233)

一、真理	{	概念——空間的——実在の本質
		法則——時間的——変化の本質
二、価値	{	美的——美——美
		私利——利
		公利——善

この表を示した上で、「真理は対象たる実在を客観して其の普遍の要素を本質となし如実に表現したるものであるのに、価値は対象と評価主体との関係によって発生したもので、その何れかの一方に変化があれば当然価値にも変化は免れ得ないのである」(5:236)と、価値が変化するのは評価主体の主観的要素の変化によると論じている。ここで注目しなければならないのは、価値というのは「関係性」で決まるという点である。

言語そのものは「真理」に相当する。真理の本質は「対象の如実な表現」(5:235)であり、言語なら発音、文法語彙などを含む一つの体系として社会的に存在しているものが相当する。教科書や辞書などの出版物や視聴覚教材もこれに含まれる。言語を学ぶというと、このような知識を学ぶことと思われがちであるが、それは言語を認識の対象としていることになる。単語の意味を覚え、文法規則を理解することは、「注意を対象に向けて、その性質状態を観念として内心に取入れた事」(5:239)である。

それに対して、「価値の妥当性は真理のそれのごとく普遍的ではない」(5:239)とあるように、価値は客観的なものではなく、個々の人間との関係によって異なってくる。したがって、言語教育の価値は、その学習者がその言語を用いてどのような生き方をして充実感や満足感を得られるか、社会で他者と協働して何ができるかで決まる。これは重要な視点である。価値が関係性によって決定されるのであれば、言語教育は人間と言語、そして社会との関係性から出発しなければならないことを意味する。

ここから2つのヒントが浮かび上がってくる。一つは価値が関係概念である以上、学習者と言語との関係を重視した教育を目指すべきであるということである。

それぞれの言語に関する知識は、創造するものではなく、発見しかできない。そういうものは、教科書や辞書などで自学自習も可能である。ICTが進歩した時代を迎え、言語の構造や意味に関するかなりの部分は独学できないことはない環境が整ってきた。だが、実社会で通用する外国語運用力を身に付けるのは容易なことではない。所定の練習や課題を機械的にこなすのではなく、その時、その場に応じて学習者が自ら考えて発話しない限り、言語運用力は育たない。発言内容に話者との関連性、必然性がなければ練習として意味のあるものにはならない。ここに創造的言語教育が求められる理由がある。言語教育は「知識」として学習者に教え込むものではなく、言語の構造や意味を自分の力で類推・発見し、それを活用して学習者が生きる力として活用できる力、「知恵」を育むものでなければならない。それによって身に付けた批判的思考力によって、学習したことを結びつけ、活用できるようになる。

もう一つは批判的思考 (critical thinking) の重要性である。言語教育に携わる者にとって自分の仕事に対して、常に複数の視点から幅広く捉えていく必要があることを示唆する。ある言語を同じように教えたとしても、人によって価値は異なる。社会として見たときは、立場が異なれば等価値とは言えない。これが最善、これは学習者のためと信じて行った行為が、後で悪の行為と見なされることさえある。植民地で行われた宗主国言語の普及は「文明化の使命」の名の下に行われた行為であるが、支配される側の住民にとって言語や文化の破壊につながったことは、その一例である。その意味で、在住外国人に対する言語教育政策が一方的な同化政策にならないようにするために、価値論の持つ意味は大きい。

この表で、もう一つ注目すべきは価値をまず美的なものと利的なものに分け、その利的なものの中に私利（利）と公利（善）があるとしている点である。これに従えば、美の価値を創造する言語教育と利の価値を創造する言語教育は、やや次元が異なることになる。そして利の価値については、私利と公利を意識しながら言語教育を行うべきであるということが導き出せる。

これらの点は創造的日本語教育を考察する上できわめて重要な点なので、詳細な議論は第5節であらためて行う。

4. 何のための言語教育か

価値論に基づいた教育を展開するには、教育の目的に関する考察がカギを握る。牧口の教育に対する視点は、すでに述べたように常に生徒にとって教育がどのような意味を持つのか、生徒の成長と幸福生活に役立つ教育はどうあるべきかというところにある。これが創価教育の基本姿勢である。言語教育も教育の一分野である以上、何のために言語教育を行うのかということを常に問い続ける必要がある。生徒にとって、社会にとって、言語教育は何を目指すべきなのか、いかなる貢献がで

きるのかという視点から、クリティカルに見ていくことが、より善い言語教育を実践するには必須の作業となる。なぜなら言語教育は社会基盤を築くという機能を担っている関係上、明示的であれ、非明示的であれ何らかの形で政治的目的と密接なつながりを持っているからである。言語教育は一見すると言語というツールを教えるだけのようであるが、時として善なる奉仕者となることもあれば、知らないうちに悪に加担してしまうこともある。言語の背後にはそれを使っている人々と、その文化がある。ある言語を学び、そして好きになり、使っていれば、価値観や物事の認識にも影響を与えることを認識しておくことが、言語教師の基本的な心構えである。

4.1. 言語教育による社会貢献

あらゆる学問は、人類の幸福な生活に寄与することが期待されていると言ってよい。しかしながら、「象牙の塔」という言葉に象徴されるように、学問が現実社会と遊離しがちであることも否定できない。時には両刃の剣として災厄をもたらすことすらある。そこに「価値」をもとに言語教育を再考しようとする理由がある。社会言語科学会が設立された際に、徳川宗賢はJ.V. ネウストプニーとの対談で、「ウェルフェア・リングイスティクス」を提唱した。そこでは言語学者について「言語研究が楽しい、真理の追究をしていればいいと言ってばかりいずに、それも大切ですが、社会に貢献することも考えるべきではあるまいか、そしてこれまでの研究成果をどのように社会に役立てるか、足りないところはどこなのか、そういうことを考える時期になっていると考えたわけです」(徳川1999:90)と語っている。それは経済学者アマルティア・センの「ウェルフェア・エコノミクス」という考え方に触発されたものだとしている。だが、残念なことに徳川はこのアイデアを体系化することなく急逝した。

「ウェルフェア・リングイスティクス」に相当する訳語としては「福祉言語学」「福利言語学」「厚生言語学」などが挙げられるであろうが、意図するところは学問と社会を結びつけようとするところにある。真理や法則を探求するのが学問であるが、それだけでは学者の自己満足に終わってしまう。価値というのは「実在及び其の相互関係現象の刺戟に対する情的又は智情的反応によりて感得した関係性又は力的妥当性を持つ影響力の量的概念」(5:242)であり、関係性と影響力が重要である。したがって、個々の学問ではその理想を実現するには限界があるため、より高い価値を生み出そうとすれば、必然的にさまざまなものを結びつけ、総合的に活用することが求められる。徳川は、アマルティア・センが経済学に倫理的な考え方を持ち込んだように、トランス・ディシプリナリー(学際的研究)が重要であるとも語っている(徳川1999:99)。細分化された学問を社会に役立てるためには、他の学問分野との関連づけや協働が必要になってくる。したがって、言語教育に価値論の考え方を取り入れることは、貢献可能な領域を広げ、質も高めていくことになると思われる。

目的観の乏しい教育は、知識や技術そのものが目的となってしまうがちである。目的が不明であるばかりか、目標も曖昧である。教えるべき項目と順序は決まって

いても、何のためかがはっきりしないまま教えられてきた。知識をどれだけ覚えたかで、学習者は評価される。教え方の効率によって教師の評価が決まるのであるから、説明を工夫して、理解させることに重点が置かれる。言語教育であれば、正しい発音と文字の読み書きから始まり、正確な文法、そして多くの語彙を効率的に覚えさせることが教師の仕事ということになる。それから先は学習者の自己責任とされてきた。

だが、それでよいのだろうか。本来の語学教育の目標は単語と文法を覚えることではなく、学んだ言語を使いこなせるようになるところにあるはずである。言語が道具であるからには、それを用いて何らかの目的を達成してはじめて、言語を学ぶ意義が達成されたことになると言える。

4.2. 近代日本の言語教育とその目的

明治以降の日本の言語教育が何のために行われてきたのかを確認しておきたい。明治維新を迎えた日本は、西欧諸国をモデルとした近代化、国民国家建設のために学制を敷いた。当時の日本社会は幕藩制度と身分制度によって分断されていた。学校教育の目的は学校教育によって国民意識を涵養し、富国強兵を進めることであった。

明治時代の言語教育には2つの大きな柱があった。

第一に全国共通の言語「国語（標準語）」を創成し、それを学校教育によって普及させ、江戸時代まで地域方言（出身地による違い）と社会方言（身分や職業による違い）によって分断されていた社会を統合することである。標準語の普及は、方言を遅れたもの、価値のないものと決めつけ、その撲滅を基本方針として進められた。その結果、地域によっては方言札を用いた厳しい方言抑圧が行われることになった。

第二に外国語を通じて近代化に必要な知識と技術を西洋から学び取るということである。外国語の習得はエリートになるために必須とされた。なぜなら、高等教育はお雇い外国人によって支えられ、英語を中心に、専門によってはドイツ語やフランス語なども用いられたからである。中学や高校では週に8～10時間が第1外国語学習に当てられていた。高校では第2外国語がさらに4時間加わるので、授業時間の半分近くが外国語に当てられていたことになる。外国語運用力が求められるのは、帝国大学等に進むわずかなエリートだけであり、そうした優秀な人材は、授業時間が今より多かったこともあり、文法訳読法でもある程度の外国語運用力を身に付けることができた。その一方、多くの国民にとって外国語は不要であった。たとえ必要だとしても、貿易など直接外国人に接する仕事に従事する者を除き、たいていは文献を読んで必要な情報が入手できれば事足りたのである。

それが戦後は中学まで義務教育となったために、英語を必要としない国民が多い中で外国語をどう扱うかが問題となった。そして議論の末に選択教科とすることになった。中学校の学習指導要領で外国語が必修教科となったのは、2002年からである。制度上は選択教科とされながら、事実上の必修教科として教えられるという奇

妙な形で、長期間にわたって英語教育が行われてきたという経緯も外国語教育の目的を曖昧にさせてしまった一因であると考えられる。

日本の近代教育の目的は、上に述べたように国家にとって有為な人間を作るための教育であり、教育を受ける側にとってそれがどのような意義を持つかはほとんど視野に入っていなかった。被教育者は目的ではなく、手段化されていたとも言える。国家にとって有為かどうか重要であり、有為な人間を選別するためのふるいの一つとして言語教育が機能していたと見ることもできる。

4.3. 年少者のための言語教育

では、言語教育が現代社会で果たすべき役割とは何か、何を目的とすべきか。そこで育てるべき言語能力の目標はどこに置けばよいのか。言語力の基盤を形成すべき年代である年少者について見ていこう。

学習指導要領では、国語教育の目標として次のように記されている（「小学校学習指導要領」第2章第1節）。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

ここに記されていることは、どの国の公用語についても当てはまることであるが、言語の持つ機能に基づく定義である。第一に、四技能の習得であり、それを用いて自己表現ができる、読んだり聞いたりしたことを正確に理解できる、そして周囲の人々と適切なコミュニケーションをとることによって人間関係を築けるようになることが目標となる。第二に道具教科としての役割である。他の教科を学習するために必要な思考力や想像力、そして日本人として求められる言語感覚を養っていくことである。第三に、外国語教育にはない目標として、国語を尊重する態度を育てることが目標とされている。

小学校の外国語活動については「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことが目標とされている。ここでポイントとなるのは「コミュニケーション能力の素地」であるが、具体的なイメージがつかみにくい。外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるようにするための指導内容として、次のようなことが挙げられている。（「小学校学習指導要領」第4章）

- (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
- (2) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。
- (3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。

コミュニケーションの楽しさを知り、積極的に他者と関わり、コミュニケーションをとることは、あらゆる学習活動において重要である。ここではどのような文型や単語を覚えるとかいうようなことは重視されていない。年少者の場合、外国語は嫌だ、怖いなどと一度感じさせてしまうと、その後の学習がうまく進まなくなる。細かい文法事項や発音にこだわりすぎないようにし、通じることの面白さを体験させ、外国語に興味を持たせることが、学習意欲を高めることになる。喜びや感動は、年少者の言語習得において、最大のエネルギーとなる。子どもの時に言語や文化の差異へのこだわりを克服し、異言語・異文化への許容度を広げることができれば、外国人と相対したときに、臆することなくコミュニケーションがとれるようになるはずである。肌の色や顔つきが違っていても似たようなことを感じ、考えている、同じ人間なのだという気持ちになることが、外国語によるコミュニケーションの第一歩である。それは英語のみならず、どのような外国語であっても共通する。世界にはいろいろな発音や文字がある、同じこともそれぞれ違った言い方をするというような気づきが外国語学習の土台になってくる。これが「素地」ということになる。このときに、教師が英語至上主義的な態度で生徒に接してしまうと、せっかくの外国語活動の目的が台無しになってしまうことに気をつけなければならない。

指導要領では、言語や文化について体験的に理解を深めるための指導内容として次の3点が示されている。

- (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
- (2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。
- (3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。

こちらは音声やリズムに慣れる、言葉の面白さや豊かさへの気づき、および異文化理解と交流について述べている。外国語教育は実用と教養という二面性を持つ。年少者対象の外国語指導では、言語を体系的知識として教え込もうとすると、うまくいかないことが多い。それはまだ十分に認知能力が発達していない段階の指導だからである。文字と説明に頼って知識を詰め込もうとするのではなく、音声によるやりとりの中でコミュニケーションの楽しさ、面白さを実感させていかなければならない。

小学校英語ばかりが注目を浴びるが、近年増加する日本語指導が必要が子どもたちの指導は大きな課題であり、日本語教育は大きな使命を担っている。自分の意志で日本に来たわけでもないのに、異言語・異文化の中に投げ出された子どもたちは、生きていくために日本語を学び取らなければならない。日本語の壁によって勉強についていけなかったり、進学できなかったりする。いじめや不登校の問題も深刻である。帰国しても母語能力の不足によって苦しむ子が少なくない。

年少者対象の日本語教育では、国語指導と外国語指導の両者を兼ねている。外国語活動であれば、「素地」だけでよいかもしれないが、日々日本語で行われる授業に一日も早くついていけるようにするために、日本語を使う楽しさを感じさせると同時に、4技能の習得を図っていかなければならない。さらに教科学習との連携を図りつつ、表現力とともに、理解力、思考力、想像力を育てる必要もある。特に10歳未満で来日した子どもの場合は、まだ母語が十分な学習言語として完成していないことが多いので、認知能力に配慮しながら注意深く丁寧な指導を行っていくことが求められる。

4.4. 言語教育改革の課題

言語教育をよりよいものに改革していくための手がかりとして、価値論からどのような手がかりが得られるであろうか。そのポイントを確認しておきたい。

言語にはさまざまな機能があるが、グローバル社会における言語教育は人間が生きるための技術であるという側面をまず考慮しなくてはならない。日本語教育だけでなく、国語教育も英語教育も知識ではなく言語を使いこなす技術に指導の重点を置くべきである。しかし、多くの言語教師の意識は知識教育や教養教育に意識が傾きがちであり、説明によって知識を伝授することで満足してしまう。言葉の意味や文字の読み方や書き方、あるいは教材に出てきた内容に関する知識を教え込もうとする。多聴・多読やシャドーイングなどの人気が高まっているが、それは技術指導ではなく、学習者の自助努力にゆだねているに等しい。

言い換えれば、教師の目的意識の低さが原因となって、手段が目的にすり替わってしまっている。泳げるようになりたい人に、楽器の演奏ができるようになりたい人に、講義だけで済ませることはあり得ない。泳ぐこと、演奏することが目的であれば、実際にやらせながら、こうすればよいと助言をしたり、手本を見せたりしながら指導していくはずである。言語が使えるようになることが目的の場合、講義を聴いて文法を理解し、単語や例文を覚えるのは、その言語が使えるようになるための手段にすぎないはずである。教科書に出てくる本文に登場した人物や出来事に関する知識を得ることは目的ではない。教科書の内容は、言語の運用力を育てるための素材にすぎず、それがどれほどの名演説であれ、感動的な事柄であれ、学習者が話したいことでもなく、ほとんど関係のない、死んだ言葉同然である。これで運用力が育たないというのは、冷静に考えれば当然のことである。

また、CEFR(欧州共通参照枠)の能力記述文に基づくシラバスやCLIL(内容言語統合型授業)などが注目を集めているが、近年提唱される教授法はどれも言語を使うことによって習得させようとしているところに共通点がある。この時に気をつけるのは、使っていれば、言語能力が伸びるとは限らないという点である。教科学習を目標言語で行えば、言語教育の目的が果たせるのであれば、海外で教育を受ける日本人の子どもも、国内の学校に通う外国人の子どもも、その学校で使われている言語の習得が飛躍的に進むはずである。ところが現実には厳しいものがあり、ネイティブなみの言語能力を身に付けられるのは一部の生徒に限られる。小学校程度の

内容なら何とかついてきても、中学や高校となると落ちこぼれてしまうことが少なくない。それは高校の卒業率や大学進学率の低さとして表れている。

課題遂行練習や目標言語で教科学習を行っても、使い慣れた表現を繰り返し使うだけで表現力が豊かになるわけではない。語彙と知識を増やしても、それは言語表現の材料を増やしたにすぎない。それをどう使うかを指導しなければならない。学習言語能力まで伸ばすには、その言語を使う環境や機会を与えればよいのではなく、緻密なシラバスに基づく計画的な言語指導、すなわち知識教育と表現教育の違いを認識した指導がなされるかどうかが鍵を握る。英語を公用語とするアフリカの国々でも、教科教育を英語で行うことで学力が低迷するばかりか、言語能力も伸びないことが問題視され、英語科教育の充実の必要性を叫ぶ声が出ている。同様にネイティブ教師とおしゃべりをしているだけで言語力が伸びるわけではない。それは数十年海外で暮らしていても、ピジン英語しか話せない日本人がいることから分かる。言語教師に求められる姿勢は、牧口がいう「教育技師」として自らの指導技術を磨き、向上させていくことである。こうした点はこれまでの拙論と重複する部分があるので、この程度にとどめる。

5. 言語使用は創造的活動

価値論から言えば、言語運用能力の習得以上に重要なのは、それで何をするのかである。言語技術すら身に付かない教育は論外であるが、言語能力さえあればよいというものではない。言語を学んで何をするかで教育の価値が左右される。教える側も、学ぶ側も明確な目的意識を持って教育学習活動を行っていくのが、価値論に基づいた言語教育学ということになる。言語を教える・学ぶというのはどういうことか。他教科の教育と何が異なるのかを再確認しておきたい。

理科や数学であれば、定理や公式を覚えたら、それを応用して問題を解く練習をしながら、課題解決能力を身に付けていく。社会科であれば、歴史的な出来事や関連する人物や背景事情、ある地域の気候や産物などさまざまな事柄を知り、それらの関係性等について学んでいくことになる。以前の言語教育は、これらの教科と同じように文法を学習し、単語を覚え、文章を訳読する、あるいはモデル会話を暗記するというような形で行われていた。しかし、こうした学習法では、時間と労力の割に、成果と言えるものがなかなか目に見えない、役に立たないと批判されてきた。それが19世紀末から始まった言語教育改革運動につながっているわけであるが、教育現場では今なお教科書を訳して読んで、暗記するという教え方から抜け出せていない状況がある。言い換えれば、次々と提唱される教授法理論が、現場を大きく変える力となり得ていないのである。

言語教育を実のあるもの、より価値あるものにするためには、他教科との違いを明確にした上で、どうあるべきかを考えなければならない。最も大きな違いは、言語は人間の思考活動と直結しているということである。言語の習得は、自身が考えたこと、感じたことを言語によって表現できる、他者が表現したものが理解できる、

さらにそれに応じて適切なやりとりを展開していくことが必要になる。だが、それは教科書に示されたモデル会話や本文といったものを暗誦することによってできるようになるものではない。相手や場面、意図や感情によって千変万化するものである。言語活動は本来、創造的なものであり、既存の定式化されたものを反復練習によって覚えて使うというようなものではない。

別の観点から述べれば、言語教育の成否は、いかに教科書を使いこなすかというよりも、いかに教科書依存を脱するかというところにかかっている。同じような内容のやりとりであっても、実際の発話場面は千差万別である。アルバイトの店員はマニュアル通りの発話でたいい問題は起こらないとしても、客が常に予期した反応をするとは限らない。朝、友人と出会ったようなときでも、「おはよう」というときもあれば、相手の様子によっては「あれ、だいじょうぶ」「ねむそうだね」などというときもあるだろう。目上なら丁寧な表現となるし、仲良しグループであれば、ふざけた挨拶や仲間内で決まった表現が使われるときもある。モデル会話は、何の話か分かるように作られているが、実際の会話では互いに了解済みの事項は言語化されにくいので、「どうなった」だけで済ませることもある。

現実のコミュニケーションは臨機応変の対応力が求められるが、それを教室という限定された環境で完全に身に付けることは困難だとしても、授業そのものが生きたコミュニケーションになるようにする工夫があれば、現実場面でもある程度は対応できる力を育てられるはずである。言葉というのは、自分の心、思いを言葉に乗せてだれかに伝えてはじめて、言葉を発したことになる。だれかが書いたものをそのまま暗記しても、それはまさにオウムが人の言葉を意味も分らず真似するのと同じであり、コミュニケーション活動にはならない。教材で学習した内容を踏まえつつも、学習者と生きたコミュニケーションを心がけて語りかける工夫をすることである。言葉の使用は創造的活動であるというところから出発してこそ、本来の言語教育が築かれるのである。

5.1. 言語による価値の創造

言語使用は創造的活動であるというからには、価値論で説かれる美・利・善をいかに創造するかということが課題となる。

山本(2014)では言語指導レベルを3段階に分けて考えることを提唱し、従来型の知識中心の教育を「真」を重視する教育であり、「事柄教育」と位置づけた。「事柄教育」では言語という対象について説明をし、理解させ、暗記あるいは模倣をさせることが中心となるが、それは価値を創造しているとはいえない。

これに対して、学習者にとって「利」となる実用的技能を重視する言語教育を「表現教育」とした。学習者に生きる力を獲得させることを目標とし、そのための表現や運用の技術を身に付けさせることを目指すものである。日本語教育は、学習目的や環境、あるいはレベルによって異なるが、一般に数百時間、長くても千時間ほどで行われるものである。サバイバルコースや職場教育などになると数十時間しかない場合もある。そうした限定された環境で可能な創造的教育とはどのようなものか

を熟慮した結果たどりついたのが「表現教育」である。入門期から自己表現を意識した指導を行っていく。教師は教科書の内容を説明したり、読ませたりするのではなく、最初からジェスチャー、あるいはレアリアやイラストなどを使用しながら、学習者に即した語りかけや問いかけを行う。教師が適切な働きかけ方をすれば、学習者は未知のことであっても、類推によって意味や構造を判断し、返答をする。生きたコミュニケーション活動がそのまま導入であり、練習である。教室作業は、できるだけ学習者の現実生活に即したものにしていく。教科書はどういう手順で学んでいくかを示す一つの指針であり、学習活動の後の確認用に用いることを原則とする。

こうした教育が「利」に当たると言えるが、山本(2014)で論じなかった「美」や「善」も含めて、さらに考察を進める。

5.2. 言語によって表現されるもの

価値を創造する言語教育の議論に踏み込む前に、人が言語で表現するものについて考えておきたい。言語は情報伝達手段と言われるが、伝えるものは単に情報や知識だけではない。言語によって表現されるものは、すべて人間の精神活動の結果である。その領域は一般に知・情・意に3分類される。ということは言語活動もこれに応じて分類されるはずである。文科省の「言語活動の充実に関する指導事例集」を見ると、第2章「言語の役割を踏まえた言語活動の充実」では次のように整理されている。(これは小中高を通じて、基本的な部分は同じである。)

(1) 知的活動（論理や思考）に関すること

- ア 事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること
- イ 事実等を解釈し説明するとともに、自分の考えをもつこと、さらに互いの考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること

(2) コミュニケーションや感性・情緒に関すること

- ア 互いの存在についての理解を深め、尊重すること
- イ 感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を互いに伝え合ったりすること

これを見ると、学校教育としては知的活動を重視していることがわかる。(1)の「知」、イが「意」に相当すると考えられる。また言語技術としてみれば、(1)が中心となり、(2)は「情」の部分である。言語と言うよりも言語を用いる態度の要素が強いと思われる。

では、日本語教育としての言語指導はどうあるべきか。母語話者の場合は、基本的な言語能力を身に付けてから学校教育を受けるわけであるが、第2言語としての教育の場合は、この知・情・意のバランスを考える必要がある。特に年少者の場合、自分の感情を適切に言語化できない、他者に伝えられないということになると、人格形成や人間関係に影響する。留学生や成人対象の場合、初級用では文型積み上げ式の教科書で情報伝達型の文型を中心に習い、中上級では説明や評論などの文章を

読むことが一般的である。そのため、いざ自分の意見や気持ちを伝えようとすると、十分に言語化できずに相手に伝わらない、誤解されるなどということが起きやすい。母語話者は家庭や生活経験、あるいは小説やドラマなどから「情」や「意」の伝え方を自然に学んでいくことができるが、外国人の場合はそれができない。しかも意見や気持ち表すには、説明文と比べて各段に多様な表現や語彙が用いられる。第2言語教育では、それを年齢相応に、場面に応じて適切に表現できるように指導していくための工夫が求められる。特に最近の中上級教材は、内容重視教育の影響からか、トピックや内容の面白さで素材が選ばれる傾向が強くなっていることにより、文章の多様性の面で見ると偏りが目立つ。これは人間教育の観点からすると、問題である。

5.3. 言語による「利」の創造

「利」というと経済的な価値と捉えられがちであるが、価値は「感動的反応たる情的活動から構成した量的概念」(5:297)との考えに基づけば、学習者が学習した言語を実生活において活用し、所期の目的を達成して満足や喜びを感じれば、それは「利」の創造をしたことになる。日本語教育の主たる目標は、ここにあると言っても過言ではなく、Can-do が重視される所以もここにある。道が分からなければ道を尋ねる、頼みがあれば依頼をする、友人を誘って出かけるなどが初級段階の例である。ある程度学習が進めば、学部や大学院での学習や研究のため、卒業すれば就労のため、よりよき人間関係を作っていくため等々、活動の幅が広がるが、どれも自分の要求や目的を達成するための道具としての日本語である。学生なら講義を聴き、レポートを書いたり、発表をしたりする。会社に勤めれば、会議や営業のための日本語も必要になる。観光ガイドとなって観光客を案内することもある。研究者となれば、文献を読んだり、研究発表や議論も行い、さらに講義をしたりする。中にはマスコミに就職して、原稿の執筆をしたり、テレビで解説をしたりする者もある。こうなれば言語力が生きるための手段となり、収入や地位に結びつき、文字通りの「利」の価値を生む。

教える側としては、学習効率・効果を上げるために最大限の努力と工夫をする。これも学習者個人にとっての「利」となる。その上で教える側の意識に、何のため、どう使うのか、ということが加わってくれば、学習者もしっかりとした目的意識を持つことができる。モチベーション・デザインとして J.M.Keller(2010) が挙げている4因子、Attention (知的好奇心)、Relevance (関連づけ)、Confidence (自信)、Satisfaction (満足) は、価値論から見れば学習者に「利」を意識させることで、学習動機を高めると言える。特に生活者対象の日本語教育の場合、文型積み上げ式の日本語教科書を使って、文法構造を細かく指導していくことは、時間がかかるばかりで、学習意欲を減退させる原因となるばかりか、使えないという不満が往々にして出てくる。また、居場所作りだということで、おしゃべりをするだけでは、本来の目的である日本語能力を伸ばすことは難しい。学習者側の視点に立って、必要な語彙や文型、使用場面に配慮し、最大の効果を上げるための指導を心がけなければ

ならない。一人一人の学習者が「利」の創造をしていくことができるように配慮することは、語学教師の使命である。

「利」に対して「害」に対する注意も必要である。言語教育の「害」とは何か。「ウェルフェア」という観点から言語問題を考えれば、それが見えてくる。日本語教育の場合は、小さい子どもに日本語を教えることによって母語が喪失する場合がある。これは親子のコミュニケーションを難しくしてしまい、アイデンティティ形成にも悪影響を与える。年齢などの影響もあるが、親および子どもの言語意識が最大の要因である。親は家庭で母語を使っていれば、子どもは自然に習得すると思っているが、幼稚園や小学校に通うようになると、急速に母語を使わなくなり、運用能力が低下、あるいは消滅してしまう。子どもの側は、周囲が日本語を使っている環境の中で、自分の言語や文化に対して自尊感情を持てなくなってしまう、母語を継承しようとする意欲が薄れてしまう。

第2言語教育は、道具としての教育とともに、異文化理解の役割も担っている。異言語・異文化を理解、尊重する態度を涵養しなければならない。異言語・異文化の蔑視は、摩擦や対立を生み、いじめや差別の原因ともなる。日本語教育に限らず、外国語教育は差異へのこだわりを乗り越えさせ、多様性が自分の生活を豊かにするということが重要である。英語を特別視するような態度を教師が取れば、英語至上主義、英語崇拜が子どもたちの心に知らず知らずのうちに植え付けられてしまう。英語に対して苦手意識を持った子どもは、外国語コンプレックスによって劣等感や卑屈感に悩まされることになる。言語教師は、広い視野に立ち、寛容性を持つことによって、こうした「害」を生まないようにしなければならない。

5.4. 言語による「善」の創造

山本(2014)では「表現教育」に絞って論じたので、「美」と「善」については触れなかったが、本来の創価教育は「利」「美」「善」すべての価値を対象としたものである。創造的日本語教育も、「利」に留まらず、美や善の創造につながることを理想とする。本稿では「善」と「美」を次のように位置づけたい。

表2 価値論と言語教育の位置づけ

善	人間教育	美	文化・芸術
利	表現教育		楽しみ・豊かさ
真	事柄教育		

すでに3.で示したように牧口は利的な価値を「利」と「善」に分けた上で、後者の特徴を「公利」と捉えている。つまり「善」の創造とは、個人の「利」の追求から、その目指すものが自分以外の他者、公的なものになった場合である。「利他」

的な行為と見なすこともできる。生きるための言語活動は、本人にとって利益であるばかりか、使い次第で友人や家族、コミュニティなど周囲にも広く利益をもたらすことができる。言葉によって親や兄弟を喜ばせたり、励ましたりすることもできる。これは「善」の創造の一端である。言葉は人と人の心をつなぐ最大の武器である。言語教育は、異言語・異文化の壁を乗り越え、人の心に橋を架け、平和と共生の基盤を築くためのものである。偏狭な価値観によって、視野狭窄の人間を作るようなものであってはならない。

何気ない一言が、人の心に希望と勇気の灯を点すこともある。地域の日本語教室にはさまざまな生活者が悩みを抱えながらやってくる。その時、日本語教師は日本語を教える役割にとどまらず、身近なよりどころとして悩みに耳を傾け、励ましたり、アドバイスをしたりすることが期待されている。そこで生きる元気を取り戻し、自立できるようになった人が、さらに他の生活者を支えていくなれば、善意の輪の拡大が可能になる。異なる価値観の人間が出会えば、対立や摩擦も必然的に生じてくる。その時に、言葉は和解のための武器となる。時には弱者を守るために、悪と戦うために、正義の言論戦をしなければならなくなることもあるかもしれない。言語の力は、社会のさまざまな場面で「善」の創造を可能にするのである。それが世界的規模に広がれば、平和を守る武器として機能する。そのための言語教育は、厳しい言論戦にも耐えられる高度なものを目指すとともに、異言語・異文化に対する寛容さ・包容力を育てるものでなければならない。

「善」に対する負の価値は、言うまでもなく「悪」である。人を幸福にすることもあれば、人を傷つけたり、だましたりするものもある。人をつなぐこともできるし、人と人の間に壁や溝を作ることもある。対立や争いを生むこともある。強い信頼関係を築くこともできる。異言語・異文化が接触する最前線が日本語教育の世界である。誤解を防ぐ技術、人と協調して生きていくための言葉の使い方を指導項目の中に入れておく必要がある。人間関係を分断するものは「割る＝悪」であるとの意識を持って、言語教師は教育に当たりたいものである。

5.5. 言語による「美」の創造

通常言語教育において、「美」に関するものは文学教育以外ではほとんど取りあげられることはないが、価値論において「美」をどのように捉えられるのか。牧口が価値の分類を試みた第5章では、次のように整理されている (5:325-326)。

- 一、美的価値＝部分的生命に関する感覚的価値
- 二、利的価値＝全人的生命に関する個体的価値
- 三、善的価値＝団体的生命に関する社会的価値

牧口は美的価値を感覚的価値、部分的生命に関するものと捉え、「我々の精神に軽快なる驚異的感情を惹き起す程度の変化を表す感覚的対象で美という歎称を与えるものである」(5:325) と述べている。美は感覚的なものであるために、同じ対象に

対して何も感じない人がいたり、あるいはつまらないと感じる人がいる点で定式化することが困難である。しかし、言語によって作り出される美も、価値創造であることは間違いない。その中には落語や漫才といった庶民向けの話芸から、詩や小説などの文学作品まで含まれる。感動的な朗読や心に残る話し方も言語による美の創造ということになる。芸術として歴史的な評価に耐えるものは、才能と努力の結果生み出されるものである。それを生業とするには、職業としての特別の訓練が必要となり、日本語教師の使命とは次元が異なる。

だが、心地よくさせる、あるいは人を楽しませる、喜ばせるということは、だれもが日常の円滑なコミュニケーションのためにも大切なことである。一般的な言語教育の対象としては、人間関係をよくするための話し方や文章の書き方というのが、現実的なところと言える。どのような話し方をすれば人の心に響くのか、発声法や抑揚の付け方、ポーズの入れ方などの音声に関する基本的な指導、わかりやすい話し方、相槌の打ち方やターンの取り方、談話展開の工夫や話題の選び方などの指導を受けたかどうかで、その後の言語使用は大きく変わってくるであろうし、職場での人間関係を築くためにも役立つに違いない。書に興味があれば、書道の手ほどきをするこゝも、言語による美の創造につながる。

美に対する反価値は醜である。人を不快にさせる下品な話し方もある。社会で生きるための言語は、意図が伝わればそれでよいというものではない。話し方によっては、軽く見られたり、疎まれたり、誤解されたりする原因となる。言語教師は、実用的言語教育で満足するのではなく、より美しい言語が使えるように、さらに芸術的価値の一端にでも学習者が触れられるように自らも研鑽を重ねていかなければならない。

6. おわりに：言語教育にとって価値論とは

価値論は言語教育を改革していく上でカギとなるような視点を提供してくれる。まず、言語教育は一般に、文法や語彙などの知識を説明によって教えることで満足する「事柄教育」に陥りがちである。これではどんな教材もほとんど学習者の生活には役に立たない。「利」の視点に立てば、教え方も学び方も変わってくる。いかに生活に関連づけて「利」の価値を創造するかが創造的言語教育の出発点である。

また言語教育は、単なる技術教育でよしとしてはならない。言語は意思や情報の伝達手段であるとともに、社会や文化を支える基盤である。人が日々生きるためのコミュニケーションを豊かで快適にしてくれるものでもある。これが「善」と「美」の視点である。「利」と「善」は表1から分かるように、私利と公利で連続性があり、善の創造は教育の根本的な目標である。それに対して、美は感覚的価値であり、部分的なものである。そのレベルは前節で論じたように日常的なものから文化・芸術と言えるものまで幅広いと考えられる。

学校教育としての言語教育は、時間や資源の制約上「利」に焦点を当てた「表現教育」が中心になる。言語能力の習得は学習者にとって生活の質のみならず生

で左右する。自己表現の幅を広げ、他者とつながり、共生の道が開ける。教育や就労の選択肢も増える。だが、それだけでは本当の創価教育とは言いがたい。より善い社会を築き、支える豊かな価値創造力を身に付けた人材を育成するには、「善」「美」を視野に入れた言語教育にしていかなければならない。言語教育の理想は、異言語・異文化のぶつかり合いを通じた人間錬磨であり、全人的教育である。

言語教育は政治手段として利用されやすい性質を持っている。その悪弊を防げるかどうかは言語教師の価値観にかかっている。歴史的に教師の善意が結果的に悪につながったことが少なくないことは、すでに論じてきたとおりである。グローバル化によって世界中の人々が移動する時代を迎え、言語教育の重要性は増すばかりである。日本語ができないために苦労している在住外国人への支援はエンパワメントであると同時に、母語や母文化の軽視につながることもある。グローバル人材育成が英語崇拝の気持ちを植え付けてしまえば、英語以外の言語話者に対する差別感情につながりかねない。言語と価値の問題に関する理解の有無は、さまざまなところに影響が波及する。言語教師は幅広い視点から、自らの職務をクリティカルに捉えていくことが求められている。それを支えるのが価値論であると言ってよい。教師の意識改革ができれば、技術教育として軽視されがちな言語教育に対する見方も変わってくるであろう。

本稿で扱うことができたものは、「価値論」の一部にすぎない。今後さらに思索を重ね、創造的日本語教育の原理的基盤を確固たるものにしていく所存である。

注

- 1) Internet World Stats の統計による。
- 2) 2012年度施行の中学校学習指導要領では、中学3年生の国語は年間105時間、外国語（英語）140時間と定められている。

参考文献

- 徳川宗賢(1999)「ウェルフェア・リングイステイクスの出発」『社会言語科学』Vol.2-1、89-100
- 平高史也(2013)「ウェルフェア・リングイステイクスから見た言語教育」『社会言語科学』Vol.16-1、6-21
- 牧口常三郎(1982)『牧口常三郎全集第5巻』第三文明社
- 牧口常三郎(1983)『牧口常三郎全集第6巻』第三文明社
- 松原好次・山本忠行編(2012)『言語と貧困』明石書店
- 村田和代・他(2013)「ウェルフェア・リングイステイクスにつながる実践的言語・コミュニケーション研究」『社会言語科学』Vol.16-1、1-5
- 山本忠行(2011)「創造的日本語教育試論」『創価大学別科紀要』12号、7-39
- 山本忠行(2012)「牧口常三郎の綴り方教育に学ぶ言語教育」『通信教育部論集』15号、創価大学通信教育部、50-70
- 山本忠行(2013)「日本語直接教授法再考」『通信教育部論集』16号、創価大学通信

教育部、69-89

山本忠行 (2014a) 「表現教育としての日本語教育」『通信教育部論集』17号、創価大学通信教育部、8-30

山本忠行 (2014b) 「英語圏アフリカ諸国における比較言語政策の試み」『言語政策』Vol.10、日本言語政策学会、149-172

Crystal, D. (1995) *English as a Global Language*. Cambridge University Press.

Keller, J.H.(2010) *Motivation Design for Language and Performance*. New York: Springer.

Phillipson, R. (1992) *Linguistic Imperialism*. Oxford University Press.

参考 URL

文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/

文部科学省 (2011) 「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～」【小学校版】

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1301088.htm

Internet World Stats. INTERNET WORLD USERS BY LANGUAGE : Top 10 Languages.

<http://www.internetworldstats.com/stats7.htm>

現代都市計画制度についての考察

劉 継 生

1. はじめに

ダンテは「神は田舎を創り、人は都市を創る」と述べている¹⁾。これは、田舎は自然に生じるものであるが、都市は人間が意図的に創った社会であると理解できる。この都市には大きな集積効果がある。エドワード・フレイザー（2012）は、「都市は人類最高の発明である」と述べている²⁾。彼は都市が人を生産的にする利点を強調して、多くの創造的な人材が集まる都市に身をおくと、互いに刺激され、生産性が高まり、イノベーションが活発化され则认为している。都市とは何か、その定義は捉え方や分野によって多様である。空間的視点からみると、都市とは道路や建築物などの物的構造からなる人工環境である。これらの物的構造は都市生活の基盤になる。しかし、都市の中には居住、生産、商業などの機能が混じり合い、大勢の人々も活動している。この調和の視点からみると、都市とはそこに住んでいる人々の多種多様な行動によって形成される社会秩序である。また人口から見てみると、都市とは、規模が大きく、密度が高く、非農業人口が多い集落である³⁾。さらに総合的視点からみると、都市とは、地域の社会的、経済的、政治的な中心となり、第二次と第三次産業を基盤として成立した人口、施設の集中地域である⁴⁾。

都市のつくり方に対しては、文明発展の各段階に応じて人類が成功と失敗を経験してきた。都市をいかにしてつくるかという知見を究めるのは都市計画である。「都市計画」という概念には2つの意味合いがある。それは描かれたイメージもしくは出来上がった計画書という実体概念と、計画をつくりそれを遂行するという行為概念である。この行為概念を「プランニング (planning)」あるいは「計画過程」という。すなわち、計画策定 (plan) → 計画実施 (do) → 計画評価 (see) という3つの機能からなる行為過程である。この過程は、計画実施後の結果の評価が再び計画の策定あるいは修正にフィードバックするというサイクルをなすのが普通であり、「プランニング・サークル」と呼ばれている。

都市計画は、道路や建物などの公共施設を整備することによって社会全体に大きな影響を与える。一種のソーシャルデザインであるともいわれている。このため、都市計画の公益性や効率性を担保する制度はきわめて重要である。都市計画とは「都市をつくり、維持していくための技術や仕組み（制度）」である⁵⁾。技術的な都市計画は土木や地理学分野で大昔からあったが、社会的制度としての都市計画が成立したのは近代に入ってからである。その背景は、産業革命が招いた都市環境の悪化、

市民革命による君主や貴族から民衆への都市づくり主役の変化である。資本、産業、労働者の都市への集中は深刻な都市問題や社会の無秩序を引き起こした。これらの問題を解決するため、都市の公衆衛生の改善などの目的で建築の制限や都市施設の基準を定める社会的な仕組みが、19世紀中ごろから導入されるようになった。また、オーウェンの理想工業村、ハワードの田園都市論、ペリーの近隣住区論なども提案された。こうした都市計画理論の発展および個別法の積み重ねを通して、次第に体系的な都市計画制度へと発展した⁶⁾。

都市計画制度は、都市整備に関する様々な経験とそれぞれの時代の要請に応えながら、法体系の制定や、国主導から自治体主導への地方分権などを経て今日の形に確立されてきた。また、都市は常に変化しており、これをコントロールするための制度も常に修正を余儀なくされている。本稿では、現代日本の都市計画制度はどのようなになっているか、文献調査を通じてその全貌を考察し、特徴を分析してみる。

2. 都市論と都市計画論

(1) 都市発展の周期性

都市は生きものだと捉え方もある。都市は生命の如き、生まれ、成長し、広がり、そして様々な問題を抱えるようになり衰えていく。都市問題をたえず解決することによって都市の衰退を止め、持続的な発展が可能となる。このような都市の発展の流れを周期性として次のようにまとめることができる⁷⁾。

都市が形成された後はじめに迎えたのは、人口が増加し、産業が集中する「都市化」段階である。この段階においては、人口と産業は集積の利益を求めて都市に集中する。集積の利益とは、産業活動が相互に近接することによって情報収集しやすくなり費用が節約できることから生じる利益である。政府も都市基盤を整備するために投資する。職場の提供、福祉や教育の充実によって大勢の人が都市に吸い込まれる。一方、無秩序な都市化や無計画な土地利用は都市発展の混乱状況を招く。これをスプロールといい、衛生問題や防災などの問題をもたらす。

第2は、中心部が過密状態となり、郊外の開発が進み、周辺部で人口が増加する「郊外化」段階である。人口と産業の都市への集中は、地価高騰や交通混雑、環境汚染など集積の不利益も生み出す。集積の不利益が利益を上回るようになると、企業が拡張のために郊外に移転したり、人々が住宅を郊外に求めたりする。都市部の過密問題を解決するため、政府もニュータウン開発など郊外を整備し、工場の郊外移転や郊外での住宅供給を政策的に奨励する。郊外に居住し都心のオフィスに通勤するライフスタイルが成り立つ。ここで都市中心部の人口が減少し、周辺の郊外地域で人口が急増する「ドーナツ化現象」が現れる。

第3は、都市の中心部が魅力を失い、人口が著しく減少し、やがて衰退は周辺部にも波及し、都市圏は全体として人口を失う「逆都市化」段階である。都市の中心商業地区とそれを囲むインターシティにおいて、生活者としての定住（夜間）人口が減少し、高齢化が顕著となる。また、人口減少と高齢化は、地域住民組織の弱体

化、歴史的文化財と風致地区の消失、コミュニティ活動の停滞をもたらし、集積利益も得られなくなる。その結果、都市圏全体が衰退過程に入る。

第4は、中心部が再開発され、都市が再生し、ふたたび人口が戻ってくるという「再都市化」段階である。地価の下落、都市計画の規制緩和、住宅ローンの低金利などにより、都市再開発が進展し、住宅とオフィスの供給を増大させ、住宅を取得しやすくなる。その結果、これまで郊外に住宅を求めざるを得なかった人々が中心都市にとどまれるようになり、人口空洞化が進んでいた都心部で人口が増加するようになる。再都市化の推進策が様々である。例えば、東京都豊島区は日本初のマンション一体型新しい庁舎を建てた。庁舎は地下3階、地上49階。上層階は分譲マンションであり、低層部(3～9階)に豊島区役所が入る。地下2階のロビーは東京メトロ有楽町線「東池袋駅」と地下通路で直結する。屋上には庭園があり、水や緑の見学ができる。

(2) 都市計画の特徴

21世紀に入り、情報化・グローバル化の進展によって衰退しつつある都市を再生させる戦略のひとつとして、「創造都市」が世界的な注目を集めるようになった。創造都市とは、イギリスの都市計画家チャールズ・ランドリーが提唱した概念である⁸⁾。彼は、1980年代以降の欧州における都市再生の経験を踏まえて、都市が潜在的に持っている創造性を意識的に引き出すことの重要性を指摘している。例えば、衰退した工業都市から建築・デザイン都市として再生したグラスゴー、脱工業化によって残された産業遺構を観光資源として活用したドイツのエムシャーパーク。このように、都市問題を解決するために新しい都市像を確立し、目標達成に向けて人的・物的資源を動員し統合を行ってゆくのが都市計画である。

都市計画が存在するにもかかわらず、なぜ、スプロールのような都市問題や逆都市化のような衰退を未然に防ぐことはできなかったのか。実は、都市計画には限界があり、万能ではない。地域社会において将来について何らかの行動の指針を求めるならば、都市計画が必要となる。当面入手可能な(人的・物的)資源の評価推定を出発点とし、抽象的あるいは定性的な長期目標を立て、それを具体的定量的な中位の目標にブレークダウンし、それに対して手元の利用可能な諸資源を適当に配分する、という手順を通じて計画化が成立する。

都市を対象とした計画には、福祉や教育分野の計画など、社会計画や経済計画もある。これらのソフトな領域の計画に対し、都市計画は、都市の空間秩序を形成するハードな領域を担う計画として位置づける。ソフト分野とハード分野を含めた都市に関連する諸領域の計画を、統一的に機能させるために立案し、都市を対象とする総合的な計画として「都市総合計画」の概念がある。

都市計画は、都市施設の整備や運営を行う計画のことであり、物的計画あるいはフィジカル(physical)な計画と呼ばれる。都市計画は都市総合計画の一環としてのハード分野の計画であるのに対し、社会計画、経済計画、環境計画、福祉計画などは都市総合計画に基づいたソフト分野の計画である。両者の相補関係はきわめて

重要である。フィジカルな計画がなければ、いかなる社会経済計画も具象化せず、フィジカルな計画も社会経済計画の裏付けと予算措置がなければ無用の長物となる。

(3) 都市計画の機能

都市の将来の発展において、都市計画には「計画」「規制」「事業」という3つの機能がある。これらの3機能は整合的に働き、ともに機能してはじめて、都市計画は効果的に推進される⁹⁾。

「計画」とは、都市施設や都市空間の整備方法、都市発展の将来像、まちづくりと都市活動の指針、市民・産業・行政に共通するガイドラインを確立することである。

「規制」とは、計画を実現するために、住宅や商業施設、工場などを決めた用途地域へ立地するようにし、不適合な都市開発行為を制限することである。一般には、土地利用を実現に導くための制限と、都市計画事業を円滑に進めるための制限に分かれている。

「事業」とは、計画に基づいて都市空間や社会基盤の開発と整備を行う都市計画事業のことである。公的資金を用いて公共事業として実施されることが多いが、民間事業として行われることもある。民間事業の場合は公的資金からの補助を利用して行われる場合もある。

3. 都市計画の対象と法律

(1) 行政区域と都市計画区域

都市計画は行政区域の全域で実施するのではない。区域を指定することにより、この区域内で都市計画事業が実施され、土地利用の規制と開発行為の制限が行われる。都市計画法第5条に基づいて指定された都市計画を実施する地域を「都市計画区域」と呼ぶ。都市計画区域とは、市又は一定の要件に該当する町村の中心市街地を含み、自然的条件や社会的条件を考慮し、一体の都市として総合的に整備し、開発し、保全する必要があると指定する区域である。都市計画の適用範囲は都市計画区域内に限る。都市計画区域外においては、都市計画の策定や都市計画による規制はできない。

都市計画区域は市町村の行政区域の全域ではない。行政区域には田園部や林野部もあり、優良な農地や広大な山林地帯を都市計画区域に含む必要はない。多くの都市計画区域は、行政区域のうちの既成市街地および放置すれば無秩序な都市開発が行われる郊外を設定している。もちろん、市町村全域を区域にする例もある。また、市街地が隣接する市町村に連担して広がっている地域には、複数の市町村にまたがって一つの都市計画区域が指定される。これは広域都市計画区域と呼ばれる¹⁰⁾。

都市計画区域は、一定の都市的集積のある中心市街地を含めて指定することになっているが、町村に対してはその市街地の規模が重要となる。都市計画法第5条第1項による政令では、都市計画区域の指定基準は次のように定まっている。

① 当該町村の人口が1万人以上であり、かつ商工業その他の都市的業態に従事

する者の数が全従業者数の50%以上であること。

- ② 当該町村の発展の動向、人口および産業の将来の見通しからみて、概ね10年以内に前号に該当することが認められること。
- ③ 当該町村の中心の市街地を形成している区域の人口が3000人以上であること。
- ④ 温泉やその他の観光資源があることにより多数人が集まるため、特に、良好な都市環境の形成を図る必要があること。
- ⑤ 火災、震災その他の災害により当該町村の市街地を形成している区域内の相当数の建築物が滅失した場合において、当該町村の市街地に健全な復興を図る必要があること。

また、都市計画区域外に発生する開発行為に対しては、都市計画区域の拡大、建築基準法の適用、条例の制定、準都市計画区域の指定などの方法で管理・規制することができる。準都市計画区域は、都市地域に該当しない地域にも都市計画規制を適用する目的で、2000年の都市計画法改正で創設された制度である。準都市計画区域は、無秩序な開発行為が起ころうな地域、あるいは将来課題が発生すると見込まれる地域に点的に指定される。なお、準都市計画区域の指定権者は都道府県となり、該当区域には都市計画税を徴収できない¹¹⁾。

(2) 都市計画に関する法律

都市計画についての基本法は「都市計画法」である。旧法は1919年に制定された。戦後の高度成長期に、人口や産業が激しく都市へ集中し、市街地のスプロールによる都市環境の悪化などの様々な問題が顕在化した。この事態に対応するため、1968年に全面改正された新たな都市計画法が成立した。さらに1992年に大幅改正された後、最近は頻繁に改正されている。都市計画法は、都市計画の内容、策定手順、決定方法、計画実現の手段・組織・財源などについて定めている基本法である。都市施設、市街地開発事業、地域地区などの都市計画の詳細内容については下位の個別法によって定められる。例えば、①都市施設には道路法、下水道法、都市公園法、②市街地開発事業には土地地区画整理法、都市再開発法、③地域地区には建築基準法、文化財保護法、景観法などが挙げられる。また、個々の建築物に対しては、都市計画法のパートナーと呼ばれる建築基準法によって規制する。

都市は広域地方あるいは国土の構成要素でもある。国土開発のあり方については国土形成計画によって定まる。「国土形成計画」は土地、水域、自然、社会資本、産業集積、文化、人材などによって構成される国土の望ましい姿を示す長期的総合計画である。国土形成計画には全国計画と広域地方計画がある。広域地方計画は、東北圏、首都圏、北陸圏、中部圏、近畿圏、中国圏、四国圏、九州圏といった8つのブロックについてそれぞれ策定されている。全国計画と広域地方計画は都市計画の上位計画になり、都市計画は全国計画と広域地方計画を実現するための手法になる。また、国土形成計画の策定根拠となる「国土形成計画法」をはじめとする法律は、都市計画法の上位に位置づけられる。

(3) 都市計画の内容

都市計画法によると、都市計画とは「都市の健全な発展と秩序ある整備を図るための土地利用、都市施設の整備及び市街地開発事業に関する計画」である。ゆえに、土地利用計画、都市施設計画、市街地開発事業計画といった3つの計画は都市計画の3本柱となる。また、より具体的な都市計画の内容について、都市計画法はさらに次の11種類を規定している。

- ① 都市計画区域の整備、開発および保全の方針
- ② 計画的な市街化および整備を図る「市街化区域」と、市街化を抑制する「市街化調整区域」とに区分する
- ③ 都市再開発方針等
- ④ 「地域地区」を定めて土地利用の純化、自然環境の保持を図る
- ⑤ 道路、公共下水道等都市運営に必要な「都市施設」を計画的に整備する
- ⑥ 土地区画整理事業、市街地再開発事業等の新市街地の造成や既成市街地の再開発を目的とする「市街地開発事業」を行う
- ⑦ 新住宅市街地開発事業、流通業務団地等の大規模な面的開発事業を施行する「市街地開発事業等予定区域」を定め、適地内で円滑かつ迅速な事業実施を図る
- ⑧ 「促進区域」を定めて、土地所有者等に一定期間内に一定の土地利用の実現を義務づけ、計画的な市街地整備を図る
- ⑨ 市街化区域内にある一定規模以上の遊休土地に対して市街地としての転換利用を促すため、「遊休土地転換利用促進地区」を定める
- ⑩ 大規模な火災、震災等が発生した場合、2年以内に限って建築等の行為を制限し、土地区画整理事業等を施行するために「被災市街地復興推進地域」を定める
- ⑪ 「地区計画等」を定め、地区レベルで総合的に市街地を整備する

4. 都市計画マスタープラン

都市計画はその目標を達成するには長い期間を要する。多くの計画や事業を中断なく遂行するためには、長期的な目標とそれを実現する方針・政策を確立する必要がある。こうした役割を果たすのがマスタープランである。マスタープランとは中長期的視野から都市のあるべき将来像を明確に示し、その将来像を実現するための諸施策の基本方針となるものである。マスタープランの意義として、個別の都市計画上の諸施策を決定する際に、長期的、総合的観点から適切な判断を下すための枠組みとして機能すること、そして、一般公開することによって都市の将来像を住民や民間企業などの都市計画にかかわる様々な主体に認知・共有させることである¹²⁾。都市の将来のあるべき姿について、住民が共通のビジョンをもつことは、都市計画を円滑かつ効果的に進めていく上で、最も重要なことである。

日本の都市計画のマスタープランには、市町村マスタープラン（市町村の都市計

画に関する基本的な方針」と、都市計画区域マスタープラン（都道府県の都市計画区域の整備、開発および保全の方針）の2種類がある。概ね20年先を目標年次とし、その間の人口・世帯、産業・経済等の動向の見通しに立って計画目標を設定し、土地利用や都市施設の整備の方針などが定められる。マスタープランは、長期にわたって安定した計画であることや、分野別計画や関連計画の指針となることが求められ、総合性や柔軟性がありかつ実現可能な計画である必要がある。また、民間や市民の合意形成や参画を促すための計画でもあるため、わかりやすく創意工夫に富んだものであることも条件となる。

国土利用計画法に基づいて策定される国の「国土利用計画」と都道府県の「土地利用基本計画」は、都市計画に関するマスタープランの上位計画に当たる。また市町村は、地方自治法に基づく「市町村の建設に関する基本構想」、いわゆる総合計画を策定しなければならない。この総合計画は「基本構想」、「基本計画」、「実施計画」の3段階の計画で構成されている。これらも市町村マスタープランの上位計画に当たる。

(1) 都市計画区域マスタープラン

2000年の都市計画法改正により、都道府県は、一市町村の見地を超えた広域的な視点からマスタープランを定めるようになった。概ね20年後の都市の姿を展望し、それぞれの都市計画区域ごとにその都市計画の目標等の基本的方針を示すものである。個別の都市計画や市町村マスタープランは、この都市計画区域マスタープランに即して定めることとなる。都市計画法第6条では、都市計画区域マスタープランの内容について次のように規定している。

- ① 都市計画の目標
- ② 市街化区域・市街化調整区域の区域区分の決定の有無および区域区分を定めるときはその方針
- ③ 土地利用、都市施設の整備および市街地開発事業に関する主要な都市計画の決定の方針

(2) 市町村マスタープラン

1992年の都市計画法改正により、市町村はマスタープランを定めるようになった（都市計画法第18条の2）。市町村マスタープランは、市町村基本構想と都市計画区域マスタープランに即して定める（都市計画法第15条）。また市町村の都市計画は、市町村マスタープランに即したものでなければならない。都市計画区域マスタープランは都市計画決定が必要であるが、市町村マスタープランは都市計画決定を要しない。

市町村マスタープランは、一般的には、「まちづくりの理念や目標、まちの将来像」「分野別方針」「地区別構想」などから構成され、計画図やダイアグラム、イラストなどを利用し、市民にわかりやすく提供するようになっている¹³⁾。市町村マスタープランを策定する際に、公聴会を開いて民意を反映させるような住民参加の

措置を講じなければならない。住民参加には、アンケート実施やインターネットを活用した意見聴取、住民説明会、地域懇談会、ワークショップなどの方法もよく利用されている。

5. 都市計画制限

都市計画の実現手段には「都市計画制限」と「都市計画事業」の2つがある。都市計画制限とは、計画に沿わない行為を公権力により禁止したり制限を加えたりする規制の手段である。制限には2つの方法がある。一つは、土地利用計画の実現のための開発行為、建築行為、建物用途などの制限である。こうした制限は計画変更のない限り撤廃できない。もう一つは、将来の都市計画事業を円滑に行うため、事業を阻害すると思われる建築行為をあらかじめ制限しておくものである。これは事業実施までの一時的な制限である。

(1) 市街化区域と市街化調整区域

都市計画区域の中には、市街地として整備すべき地域と、スプロールを防止して市街地拡大を抑制すべき地域がある。それぞれに適する対応を行うため、市街化区域と市街化調整区域の2つに区分する必要がある。このことを区域区分と呼ぶ。都市計画区域の中で市街化区域と市街化調整区域の間に境界線を設け、区域区分を成立させることを「線引き」ともいう。境界線は、原則として鉄道や河川・海岸・がけなどの地形、地物など土地の範囲を明確に示し得るものを利用する。

市街化区域では、積極的に都市施設を配置し、用途地域の指定を行って土地利用を規制し、市街地の整備を充実する。一方、市街化調整区域では、市街化を抑制し、開発行為を原則として禁止する。市街化調整区域の市街化を抑制すべき期間は概ね10年なので、区域区分は5年ごとに見直されるようになっている。区域区分の権限は市町村でなく都道府県にある。都市計画法では、市街化区域について、「すでに市街地を形成している区域および概ね10年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき区域」と規定している。具体的にどの範囲を指定するかは、都市の人口規模、産業活動の状況、地理的条件などを総合的に考えて判断する。都市計画法省令第8条は次のような判断基準を示している。

- ① 50ha以下の概ね整形の土地で、人口密度が40人/ha以上で連担し、その区域の人口が3000人を越える区域（DID）。
- ② 上記区域に接続し50ha以下の概ね整形の区域において、建築物の敷地などの合計面積（都市的利用面積）が当該区域面積の1/3以上になる地区。

また、概ね10年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき区域としては、住宅計画や工業立地計画などに基づいて土地需要を見通し、必要とされる面積を決めることになるが、次のような土地区域は含まないものとする。

- ① 市街化の動向や都市社会基盤整備の進捗状況からみて市街化させることが不適当な土地

- ② 溢水、湛水、津波、高潮などによる災害の発生のおそれのある土地
- ③ 優良な集団農地その他長期にわたり農用地として保存すべき土地
- ④ 優れた自然風景を維持し、都市の環境を保持し、水源を涵養し、土砂の流出を防備するなどのために保全すべき土地

区域区分は、すべての都市計画区域において実施されるものではない。2000年の都市計画法改正によって三大都市圏内の既成市街地および近郊整備区域と政令指定都市以外は都道府県の自由判断によるとされている。市街化区域では計画的な市街化を図るが、市街化調整区域では開発許可制度を用いて開発行為を抑制する。一定規模以上の開発行為は都道府県知事の許可を受けなければならない。この中で市街化調整区域での開発行為は原則として許可しない。

また、上述のような線引きによる制限のほかに、地域地区制による制限もある。地域地区の種類によって、建物の用途、構造、容積、建ぺい率などに制限が行われる。風致地区などにおいては、建築物だけでなく竹木の伐採や宅地の造成にも制限が行われる。

(2) 都市計画事業制限

都市計画事業のうち、原則として、市町村が都道府県知事の認可を受けて施行するものが都市計画事業である。都市計画事業は公共性の高い事業として、土地収用法を適用して強制的に用地を取得する権限も与えられている。

都市計画事業が認可され、着手されると、その事業区域にはより強い都市計画制限が実施される。これを「都市計画事業制限」という。つまり、都市計画事業の事業計画や施行期間が定まり、事業に着手しようとする段階で、事業の障害となる建築物の建築などの行為を防ぐために、厳しい私権制限を行う。例えば、都市計画事業の施行の障害となるおそれがある「土地の形質の変更」、「建築物の建築その他工作物の建設」、「5t以上の物件の設置」などの行為を行おうとする者は、都道府県知事の許可を受けなければならない。一般的にこれらの行為は不許可となる。ただし、建築物が2階以下で、かつ地階を有せず、木造、鉄骨造であり、容易に移転、除去することが可能である場合は、原則として許可される。

6. 都市計画事業

(1) 都市計画事業の構成

都市計画事業は都市施設整備事業と市街地開発事業の2つからなる。この中の都市施設とは、都市としての諸機能を円滑に運営維持するために必要不可欠な施設のことである。都市基盤施設、都市インフラ、インフラストラクチャーとも呼ばれおり、次の11項目を含んでいる。①交通施設、②公共空地、③供給・処理施設、④水路、⑤教育・研究・文化施設、⑥医療・社会福祉施設、⑦市場・屠畜場・火葬場、⑧一団地の住宅施設、⑨一団地の官公庁、⑩流通業務団地、⑪電気通信施設。

都市施設整備事業は道路や公園などの点と線を整備するのに対し、市街地開発事

業は一定の広がりをもった地区についての面を整備することである。市街地開発事業は、既成市街地を再開発する「再開発型」と、新市街地を開発する「新開発型」の2つに分けられる。前者には土地区画整理事業、市街地再開発事業、住宅街区整備事業があり、後者には新住宅市街地開発事業、工業団地造成事業、新都市基盤整備事業がある。特に、土地区画整理事業は、都市計画事業の根幹をなすものであり、新しい市街地の開発にも用いられる。

都市計画事業は、都道府県知事または国土交通大臣による認可または承認を受ける。認可または承認され、都市計画事業が告示されると次のような効果が生じる。

- ① 都市計画事業制限の適用
- ② 土地所有者の買取り請求権、事業施行者の先買権の発生
- ③ 土地収用権の付与
- ④ 土地提供者の生活激変に伴う生活再建措置の適用
- ⑤ 都市計画税の事業費への充当
- ⑥ 国庫補助金等予算面での優遇措置

(2) 都市計画事業の施行者

都市計画事業は道路や公園などの公共施設を整備する公共性の高い事業であるため、実施には強い権限が与えられる。誰もができるものではない。都市計画法では、都市計画事業の施行者について次のように規定している。

都市計画事業は市町村が都道府県知事の認可を受けて施行する。市町村が施行することが困難または不適当な場合には、都道府県が国土交通大臣の認可を受けて都市計画事業を施行する。例えば、都道府県の都市計画道路事業、流域下水道など大規模な下水道事業。また、国の利害に重大な関係を有する都市計画事業については、国の機関が国土交通大臣承認を受けて施行する。例えば、高速自動車国道、第一種空港、一級河川の整備。

また、民間事業者や地方公社なども、免許などが必要な事業の施行に関して行政機関の免許、許可、認可などの処分を受けている場合や、その他特別な事業がある場合は、都道府県知事の認可を受けて都市計画事業を施行することができる。

7. 都市計画決定の手続き

(1) 住民参加

都市計画事業を推進し、将来ビジョンを実現するためには住民の支持と協力はなくてはならない。このため、都市計画の策定や決定に住民の意見を反映することは重要である。つまり、地域住民の多様な価値観を調和して、まちづくりのビジョンについて合意を形成し、関係するステークホルダーの協調や行政と市民のパートナーシップのもとで、都市計画を策定・決定・実行していかなければならない。都市計画における住民参加は2つの段階に分けられる¹⁴⁾。まずは都市計画の全体像形成への参加である。市民は自らの居住する市町村の将来像について、その原案を大

いに議論し、将来ビジョンを共有する。この段階では、市民は自らの居住地区の狭い利害にこだわることなく、都市全体のあるべき姿を議論する立場と視野がより大切となる。

第2は地区計画への住民参加である。都市計画は、都市全体の将来像を形成し、それを実現するための基盤施設の整備や土地利用の方針を定めることである。この全体の計画に基づいて各地区や居住地域の開発および整備についての方針が、住民合意のもとで整合的に策定されなければならない。しかし、住民の身近な暮らしとの関連が深いため、それぞれの地区で自主的に住民の合意を得ることはより困難である。このため、地区計画策定における住民参加は、素案作成の段階からより全面的に参加することが望まれる。また、地区計画は都市全体の計画との間にずれのないことを確認する必要がある。

また、都道府県や市町村は、都市計画の案を作成しようとする場合、必要に応じて公聴会の開催等により、住民の意見を反映させるために必要な措置を講じなければならないと都市計画法によって定められている。このように、公聴会や説明会等により住民等の意見を反映する住民参加の手続きが制度化されている。さらに、形成されてきた案を2週間にわたって公衆の縦覧に供しなければならない、関係市町村の住民、利害関係者は、この案について意見があるときは、意見書を提出することができることになっている。

情報社会の発達につれて住民参加の手法が変わりつつある。都市計画審議会の設置、公聴会の開催、市町村議会を経由した市民意見の反映などの従来のやり方は、間接的な方式だといわれている。最近では住民の直接参加を通じて原案を作成する住民参加手法が試みられている。例えば、計画に関する意見を直接聞くパブリック・インボルブメント（PI、public involvement）、パブリックコメント、専門的知識を有するコーディネータを囲んだワークショップなど。

(2) 都市計画審議会

都市計画を決定するにあたって都市計画審議会は重要な役割を果たす。従来の都市計画法では、都道府県のみを設置が義務付けられた。しかし、2000年の都市計画法改正により、政令指定都市では設置が義務付けられ、その他の市町村では法定の付属機関として任意に設置することとなった。都道府県および政令指定都市の都市計画決定にあたっては、必ず審議を経なければならない。審議・諮問・建議を担う都市計画審議会の権能は次のように決められている。

① 次の事項について審査審議をする。

- イ 都市計画区域の指定（知事に意見を述べる）
- ロ 二以上の都道府県にわたる都市計画区域の指定（大臣に意見を述べる）
- ハ 準都市計画区域の指定（市町村に意見を述べる、市町村に都市計画審議会が設置されていない場合に限る）
- ニ 都道府県による都市計画の決定（都市計画案を審議する）
- ホ 市町村に都市計画審議会が設置されていない場合の市町村による都市計

画の決定（都市計画案を審議する）

② 知事の諮問に応じて都市計画に関する事項を調査審議する。

③ 都市計画に関する事項を関係行政機関に建議する。

市町村には審議会が設置されない場合は、都道府県審議会がその機能を担う。しかし、大幅な権限委譲を受けた市町村の多くは、都市計画の決定機関として審議会を設置するようになった。都市計画審議会は首長が学識経験者などの中から任命する。住民代表委員の選び方については決まっていないが、公募方式を用いる自治体が多い。また委員数については、都道府県の審議会は11人以上35人以内、市町村の審議会は5人以上35人以内と決まっている。

（3）都市計画提案制度

都市計画提案制度とは、土地所有者、まちづくり団体、NPO、民間事業者などが一定規模以上の区域について、土地所有者の3分の2以上の同意など一定の条件を満たした場合に、都道府県や市町村に都市計画の提案をすることができる制度である。2002年の都市計画法の一部改正により創設された。背景には、まちづくりや都市計画における住民の関心と参加意欲の向上、1998年の特定非営利活動促進法の成立、NPO活動によるまちづくり活動の活性化などがある。

これまでは行政が提案する都市計画に対して住民は意見を述べる受け身の立場であったが、都市計画提案制度を活用することにより、住民自らが都市計画の提案を行うことが可能となり、主体的かつ積極的にまちづくりに関与できるようになった。ただし住民が提案できる都市計画の範囲には決まりがある。例えば東京都では、都市計画区域マスタープラン、都市再開発の方針、住宅市街地の開発整備の方針、防災街区整備方針等を除く都市計画について提案することができる。

（4）都市計画の決定方法

都市においては様々な主体による開発行為が常に行われている。都市計画が決定されると、これらの開発行為は制限を受けるようになる。つまり、都市計画は決定されてはじめて法定都市計画となり、制限は法的拘束力を発揮し、事業は予算措置を講じられる。2000年の法改正により都市計画が自治事務に移行された。これにもなって都市計画の決定権は国から都道府県と市町村に委譲された。

現行の都市計画法によると、都市計画の決定権限は自治体にある。広域的・根幹的な都市計画については都道府県が、身近な都市計画は区市町村が決定するようになっている。すなわち、都市計画について市民の生活に関しては原則として市町村が定める。広域施設の整備、区域区分、周辺市町村との整合、広域的な見地からの判断の必要なもの等については都道府県が定める。

また、都市計画区域が複数の都府県にわたる場合は国土交通大臣が決定する（都市計画法第15条）。例えば、大都市とその周辺都市の都市計画や高速自動車国道・一般国道・都市高速鉄道・第一種空港など国の利害に重大な影響の及ぶ都市計画に関しては、国に協議し、同意を得なければならない（表1を参照）。

表1 都市計画決定の権限と分担

都市計画の内容			市町村決定	都道府県決定		
				都道府県 又は政令市	都道府県 のみ	
都市計画区域の指定					○	
都市計画区域マスタープラン					○	
区域区分(市街化区域・市街化調整区域)				○		
都市再開発方針等				○		
地域 地区	用途地域		○			
	特別用途地域		○			
	高度地区・高度利用地区		○			
	特定街区		○			
	防火地域・準防火地域		○			
	駐車場整備地区		○			
	生産緑地地区		○			
	景観地区		○			
都市 施設	道路	自動車専用道路			○	
		一般国道			○	
		都道府県道			○	
		その他の道路		○		
	公園・緑地	面積10ha 以上	国が設置するもの			○
			県が設置するもの		○	
			その他	○		
	面積10ha未満		○			
	下水道	公共下水道	排水区域が2以上の市町村の区域			○
			その他	○		
		流域下水道				○
	その他		○			
	汚水処理場・ ごみ焼却場	産業廃棄物処理施設			○	
		その他		○		
	河川	一級河川				○
		二級河川			○	
準用河川		○				
図書館、その他の教育文化施設				○		
市街地 開発 事業	土地地区画整 理事業	面積50ha 超	国又は県が施行		○	
			その他	○		
	面積50ha以下		○			
	市街地再開 発事業	面積30ha 超	国又は県が施行			○
			その他	○		
面積30ha以下		○				
地区計画			○			

(出所：磯部友彦ほか『都市計画総論』p36を参考に作成した)

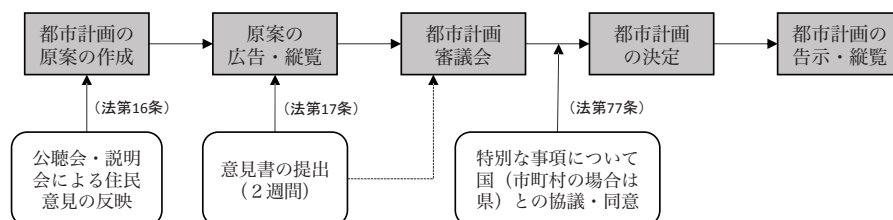


図1 都市計画の決定手続

都市計画の決定は法定手続きに従って行われる。都道府県または市町村は、都市計画の原案を作成する段階において、必要に応じて公聴会や説明会を開催して、住民の意見を反映するための必要な措置を講ずる。また、策定された原案は都市計画審議会に諮られる前に、必ず2週間にわたって住民に縦覧する。住民や利害関係者は、この案について意見があるときは、意見書を提出することができる。都市計画審議会は原案の審議に際して、意見書と当局のそれへの対応方針を併せて審議する（図1を参照）。

都道府県が都市計画を決定する場合は、関係市町村の意見を聴き、都道府県都市計画審議会の審議を経て、さらに国の利害に重大な関係があるものについては国土交通大臣の同意を得て決定する。市町村が都市計画を決定する場合は、原則として知事への協議の後（町村の場合は知事の同意を得た後）、市町村都市計画審議会の審議を経て決定する。市町村の定める都市計画は、都道府県が定めた都市計画に適合しなければならない、内容が対立した場合は都道府県が定めた都市計画を優先する¹⁵⁾。

8. 都市計画の財源と費用負担¹⁶⁾

(1) 都市計画事業の財源

都市計画の目標を達成するためには、都市計画制限によるものと、都市計画事業によるものとがある。その中で都市施設の整備や市街地開発事業などの都市計画事業の施行には多額の費用を要する。鉄道、水道、ガス事業については収益があるため、事業費が莫大であっても後で償還が可能である。一方、道路、公園などの整備事業は収益がなく、公共財源によって負担するしかできない。

表2 2012年度都市計画事業費の内訳

	金額(百万円)	構成比(%)
国庫補助金	1309042	30.3%
地方債(都道府県)	180998	4.2%
地方債(市町村)	1251534	29.0%
都市計画税	443222	10.3%
その他	1128921	26.2%
計	4313717	100.0%

都市計画の公共財源としては、表2が示すように¹⁷⁾、「国庫補助金」（都市計画法第83条）、「地方債」（地方自治法第230条1項）、「都市計画税」（地方税法第702条1項）、「宅地開発税」（地方税法第703条の3）、「事業所税」、「受益者負担金」（都市計画法第75条1項）、「土地基金」（都市計画法第84条1項）などが挙げられる。

地方債は地方公共団体が借金することである。地方公共団体は、議会の議決を経て地方債を起すことができる。地方債を財源とする場合は地方財政法の制限を受ける。都市計画事業に関連する公共施設の建設、土地区画整理事業による宅地造成などについては、財源として地方債を起すことができる。地方債は借金であり、後年返済することになる。都市計画事業は都市の基盤施設の整備であり、整備された施設などはその後都市住民は何世代にもわたって利用することになるため、整備費の借金を後の世代にまわすことに妥当性があるが、財政の健全化を考えると限界がある。

国、都道府県または市町村は、都市計画事業によって利益を受ける者に対してその利益の限度内において、その事業費の一部を負担させることができる（都市計画法第75条）。これを「受益者負担金」という。現在は公共下水道事業のみについてこの制度により負担金の徴収を行っている。その他の事業についても制度的には受益者負担金を徴収できるが、受益の範囲を明確にすることはできないため、現在は徴収されていない。

都市計画事業の施行について、最も重要なポイントは土地の値上がりを抑制して合理的に土地を取得することである。都市計画施設の区域または市街地開発事業の施行区域内の土地の買取り、または土地の先行取得などを行うため、都道府県または指定都市は、土地基金を設けることができる（都市計画法第84条）。土地基金の財源について、国は都道府県または指定都市に対し必要な資金の融通または斡旋その他の援助を行う。

国は、その施策を行うため特別の必要があると認めるときまたは地方公共団体の財政上特別の必要があると認めるときに限り、当該地方公共団体に対して、補助金を交付することができる（地方財政法第16条）。その一つは国庫補助金である。表3に示すように国庫補助金は都市計画事業費全体に占める比率は非常に大きい。言い換えれば、地方分権化が行われたにもかかわらず、国の影響力は依然として大きい。

表3 2012年度主要事業別国庫補助金充当率

	事業費 (百万円)	国庫補助金 (百万円)	補助金 充当率(%)
道路	635987	224631	35.3%
土地区画整理	780031	490342	62.9%
公園	198417	52528	26.5%
下水道	2195737	484638	22.1%
市街地再開発	242335	40556	16.7%
その他	261210	16347	6.3%
計	4313717	1309042	30.3%

(2) 事業の費用負担と推進方式

都市計画事業の費用は基本的に住民が負担しなければならない。それを住民が全員で均しく負担する場合は「公共負担」となる。国や地方公共団体が様々な税を徴収して、それを用いて事業を実施する。しかし、都市計画事業の受益は、必ずしも当該地域の住民全般に均しく拡がるものではないため、一部の住民が重点的に費用を分担することも考えられる。これには受益者負担と利用者負担の2つがある。受益者負担とは、都市計画事業によって受益する地域内の地権者や事業者負担金を賦課するものである。利用者負担とは、借入金などによって都市施設の整備が実施された後、その施設の利用者から利用料金を徴収して借入金を償還するものである。また、民間資金を活用してまちづくりを進めることもできるが、それによって特定の民間事業者が利益をあげることを容認しなければならない。これらの費用負担を生かした都市計画事業の推進方式は次のようになっている。

- ① 公共事業方式は、国や自治体が一般財源あるいは特定財源からの歳入を用いて事業を実施する。整備された施設は公共財となる。国直轄事業、国庫補助事業、地方単独事業がこれに当たる。
- ② 受益者負担方式は、受益地区を特定してその地区内の地権者に負担金を賦課する方式である。下水道の整備事業はこれに当たるが、最大の難点は受益地区を確定することである。
- ③ 政府企業方式は、行政の企業部局が公団・公社、第3セクター会社のような公的な企業体を設立し、国債・地方債・財政投融资資金・民間借入金などの資金で事業を施行し、供用後の利用料金収入で長期にわたって元利を償還する方式である。
- ④ PFI方式は、民間資金と民間企業体の効率性を生かした公共事業の推進方式である。建設会社や当該事業に実績のある会社と出資を担当できる会社を中心とする企業連合体が事業主体となる。

9. 終わりに

都市計画は、行政が中心となって住民が参加するというかたちで定期的に策定されている。都市計画の実施によって様々な施設整備や地区開発事業が行われる。これによって都市環境が変わり、人々の日常生活や企業の経済活動に大きな影響を与えるようになる。こうした都市環境のあり方や都市の将来発展を決める都市計画は、恣意的につくるものではない。その対象・内容・決定・実施などは法によって決まっている。こうした様々な法的決まりを総合したものが都市計画制度になる。この制度は時代の発展とともに、社会に求められた形で変化してきている。本稿では現在の都市計画制度について考察し、その特徴を分析してみた。

都市計画とは「都市の健全な発展と秩序ある整備を図るための土地利用、都市施設の整備及び市街地開発事業に関する計画」である。都市計画は、全行政区域ではなく、指定された都市計画区域に対して土地利用計画、都市施設計画、市街地開発

事業計画などをつくることである。さらに、都市計画区域を市街化区域と市街化調整区域に分け、12種類の用途地域を設定することによって、施設整備を推進したり、開発行為を制限したりする。多くの開発と整備事業を中断なく遂行するためには、長期的な目標とそれを実現する方針・政策を保持する必要がある。こうした役割を果たすのがマスタープランである。また、都市計画実施の財源には国庫補助金、地方債、都市計画税などがある。このような制度に基づいて策定された法定都市計画は行政主導の都市計画になる。しかし、住民の直接参加を充実することによって住民主導の都市計画へとシフトすることは求められている。これは都市計画における今後の課題である。

注

- 1) 「神は田舎を創り、人は都市を創る」というダンテの言葉の英文は次のようになっている。“God made the country, and man made the town”. 詳細については、アーサー・コーン (1968) 『都市形成の歴史』(星野芳久訳) 鹿島出版会、国際交通安全学会 (2011) 『地域公共交通と連携した包括的な生活保障のしくみづくりに関する研究』24頁を参照されたい。
- 2) 大都市に人口を寄せ集めたほうが国の経済は活性化する。このような集積推進論の代表者の一人はハーバード大学のエドワード・フレイザーである。詳細は、エドワード・フレイザー (2012) 『都市は人類最高の発明である』(山形浩生訳) NTT 出版を参照されたい。
- 3) 人口の視点から都市を捉えることについては、倉沢進 (1962) 「都市化の概念と理論的枠組み」『社会学評論』13(3): 49-63 を参照されたい。
- 4) 総合的視点から都市を捉えることについては、日笠端・日端康雄 (2013) 『都市計画』(第3版) 共立出版66頁、日本建築学会編 (1993) 『建築学用語辞典』を参照されたい。
- 5) 都市計画とは都市をつくるための技術と制度だという考え方は、饗庭伸・加藤仁美ほか (2014) 『初めて学ぶ都市計画』市ヶ谷出版社100頁を参照されたい。
- 6) 近代都市計画は産業革命を背景に生まれた歴史については、谷口守 (2014) 『入門都市計画－都市の機能とまちづくりの考え方』森北出版23-31 を参照されたい。
- 7) 「都市化」「郊外化」「逆都市化」「再都市化」という4段階は都市発展の周期性である。詳細については松本康編 (2014) 『都市社会学・入門』有斐閣105-107、加藤晃・竹内伝史 (2013) 『新・都市計画概論』(改訂2版) 共立出版2-5 を参照されたい。
- 8) 創造都市の現状とこれからの展望については、佐々木雅幸 (2012) 『創造都市への挑戦』岩波書店29-45 を参照されたい。
- 9) 加藤晃・竹内伝史、同上、54頁を参照されたい。
- 10) 同上、55頁、また、伊藤雅春・小林郁雄ほか (2013) 『都市計画とまちづくりがわかる本』彰国社60-76 を参照されたい。
- 11) 都市計画税は市街化区域内の土地と家屋の所有者が納める税金である。まちづ

- くりのための都市計画事業（道路、公園、下水道などの整備）などに充てられる。
- 12) マスタープランの意義については、磯部友彦・松山明・服部敦・岡本肇（2014）『都市計画総論』鹿島出版会 31-33 を参照されたい。
 - 13) 同上、107 頁を参照されたい。
 - 14) 住民参加における 2 つの段階については、加藤晃・竹内伝史、同上、69-71 を参照されたい。また、谷下雅義（2014）『都市・地域計画学』コロナ社 155-161 を参照されたい。
 - 15) 都市計画の決定手続および図 1 については、東京都都市整備局（2015）『都市計画の決定手続』（http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/keikaku/seido_1.htm、2015 年 9 月閲覧）を参照されたい。
 - 16) 都市計画の財源、費用負担、推進方式については、加藤晃・竹内伝史、同上、77-83、磯部友彦・松山明・服部敦・岡本肇、同上、38-40、東京都都市整備局、同上を参照されたい。
 - 17) 表 2 と表 3 は、国土交通省が 2015 年に公表した『平成 25 年都市計画現況調査』（<http://www.mlit.go.jp/toshi/tosiko/genkyou.html>、2015 年 4 月 1 日閲覧）に基づいて筆者が作成した。

部門別資金過不足と IS-LM 分析

—試論的考察—

堂 前 豊

1. はじめに

本稿では、部門別資金過不足が財市場と資産市場の同時均衡に及ぼす影響についての試論的考察を行う。そのために、IS-LM 分析で一般的に用いられている枠組みを、資金循環構造がより浮き彫りになるような形へと修正したモデルを構築する。

本稿の主要目的は、債券市場が未発達で、中央銀行貸出しとそれを背景にした銀行貸出しが主たる貨幣供給ルートであったかつての日本のような経済¹⁾を念頭に置くと、民間部門が必要に応じて保有債券を売買できると想定する IS-LM 分析はどのように修正されるかを考察することである。そのうえで、債券市場の存在が財市場と資産市場の同時均衡に及ぼす影響の一端についても明らかにしたい。

本稿の主要結論は次の通りである。

まず第1に、企業と家計が保有できる金融資産が預金に限定されており、企業による銀行からの追加的な借入れが困難な場合、企業の資金不足は企業預金を減少させ、家計の資金余剰は家計預金を増加させる。そのため、継続的に同規模の取引を行うためには企業は不足する預金（決済手段）を調達する必要がある。これは借入れ需要を増大させるので、実質 GDP が不変であれば貸出金利は上昇する、すなわち LM 曲線を上方にシフトさせる²⁾。その結果、投資は減少し、実質 GDP も減少することとなる。ただし、中央銀行貸出しの増加などによる中央銀行当座預金の増大によって、銀行が企業への貸出しを増加させることができれば、貸出金利の上昇を抑制して、投資の減少を防ぐことも可能となる。

第2に、家計が保有できる金融資産が預金と国債³⁾の場合、家計の資金余剰は家計の預金と国債を増加させる。これは、家計が、リスクとリターンの組み合わせを最適化しようとして、増加した預金の一部を引き出して国債を購入しようとするからである。一方、企業の資金不足は企業の預金を減少させる。企業が継続的に同規模の取引を行うためには、銀行借入れを増加させる必要がある。銀行が超過準備を保有せず、中央銀行貸出しの増加などによる準備預金の増大がない場合でも、銀行は家計に売却した国債と引き換えに回収した預金を企業に貸し出すことができる。しかし、企業の借入れ需要の増加は、家計の国債需要の増加にともなう銀行貸出しの増加を上回るため、実質 GDP が不変であれば貸出金利は上昇する。すなわ

ち LM 曲線は上方にシフトする。その結果、投資は減少し、実質 GDP も減少することとなる。なお、家計が、増加した預金の全てを引き出して国債を購入しようとする場合には、企業の借入れ需要の増加と銀行貸出の増加が一致するので、実質 GDP が不変であれば貸出金利も不変となる。すなわち LM 曲線はその位置を変えず、その結果、実質 GDP も不変にとどまることとなる。企業部門と家計部門を統合した一般の IS-LM モデルが成り立つためには、家計の資金余剰に相当する預金が全て国債（債券）購入に振り向けられると想定する必要がある。

財市場・貨幣市場・債券市場の3つの市場に焦点を充てて構築される IS-LM 分析の見方を修正・発展させようという試みは、かねてより、さまざまな形で行われてきた。例えば、鈴木（1974）や堀内（1980）は、日本の金融構造をより意識した形で一般均衡モデルを構築し、詳細な分析を行っている。また、Bernanke and Blinder（1988）は、貸出市場と債券市場の不完全代替性を考慮に入れて、IS-LM 分析の修正を行っている。さらに、Romer（2000）は、IS-LM モデルに中央銀行の政策ルールを組み込んだ IS-MP モデルを提示している。しかし、本稿のように、民間部門を一括りにせず、企業部門と家計部門の資金過不足をつなぐ金融のあり方が浮き彫りになるような形で IS-LM モデルを構築しようとした研究は、まれであったと思われる。その意味で、本稿は、IS-LM 分析について、新たな視点を提供するものとなっているはずである。

以下では、まず、第2節で基本モデルを提示する。第3節では、国債市場の存在を考慮に入れて、モデルの拡張を行う。

2. 基本モデル

2.1 基本的諸假定

基本モデルを構成する主体として、中央銀行、銀行、企業⁴⁾と家計を考える。そのうえで、以下の假定を採用する。

部門別資金過不足

- ① 過去から現在に至るまで、中央銀行と銀行は貯蓄も投資も行わず（資金過不足はゼロ）、企業は投資超過（資金不足）主体、家計は住宅投資を行わず貯蓄超過（資金余剰）主体である。

假定①は、企業の投資超過（資金不足）と家計の貯蓄超過（資金余剰）が一致していることを意味している。また、企業の実物資産（ K_f ）は、企業の純資産（ W_f ）と家計の純資産（ W_h ）の合計に一致することを含意している。なお、家計が住宅投資を行わないとしているのは議論の単純化のためである⁵⁾。

資金循環構造

- ② 企業と家計が保有できる金融資産は預金のみで⁶⁾、各部門のバランス・シートは表1のように表される⁷⁾。

表1 各部門のバランス・シート

	中央銀行		銀行		企業		家計		
	資産	負債	資産	負債	資産	負債	資産	負債	
中央銀行貸出	L_C^S			\bar{B}					\bar{i}_{CBL}
中央銀行当座預金		R^S	\bar{R}						0
コールローン			CL	CM					i_C
貸出			L^S			L_f^d			i_L
預金				D^S	D_f^d		D_h^d		\bar{i}_D
実物資産／純資産					K_f	W_f		W_h	y

中央銀行貸出

- ③ 中央銀行は、銀行にコールレート (i_C) よりも低い中央銀行貸出金利 (\bar{i}_{CBL}) で、一定限度まで貸出し (L_C^S) を行い、銀行に当座預金 (R^S) を供給する。中央銀行は、現金を供給しない。

仮定③は、銀行の中央銀行借入れ (B) が、中央銀行が決めた限度額 (\bar{B}) に一致することを含意している。これは、銀行の中央銀行当座預金が一定の水準 ($\bar{R} = \bar{B}$) に政策的にコントロールされることをも意味している。なお、中央銀行が現金を供給しないとしているのは、議論の単純化のためである。本稿のモデルでは、中央銀行当座預金がハイパワードマネー、預金がマネーサプライとなる。

中央銀行当座預金 (準備預金)

- ④ 中央銀行は、当座預金の金利を 0、所要準備率を β ($0 < \beta < 1$) とする。
 ⑤ 銀行は、所要準備額に等しい中央銀行当座預金 (R) を保有し、超過準備は保有しない。

コールローン

- ⑥ 銀行は、中央銀行当座預金の貸出し (コールローン: CL) や借入れ (コールマネー: CM) を、コールレート (i_C) で行う。
 ⑦ コール市場は競争的である。

貸出

- ⑧ 銀行は、貸出し (L^S) を、貸出金利 (i_L) で行い、預金 (D^S) を供給する。
 ⑨ 銀行は、 n 行存在し、同質的である。また、銀行のリスクに対する態度は中立的である。

- ⑩ 銀行は、貸出しによって供給する預金と同規模の預金を自行が受け入れることになると思料して、貸出しを行う。
- ⑪ 銀行の業務費用 (C) と限界業務費用 (1 単位の追加業務がもたらす追加業務費用: C') は、貸出しの増加に伴って増大する。
- ⑫ 貸出市場における借り手は企業のみで、家計は借入れを行わない。
- ⑬ 企業の借り入れ需要 (L_f^d) は、取引動機にもとづく企業の預金需要 (D_f^d) に起因する。
- ⑭ 貸出市場は競争的である。

預金

- ⑮ 企業の預金需要 (D_f^d) は、取引動機にもとづくもので、預金金利 (i_D) の増加関数、貸出金利の減少関数、実質 GDP (y) の増加関数である。
- ⑯ 家計の預金需要 (D_h^d) は、家計貯蓄 (S_h) の蓄積によって形成された家計純資産 ($W_h \equiv \int S_h dt$) に等しい。

仮定⑯は、家計が住宅投資を行わず実物資産を保有しないこと (\because 仮定①)、家計が預金以外の金融資産を保有できないこと (\because 仮定②)、および、借り入れを行わないこと (\because 仮定⑫) から導かれるものである。

- ⑰ 預金市場では、預金金利が規制され、 $i_D = \bar{i}_D$ が成立する。銀行は、預金獲得のための非価格競争を行わず、預金者からの預金を受動的に受け入れる⁸⁾。

実物資産

- ⑱ 企業貯蓄 (S_f) と家計貯蓄はともに実質 GDP の増加関数、企業投資 (I_f) は貸出金利の減少関数である。
- ⑲ 財市場では、企業貯蓄と家計貯蓄の合計が企業投資と均衡するように、実質 GDP (y) が調整される。物価は一定である。

2.2 基本モデルの定式化

企業の借入行動 企業の資金不足は、企業預金を減少させる。預金金利、貸出金利、実質 GDP が不変であれば、企業の預金需要は不変であるから (\because 仮定⑮)、企業の借り入れ需要は資金不足分だけ増大する。したがって、企業の借り入れ需要関数は次のように表現される。

$$L_f^d = D_f^d(\bar{i}_D, i_L, y) + \int (I_f(i_L) - S_f(y)) dt$$

右辺の第2項は、資金不足が継続していけば、時間の経過とともに、企業の借り入れ需要が増大していくことを示している。ただし、本稿の分析は静学モデルによるものであり、積分表記は単に過去からの累積を示すものとして用いていることには留意が必要である。

銀行の最適化行動 銀行 $k(k=1,2,\dots,n)$ は、中央銀行が決めた限度額 (\bar{B}_k) まで借り入れを行い、中央銀行貸出金利、中央銀行当座預金金利、コールレート、貸出金利、預金金利、所要準備率を所与として利潤最大化行動を行う。銀行 k の期待利潤 (π_k^E) と制約条件は次のように表される。

$$\pi_k^E = (0 \cdot R_k + i_C \cdot CL_k + i_L \cdot L_k^s) - (\bar{i}_{CBL} \cdot \bar{B}_k + i_C \cdot CM_k + \bar{i}_D \cdot D_k^E) - C$$

$$R_k + CL_k + L_k^s \equiv \bar{B}_k + CM_k + D_k^E \quad \dots \text{バランス・シート制約}$$

$$R_k = \beta \cdot D_k^E \quad \dots \text{所要準備の制約}$$

$$D_k^E = L_k^s \quad \dots \text{期待預金量の制約}$$

バランス・シート制約は、他の制約を考慮すると、 $CL_k - CM_k \equiv \bar{B}_k - \beta \cdot L_k^s$ と表現できる。この点に留意して、制約条件を組み込む形で期待利潤を表わすと次のようになる。

$$\begin{aligned} \pi_k^E &= (0 \cdot R_k + i_C \cdot CL_k + i_L \cdot L_k^s) - (\bar{i}_{CBL} \cdot \bar{B}_k + i_C \cdot CM_k + \bar{i}_D \cdot D_k^E) - C \\ &= i_L \cdot L_k^s + i_C \cdot (CL_k - CM_k) - \bar{i}_{CBL} \cdot \bar{B}_k - \bar{i}_D \cdot D_k^E - C \\ &= i_L \cdot L_k^s + i_C \cdot (\bar{B}_k - \beta \cdot L_k^s) - \bar{i}_{CBL} \cdot \bar{B}_k - \bar{i}_D \cdot L_k^s - C \\ &= (i_L - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D) \cdot L_k^s + (i_C - \bar{i}_{CBL}) \cdot \bar{B}_k - C \end{aligned}$$

以上から、銀行の最適化行動と一階条件は、

$$\max_{\{L_k^s\}} (i_L - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D) \cdot L_k^s + (i_C - \bar{i}_{CBL}) \cdot \bar{B}_k - C(L_k^s)$$

$$i_L - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D = C'(L_k^s)$$

となる。

一階条件は、貸出金利と銀行 k にとって最適な貸出量の関係を示すものであるから、貸出の個別供給関数と読むことができる。

一般均衡 銀行は同質的なので、銀行 k と他のすべての銀行は同じ選択をされると考えられる。銀行数 n のもとで、銀行の中央銀行借入量は $\bar{B} (\equiv n \cdot \bar{B}_k)$ 、中央銀行当座預金量は

$\bar{R}(\equiv n \cdot \bar{R}_k)$ 、コールローンの超過供給量は、 $CL - CM \equiv \bar{B} - \beta \cdot L^s (\equiv n \cdot (\bar{B}_k - \beta \cdot L_k^s))$ 、貸出量は $L^s (\equiv n \cdot L_k^s)$ 、預金量は $\frac{\bar{R}}{\beta} = D^s (\equiv n \cdot D_k^s)$ となる。一般均衡では、次の条件式が同時に成立する。

$$\text{中央銀行貸出市場} \quad L_C^s \equiv R^s = \bar{B}$$

$$\text{中央銀行当座預金市場} \quad R^s = \bar{R}$$

$$\text{コール市場} \quad CL - CM \equiv \bar{B} - \beta \cdot L^s = 0$$

$$\text{貸出市場} \quad L^s = D_f^d(\bar{i}_D, i_L, y) + \int (I_f(i_L) - S_f(y)) dt$$

$$i_L = \beta \cdot i_C + \bar{i}_D + C' \left(\frac{L^s}{n} \right)$$

$$\text{預金市場 (貨幣市場)} \quad \frac{\bar{R}}{\beta} = D_f^d(\bar{i}_D, i_L, y) + \int S_h(y) dt$$

$$\text{財市場} \quad S_f(y) + S_h(y) = I_f(i_L)$$

$$(\text{実物資産} \quad \int (S_f(y) + S_h(y)) dt = \int I_f(i_L) dt \quad)$$

これら条件式を、財市場と預金市場（貨幣市場）に焦点を充てる形で整理したものが (2-1)、(2-2)、(2-3) 式である⁹⁾。IS-LM モデルがこのように表現されることの含意については次項で簡潔に論じておきたい。

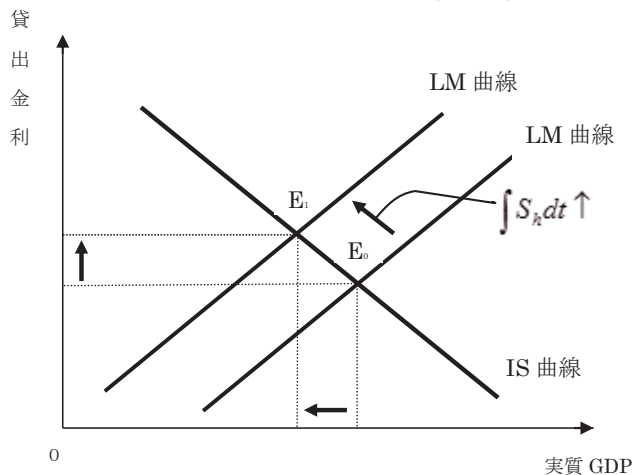
$$(2-1) \quad S_f(y) + S_h(y) = I_f(i_L) \quad \cdots \text{IS 曲線}$$

$$(2-2) \quad \frac{\bar{R}}{\beta} = D_f^d(\bar{i}_D, i_L, y) + \int S_h(y) dt \quad \cdots \text{LM 曲線}$$

$$(2-3) \quad i_C = \frac{1}{\beta} \cdot \left(i_L - \bar{i}_D - C' \left(\frac{\bar{R}}{n \cdot \beta} \right) \right) \quad \cdots \text{コールレート決定式}$$

2.3 IS-LM 曲線と部門別資金過不足

図1 部門別資金過不足による均衡の変化



家計と企業が保有できる金融資産が預金に限定されており、企業による銀行からの追加的な借入れが困難な場合、家計の資金余剰（貯蓄超過）は家計の預金を増加させ、企業の資金不足（投資超過）は企業の預金を減少させる。そのため、継続的に同規模の取引を行うためには企業は預金（決済手段）の減少分を補填する必要がある。これは企業の借入れ需要を増大させるので、実質 GDP の水準が不変であれば貸出金利は上昇する、すなわち LM 曲線を上方にシフトさせる。その結果、投資は減少し、実質 GDP も減少することとなる。図1は、以上のような状況を示すものである。このような状況が生じるのは、金融市場において資金余剰と資金不足をつなぐ機能が十分に働かないからである。

ただし、中央銀行貸出しの増加などによる中央銀行当座預金の増大によって、銀行が企業への貸出しを増加させることができれば、貸出金利の上昇を抑制して、投資の減少を防ぐことは可能である。(2—2) 式は、家計の資金余剰（貯蓄超過¹⁰⁾）と預金供給（貨幣供給）の増加が等しくなるときの、貸出金利は不変にとどまり、LM 曲線もその位置を変えないことを示している。銀行貸出しによる預金創造機能を最大限に活用できるように中央銀行当座預金を増大させることが、部門別資金過不足の存在によって引き起こされる経済の萎縮を回避する有力な手段になるといえる。この場合、企業の借入れ、家計預金なども増加する。これは、間接金融優位といわれてきた戦後日本における金融の基本構造を示唆しているとも解釈できそうである。なお、均衡点 E_0 において各部門のバランス・シートが全面的に変化することは、一般的な IS-LM モデルとは異なる、本稿のモデルの特徴といえるであろう¹¹⁾。

3. 拡張モデル

3.1 基本的諸仮定

債券市場の役割の一端を考察するために、政府を構成主体に加えて基本モデルを拡張したい。そのために、基本モデルにおける諸仮定を以下のように修正する。

部門別資金過不足

- ①' 政府は、過去において投資超過（資金不足）主体であったが、現在の財政収支は均衡している（資金過不足はゼロ）。過去から現在に至るまで、中央銀行と銀行は貯蓄も投資も行わず（資金過不足はゼロ）、企業は投資超過（資金不足）主体、家計は住宅投資を行わず貯蓄超過（資金余剰）主体である。

仮定①'は、政府が、国債の発行 (B_g^s) によって純資産 (W_g) を上回る実物資産 (K_g) を形成してきており、政府と企業の実物資産が、政府、企業と家計の純資産によって形成されてきたことを示している。また、現在では、企業の投資超過（資金不足）と家計の貯蓄超過（資金余剰）が一致していることも意味している。なお、現在において財政収支が均衡しているとするのは、議論の単純化のためである。

資金循環構造

- ②' 企業と家計が保有できる金融資産は預金と国債であるが、企業は国債を保有していない。中央銀行も国債を保有せず、国債を保有しているのは銀行と家計のみである。各部門のバランス・シートは表2のように表される。

表2 拡張モデルにおける各部門のバランス・シート

	政府		中央銀行		銀行		企業		家計		
	資産	負債	資産	負債	資産	負債	資産	負債	資産	負債	
中央銀行貸出			L_C^S			\bar{B}					\bar{i}_{CBL}
中央銀行当座預金				R^S	\bar{R}						0
コールローン					CL	CM					i_C
貸出					L^S			L_f^d			i_L
国債		B_g^s			B_b^d				B_h^d		i_B
預金						D^S	D_f^d		D_h^d		\bar{i}_D
実物資産／純資産	K_g	W_g					K_f	W_f		W_h	y

仮定②' は、債券市場の存在がいかなる役割を担いうるかについて考察するために、必要最小限の要素を追加したものである。

貸出と国債

- ⑧' 銀行は、貸出しや国債保有によって預金を供給する。
 ⑩' 銀行は、貸出しや国債保有によって供給する預金と同規模の預金を自行が受け入れることになると予想して、貸出しや国債保有を行う。
 ⑪' 銀行の業務費用 (C) と限界業務費用 (1単位の追加業務がもたらす追加業務費用: C') は、銀行の貸出量と国債保有量 (B_b^d) の合計によって決まり、それらが増加すると増大する。
 仮定⑪' は、銀行にとって貸出しと国債は完全代替的であることを含意している。
 ⑭' 貸出市場と国債市場は競争的である。

預金

- ⑮' 家計の預金需要 (D_h^d) は、取引需要 (D_h^{Td}) と資産需要から構成され、次のように表される。

$$D_h^d = D_h^{Td}(\bar{i}_D, i_B, y) + \theta(\bar{i}_D, i_B) \cdot \left(\int S_h(y, T) dt - D_h^{Td}(\bar{i}_D, i_B, y) \right)$$

θ は、家計貯蓄の蓄積によって形成された家計純資産から預金の取引需要を控除した運用可能な純資産をどれだけ預金に振り向けるかを示すパラメーターである。 θ は0以上1以下の値を取る。また、 θ は預金金利の増加関数、国債金利 (i_B) の減少関数である。

仮定⑮' は、 $\theta = 1$ のとき、家計は国債を保有せず預金需要関数が基本モデルと同じになること、また、 θ が1よりも小さくなるほど多くの国債を保有しようとすることを示している。

実物資産

- ⑰' 企業貯蓄と家計貯蓄はともに実質 GDP の増加関数、租税 (T) の減少関数、企業投資は貸出金利の減少関数である。

3.2 モデルの定式化

家計の国債保有行動 家計の純資産は預金と国債保有という形をとる。したがって、家計の国債需要 (B_h^d) は、家計の純資産から預金需要を控除したものとなる。

$$\begin{aligned} B_h^d &= \int S_h(y, T) dt - D_h^{Td}(\bar{i}_D, i_B, y) - \theta(\bar{i}_D, i_B) \cdot \left(\int S_h(y, T) dt - D_h^{Td}(\bar{i}_D, i_B, y) \right) \\ &= (1 - \theta(\bar{i}_D, i_B)) \cdot \left\{ \int S_h(y, T) dt - D_h^{Td}(\bar{i}_D, i_B, y) \right\} \end{aligned}$$

銀行の最適化行動 銀行 k ($k=1,2,\dots,n$) は、中央銀行が決めた限度額 (\bar{B}_k) ま
で借り入れを行い、中央銀行貸出金利、中央銀行当座預金金利、コールレート、貸
出金利、国債金利、預金金利、所要準備率を所与として利潤最大化行動を行う。銀
行 k の期待利潤 (π_k^E) と制約条件は次のように表される。

$$\pi_k^E = (0 \cdot R_k + i_C \cdot CL_k + i_L \cdot L_k^s + i_b \cdot B_{bk}^d) - (\bar{i}_{CBL} \cdot \bar{B}_k + i_C \cdot CM_k + \bar{i}_D \cdot D_k^E) - C$$

$$R_k + CL_k + L_k^s + B_{bk}^d \equiv \bar{B}_k + CM_k + D_k^E \quad \dots \text{バランス・シート制約}$$

$$R_k = \beta \cdot D_k^E \quad \dots \text{所要準備の制約}$$

$$D_k^E = L_k^s + B_{bk}^d \quad \dots \text{期待預金量の制約}$$

バランス・シート制約は、他の制約を考慮すると、 $CL_k - CM_k \equiv \bar{B}_k - \beta \cdot (L_k^s + B_{bk}^d)$ と
表現できる。この点に留意して、制約条件を組み込む形で期待利潤を表わすと次の
ようになる。

$$\begin{aligned} \pi_k^E &= (0 \cdot R_k + i_C \cdot CL_k + i_L \cdot L_k^s + i_b \cdot B_{bk}^d) - (\bar{i}_{CBL} \cdot \bar{B}_k + i_C \cdot CM_k + \bar{i}_D \cdot D_k^E) - C \\ &= i_L \cdot L_k^s + i_b \cdot B_{bk}^d + i_C \cdot (CL_k - CM_k) - \bar{i}_{CBL} \cdot \bar{B}_k - \bar{i}_D \cdot D_k^E - C \\ &= i_L \cdot L_k^s + i_b \cdot B_{bk}^d + i_C \cdot (\bar{B}_k - \beta \cdot (L_k^s + B_{bk}^d)) - \bar{i}_{CBL} \cdot \bar{B}_k - \bar{i}_D \cdot (L_k^s + B_{bk}^d) - C \\ &= (i_L - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D) \cdot L_k^s + (i_b - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D) \cdot B_{bk}^d + (i_C - \bar{i}_{CBL}) \cdot \bar{B}_k - C \end{aligned}$$

以上から、銀行の最適化行動と一階条件は、

$$\max_{\{L_k^s, B_{bk}^d\}} (i_L - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D) \cdot L_k^s + (i_b - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D) \cdot B_{bk}^d + (i_C - \bar{i}_{CBL}) \cdot \bar{B}_k - C(L_k^s + B_{bk}^d)$$

$$i_L - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D = C'(L_k^s + B_{bk}^d) = i_b - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D$$

となる。なお、一階条件は、貸出の個別供給関数と国債の個別需要関数として読む
ことができる。また、これら条件は、市場均衡において貸出金利と国債金利が等し
くなること ($i_L = i_b$) を含意している^{1 2)}。

一般均衡 銀行は同質的なので、銀行 k と他のすべての銀行は同じ選択をする
と考えられる。銀行数 n のもとで、銀行の中央銀行借入量は $\bar{B} (\equiv n \cdot \bar{B}_k)$ 、中央銀行当
座預金量は $\bar{R} (\equiv n \cdot \bar{R}_k)$ 、コールローンの超過供給量は $CL - CM \equiv \bar{B} - \beta \cdot (L^s + B_b^d)$ 、
貸出量は $L^s (\equiv n \cdot L_k^s)$ 、国債保有量は $B_b^d (\equiv n \cdot B_{bk}^d)$ 、預金量は $\frac{\bar{R}}{\beta} = D^s (\equiv n \cdot D_k^s)$ となる。

一般均衡では、次の条件式が同時に成立する。

$$\text{中央銀行貸出市場} \quad L_C^s \equiv R^s = \bar{B}$$

$$\text{中央銀行当座預金市場} \quad R^s = \bar{R}$$

$$\text{コール市場} \quad CL - CM \equiv \bar{B} - \beta \cdot (L^s + B_b^d) = 0$$

$$\text{貸出市場} \quad L^s = D_f^d(\bar{i}_D, i_L, y) + \int (I_f(i_L) - S_f(y)) dt$$

$$\text{国債市場} \quad B_b^d = B_g^s - (1 - \theta(\bar{i}_D, i_B)) \cdot \left\{ \int S_h(y, T) dt - D_h^{Td}(\bar{i}_D, i_B, y) \right\}$$

$$i_L - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D = C' \left(\frac{L^s + B_b^d}{n} \right) = i_B - \beta \cdot i_C - \bar{i}_D$$

$$\begin{aligned} \text{預金市場} \quad \frac{\bar{R}}{\beta} &= D_f^d(\bar{i}_D, i_L, y) + D_h^{Td}(\bar{i}_D, i_B, y) \\ &\quad + \theta(\bar{i}_D, i_B) \cdot \left(\int S_h(y, T) dt - D_h^{Td}(\bar{i}_D, i_B, y) \right) \end{aligned}$$

$$\text{財市場} \quad S_f(y, T) + S_h(y, T) = I_f(i_L)$$

$$\text{(実物資産)} \quad \int (S_f(y) + S_h(y)) dt + W_g = \int I_f(i_L) dt + K_g$$

これらを財市場と預金（貨幣）市場に焦点を充てる形で整理したものが³ (3—1)、(3—2)、(3—3)、(3—4) 式である¹³⁾。拡張モデルがこのように表現されることの含意については次項で簡潔に論じておきたい。

$$(3-1) \quad S_f(y, T) + S_h(y, T) = I_f(i_L) \quad \cdots \text{IS 曲線}$$

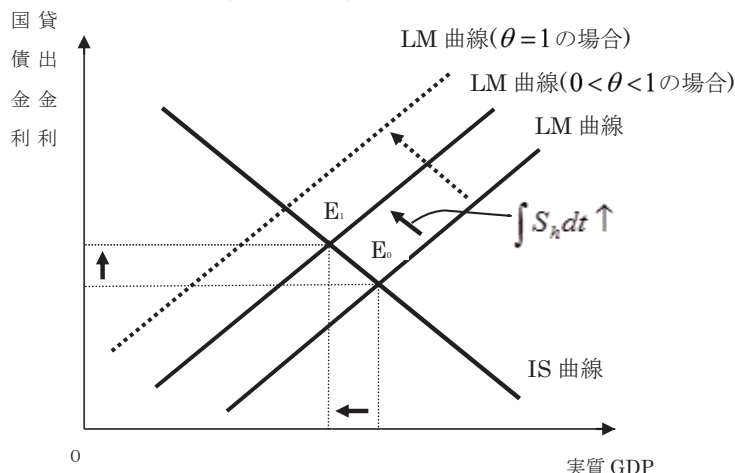
$$\begin{aligned} (3-2) \quad \frac{\bar{R}}{\beta} &= D_f^d(\bar{i}_D, i_L, y) + D_h^{Td}(\bar{i}_D, i_L, y) \\ &\quad + \theta(\bar{i}_D, i_L) \cdot \left(\int S_h(y, T) dt - D_h^{Td}(\bar{i}_D, i_L, y) \right) \quad \cdots \text{LM 曲線} \end{aligned}$$

$$(3-3) \quad i_B = i_L \quad \cdots \text{国債金利決定式}$$

$$(3-4) \quad i_C = \frac{1}{\beta} \cdot \left(i_L - \bar{i}_D - C' \left(\frac{\bar{R}}{n \cdot \beta} \right) \right) \quad \cdots \text{コールレート決定式}$$

3.3 IS-LM 曲線と部門別資金過不足

図2 部門別資金過不足による均衡の変化
～国債市場が存在する場合～



家計が保有できる金融資産が預金と国債の場合、家計の資金余剰は家計の預金と国債を増加させる。これは、家計が、リスクとリターンを組み合わせを最適化しようとして、増加した預金の一部を引き出して国債を購入しようとするからである。一方、企業の資金不足は企業の預金を減少させる。企業が継続的に同規模の取引を行うためには、銀行からの借入れを増加させる必要がある。銀行が超過準備を保有せず、中央銀行貸出しの増加などによる準備預金の増大がない場合でも、銀行は家計に売却した国債と引き換えに回収した預金を企業に貸し出すことができる。しかし、貸出金利が不変のままでは、企業の借入れ需要の増加が家計の国債購入によって可能となる銀行貸出の増加を上回るので、実質 GDP が不変であれば貸出金利は上昇する。すなわち LM 曲線は上方にシフトする。その結果、投資は減少し、実質 GDP も減少することとなる。図2は、以上のような状況を示すものである。図2から、 θ の値が大きい、すなわち、家計が運用可能純資産の多くの割合を預金に振り向けようとするれば LM 曲線のシフト幅は大きくなり、均衡の変化も大きくなること。 θ の値が小さい、すなわち、家計が運用可能純資産の多くの割合を国債に振り向けようとするれば LM 曲線のシフト幅は小さくなり、均衡の変化も小さくなることを確認できる。

なお、 θ の値がゼロ、すなわち、家計が増加した預金の全てを引き出して国債を購入しようとする場合には、企業の借入れ需要の増加と家計の国債保有の増加、および、銀行貸出の増加が一致するので、実質 GDP が不変であれば貸出金利も不変となる。すなわち LM 曲線はその位置を変えず、その結果、実質 GDP も不変にとどまることとなる。これは、本稿のモデルにおいて、企業部門と家計部門を統合した一般の IS-LM モデルと同様の結論が成り立つためには、家計の資金余剰に相当する預金が全て国債購入に振り向けられると想定する必要があることを示している。

4. おわりに

本稿では、IS-LM 分析で一般的に用いられている枠組みを、資金循環構造がより浮き彫りになるような形へと修正したモデルを構築して、部門別資金過不足が財市場と資産市場の同時均衡に及ぼす影響について考察を行った。債券市場が未発達で、中央銀行貸出しとそれを背景にした銀行貸出しが主たる貨幣供給ルートであったかつての日本のような経済を念頭に置いたとき、一般の IS-LM モデルをいかに修正すべきかについて一つの見方を示すことができたと思われる。

財市場・貨幣市場・債券市場の3つの市場に焦点を充てて構築される IS-LM 分析の見方を修正・発展させようという試みは、かねてより、さまざまな形で行われてきた。しかし、本稿のように、IS-LM モデルを、民間部門を一括りに扱わず、企業部門と家計部門の資金過不足と、それらをつなぐ金融のあり方を考慮に入れて修正しようとした研究は、まれであったと思われる。その意味で、本稿は、IS-LM 分析について、新たな視点を提供するものとなっているはずである。なお、本稿のモデルでは、政府の扱いを非常に限定したものにとどめている。また、貸出と国債が、それらを保有する銀行にとって完全代替的となるような仮定を採用している。政府を含めた資金循環構造の考察や貸出と国債の不完全代替性を考慮に入れたモデルの構築については、今後の課題としたい。

謝辞

この場をお借りして、今春退職された尾熊治郎教授に、心より感謝の意を表させていただきます。

注

- 1) 本稿では、特に、債券市場が未発達で、企業が資金不足主体、家計が資金余剰主体であるような経済を想定している。
- 2) 本稿では債券市場が存在しない場合も考察することから、貨幣市場を均衡させる実質 GDP と貸出金利の組み合わせを LM 曲線と呼んでいる。なお、本稿のモデルでは、貸出と債券を、保有可能な主体に差はあるものの、保有主体にとっては完全代替的となるような仮定を採用している。したがって、債券市場が存在する場合、貸出金利と債券金利は等しくなる。
- 3) 本稿では、債券として国債のみを想定し、社債など他の債券の存在については捨象して考えている。
- 4) 本稿では、非銀行企業のことを単に企業と呼んでいる。
- 5) 家計部門内に住宅投資を行わない資金余剰主体と住宅投資を行う資金不足主体が混在すると想定した場合、議論はやや複雑となる。
- 6) 本稿では、企業間信用や非銀行金融機関が行う貸出しなどは想定していない。

- 7) 実物資産と純資産を一つの行に並べているのは、実物資産が投資、純資産が貯蓄の蓄積によって形成されることに注目してのことである。実物資産の純増（投資）と純資産の純増（貯蓄）が均衡するように実質 GDP が決まることに留意したい。また、右端には、各市場における金利（最下段には実質 GDP）を示しておいた。
- 8) 仮定⑰では、店舗規制などの存在を暗黙裡に前提している。
- 9) なお、コール市場が均衡するとき $L^s = \frac{\bar{B}}{\beta}$ が成立する。このとき、貸出市場の均衡式は預金市場の均衡式に一致する。これは、 $\bar{B} = \bar{R}$ と $\int (I_f(i_L) - S_f(y)) dt = \int S_h(y) dt$ から容易に確認できる。
- 10) 本稿のモデルでは、家計は住宅投資を行わないとしているので、家計の貯蓄超過は家計貯蓄と一致する。また、中央銀行と銀行は貯蓄も投資も行わないとしているので、家計貯蓄は企業の投資超過に一致している。
- 11) 実物資産については、本稿のモデルでも一般的な IS-LM モデルでも、投資によって増大すると解釈されることは共通している。
- 12) $i_L > i_B$ の場合、銀行 k は、国債保有を削減して貸出を増大することで、限界業務費用を不変に保ったまま、収入を増やすことができる。各銀行が同様に行動すれば、貸出金利は低下し、国債金利は上昇することとなる。このような動きは、 $i_L = i_B$ が成立するまで続くはずである。 $i_L < i_B$ の場合も同様に考えることができる。
- 13) コール市場が均衡するとき $\frac{\bar{B}}{\beta} = L^s + B_b^d$ となる。さらに、 $\bar{B} = \bar{R}$ と $B_g^s \equiv K_g - W_g$ であることから、貸出市場の均衡式と国債市場の均衡式を加算すると預金市場の均衡式を導くことができる。

参考文献

- Bernanke, Ben S. and Alan S. Blinder (1988), "Credit, Money, and Aggregate Demand," *The American Economic Review*, Vol. 78, No. 2, Papers and Proceedings of the One-Hundredth Annual Meeting of the American Economic Association, pp.435-439
- 堂前豊 (2000) 「日本の銀行業における競争制限的規制 —その役割と変遷—」『金融経済研究』第16号：17-29頁
- 福田慎一 (2013) 『金融論—市場と経済政策の有効性』有斐閣
- 堀内昭義 (1980) 『日本の金融政策』東洋経済新報社
- (1990) 『金融論』東京大学出版会
- 岩田規久男 (2000) 『金融』東洋経済新報社
- Romer, David H. (2000). "Keynesian Macroeconomics without the LM Curve." *Journal of Economic Perspectives*, 14(2) : pp.149-169
- 鈴木淑夫 (1974) 『現代日本金融論』東洋経済新報社

Tobin, James (1969), "A General Equilibrium Approach To Monetary Theory,"

Journal of Money, Credit and Banking Vol. 1, No. 1, pp. 15-29

筒井義郎 (2001) 『金融』 東洋経済新報社

吉野直行・山上秀文 (2013) 『金融経済—実際と理論』 慶應義塾大学出版会

芭蕉とカント

—俳句の論理構造—

石 神 豊

はじめに

俳句は五・七・五という、たった十七音で表された短詩文である。俳句の成立は、室町時代の末期に俳諧の連歌（滑稽味をもった連歌）¹から五・七・五の上の句（発句）が独立してできたものである。江戸時代前期に松尾芭蕉（1644-94）によって、俳諧が本格的な詩文芸として確立され、さらに明治になって正岡子規がいわゆる近代の俳句として一般のものとしたといわれる。

俳句（俳諧）の魅力は、そのたった十七音からなる短い詩文が、一つの生ける世界を眼前に創りだしてみせるところにあると思う。俳句の約束ごととして、「季語」と「切れ」がある。季語は季節を示す語であるが、この語は自然の世界を取り込む役割をもっているといつてよい。また、「切れ（切れ字）」とは俳句が一つの「間」を含むことを示している。この「間」は、句が別次元の、あるいは哲学的にいうなら超越論的な意義をもっていることを意味していると考えられる。こうした約束ごとを規制だとして排除する立場もあるが、俳句の深みはやはりこの二つ約束ごとに負っているところが大きいのではないか（ただし、切れのない句もある）。俳句の芸術性という点と難しいが、一方で現実性・日常性を離れることなく、また一方で、ある種の精神性・理念性をもっている点に、俳句の芸術性あるいは創造性をみることができるとは思わないかと思う。この生きた宇宙をわずか十七音で現前化させるのが俳句の真骨頂である。

この俳句を一つの命題、あるいは判断としてみることはできないだろうか。命題、判断はふつう「SはPである」という形をとるが、俳句の場合もこの形をもっているとみることができる。ただ、俳句の場合は表現上の簡素化が進み、たとえば「である」は通常省かれるし、動詞が省かれることも多い。また俳句における「切れ字」は、一つの単純な命題とはやや距離をもった部分だといえる。

命題、判断としてみるといっても、なにかことさらに俳句を難しくみようというわけではない。命題や判断はその文が論理、意味をもつ文だということである。同じく俳句は論理、意味をもっている。哲学において命題や判断を重視するのは、そこに思想が示されるからである。「万物は流転する」（ヘラクレイトス）とか「人間は社会的動物である」（アリストテレス）というような命題が、ある思想を含んでいること

は何となく理解できよう。ただ、この思想を探究するためには哲学的考察が必要である。ヘーゲルは、「哲学の役割は表象を思想へと変えることでしかない」²と述べている。「五月雨をあつめて早し最上川」という芭蕉の句をあげてみよう。これはたとえば「降り続いている五月雨を一つに集めた最上川は、すさまじい速さで流れている」という「SはPである」の形に言い換えることができる。

一般に文章は表象的に(事象として、あるいはイメージ的に)表されるが、その奥に広い意味で思想があるといえ、その思想を把握するために哲学的分析、あるいは哲学的吟味が必要なのである。俳句もまた同じではないだろうか。そこで俳句の詩文に具体的に哲学的吟味を加えてみたらどうだろうか、というのが本稿の趣旨である。俳句のもつ論理構造や意味を見出すことができれば、俳句がもっていると思われる不思議な魅力を、広く理解するのに資することにもなろう。

本稿では、とくに芭蕉の俳諧(*俳句といってもよいが、明治以前は一般に「俳諧」といっている、それにしたがう)をとりあげてみたい。芭蕉については多くの論考があるが、哲学的な分析、吟味を加えたものはあまりないように思われる。また論考の多くは表象の次元に止まっているように思われる。芭蕉は、冒頭に述べたように、従来の俳諧を本格的な詩文芸として独立させ、その後の俳諧、近代俳句への道を切り開いた功労者である。彼の俳諧には、新しい知見が盛り込まれているように思う。

そして本稿では、哲学的に理解するうえで役立つと思われるものとしてカント哲学の見解、なかでもとくに主著の『純粹理性批判』の中で、超越論的弁証論として論じられている箇所の見解をとりあげてみようと思う。そこでは自然にしたがった因果関係、自由による因果関係という二つの見方が語られていて、命題分析に有益だと思われるからである。

1 「古池や蛙飛びこむ水のおと」の句をめぐる

芭蕉の俳句の中でももっとも有名なものの一つに「古池や蛙^{かわず}飛びこむ水のおと」という句がある。この句は芭蕉の作風(蕉風)が確立されるうえで重要な句とされている。芭蕉の弟子の各務支考^{かがみしこう}(1665-1731)はこの句が成立したいきさつについて、「葛^{くず}の松原」という聞き書きの中で次のように述べている。

弥生も名残をしき^{ころ}比にやありけむ、蛙の水に落る音しばしばならねば、言外の風情この筋にうかびて、「蛙^{とび}飛込む水の音」といへる七五は得給へりけり。晋子^{しんし}(*其角のこと)が傍^{かたはら}に侍りて、山吹といふ五文字をかふむらしめむかと、をよづけ(*およづける: 大人びたことをいう)侍るに、唯「古池」とはさだまりぬ。しばらく之を論ずるに、山吹^{やまぶき}といふ五文字は風流にしてはなやかなれど、古池といふ五文字は質素にして實也。實は古今の貫道なればならし(*ならし: であろう)。されど華實のふたつはその時にのぞめる(*希望できる)物ならし」³

ほぼつぎのような情景である。1686(貞享3)年の3月末、江戸深川の芭蕉庵で句合

せが開かれた。そこで、芭蕉はカエルが水に飛び込む音を聞いて、はじめに「蛙飛びこむ水のおと」と作ったところ、その場にいた弟子の其角が、上に冠する五文字として「山吹や」がよいと大人びたことを言ったが、芭蕉はそれを退けて結局「古池や」とした。そしてこのわけについて芭蕉は次のように語った。たしかに「山吹」は華やかさがあり風流である。しかし「古池」は質素であるが実がある。時代を貫いて大切なのは実のほうであり、いま「古池」としたのは、その実をとったのである。そして華にしても実にしてもそうしてこそ希望しうるものなのであろう、と。

当時まで和歌に詠まれた蛙(カワズ=カエル)とは河鹿かしかガエルであり、その鳴き声が愛でられたのであった。そして「山吹」はしばしば蛙の声とともに用いられたのである。このことを踏まえて其角は、芭蕉の「蛙飛びこむ水のおと」に対して、すかさず古来の「山吹」を提唱したのであった。彼は「山吹+蛙の鳴き声」という伝統的な組み合わせに対して、「山吹+蛙の水音」という組み合わせが伝統を破る革新的な主張に沿うものと考えたからである。

しかし、芭蕉はもう一歩進んでいた。「山吹といふ五文字は風流にしてはなやかなれど、古池といふ五文字は質素にして實也。實は古今の貫道なればならし」と論じたという。山吹もなるほど風流であって華やかさのある詞である。しかし、ここで「山吹」を用いることは、古来の伝統に反対ののろしをあげるような激しいものであり、どうであろうか。それは、「華」をとることで「實」を捨ててしまうことになる。むしろ地味ではあるが「古池」をとるほうが、真情にかなうのではないだろうか。また、「實」は古来貫かれてきた歌の道であろう。たしかに華實兼備^{そくこうん}が外観と実質、表現と内容をともに備えることこそが、歌学では理想とされてきたものである。この二つは重要である。「されど華實のふたつはその時にのぞめる物ならし」、つまり「實」をとるといふこの道をとってこそ、花も実もある理想的な文芸が期待できるのではないだろうか……。

同じ支考が著した俳論『続五論』にも、

詩歌といふは道なり。道に華實あるべし。實は道のみちにして、人のはなるべからざる道をいふ也。華は道の文章にして、神のこゝろをもやはらげるべし⁴

との文章がある。ここでも詩歌の道として華實が重視されると述べているように、華實は、いわゆる蕉風しょうふうの内容にかかわる重要な問題であるように思われる。

蕉風とは、貞門ていもん(松永貞徳を祖とする江戸初期俳諧の一派)・談林俳諧だんりん(西山宗因の作風のもと、貞門に対して軽妙で自由な一派、芭蕉も加わっていた)の滑稽や機知を中心とする俳諧の流派に対し、芭蕉が通俗性を脱却して新しい文芸性を確立したことをさしている。たしかに「俳諧」とは字義のとおり滑稽さをもったものであり、若き時の芭蕉もそうした了解をしている。俳諧の通俗性(日常的性格)や滑稽さは、ある意味で民衆文芸としての利点ともいえ、そうした民衆的な性格は芭蕉自身終生大事にしたものであった。しかし、それだけでは俳諧は低俗なものになってしまう。不惑の年齢になった芭蕉に俳諧の革新をうながしたものの、それはおそらく派手さがめだつようになった

俳諧に対して、＜中身のある俳諧を＞という思いではなかったか。つまり「實」のある俳諧文学の提唱である。しかしこの「實」をとるということとは、其角が錯覚したように「華」を捨てるということではない。むしろ「實」の方向に「華實ともに」希望できるというのが芭蕉のとった道であった。その後の彼の多くの句には、そうした彼の思いが反映しているように思われる⁵。正岡子規も芭蕉晩年の十年間の句の素晴らしさを讃えている⁶。

支考は『俳諧十論』(1719刊)のなかで、この「古池や」の句をもって蕉風開眼の句であると明言している。

古池の蛙に自己の眼をひらきて、風雅の正道を見つけたらん、爰こゝを天よりうけつぎて、自悟とも自証ともいふべき也。世にいふ俳諧はいざしらず、俳諧はよし芭蕉庵を元祖といふべし。⁷

支考の言葉は、芭蕉の弟子としての自負が前面に強く出ている感があるが、「古池や」の句のもつ意義を端的に指摘し、俳諧の世界における芭蕉および蕉風の正統性を位置づけたものとしてインパクトをもっている。堀切実は『俳聖芭蕉と俳魔支考』という著作の中で支考の理解の卓越さを認める。堀切はこの著作の中で、蕉門の俳論「三冊子」から、「松の事は松に習へ、竹のことは竹に習へ」「物の見えたる光、いまだ心にきえざる中うちにいひとるべし」との二つの芭蕉の教えをとりあげ、「古池や」の句にいたる芭蕉の境地を次のように述べている。

自然界の普遍的な本質の实在を信じつつも、これを「松」や「竹」といった一つ一つの個性的本質のなかにとらえようとする即物的な直覚法であった。その個の本質から普遍の本質への微妙な一瞬の転換によるポエジーの獲得が、「物の見えたる光」の教えにこめられているのであった。芭蕉が「風雅の誠」をせめるべきことをいい、また「私意を去る」ことによって「物我一如」の根源的認識に到達すべきことを説くのも、このことにほかならない。蕉風開眼の句と喧伝けんでんされた「古池や」の句には、そのことがみごとに示されているとみてよからう。⁸

「風雅」とは俳諧のことであるが、私心を捨て大自然と一体となった永遠不変の境地のことを「誠」という。また「物我一如」も同様な意味である。堀切にしたがえば、「古池や」の句は「個の本質から普遍の本質への微妙な一瞬の転換」を示しているという。つまり、そこに芭蕉という人物のポエジー(詩心)があるのだとする。ややわかりにくい表現であるが、要は普遍的なものを個物の中にとらえることだといってよいだろう。

＜子規の芭蕉評＞

芭蕉の俳諧における革新がいかなるものか、「古池や」の句を通して多少みてきたが、ここで俳句を近代文学として確立するのに力を尽くした正岡子規(1867-1902)

が、芭蕉についてどう語っているかを少しみておこう。

子規は、俳諧の神ともされていた芭蕉に対する批判者として文壇に登場した。彼の歯に衣着せぬ批評には小気味よいものがある。新聞「日本」に連載した1893(明治26)年の「芭蕉雑談」では、「余は劈頭に一断案を下さんとす曰く芭蕉の俳句は過半悪句駄句を以て埋められ上乘と称すべき者は其何十分の一たる少数にすぎず」⁹と述べている。つまり、芭蕉の句の大半はダメであり、よいものはほんのわずかだというのである。もっともたんに悪評をつくのではなく、蕉風を確立したのち亡くなるまでのわずか十年ほどに二百句もの好句を作ったことに驚き賞賛していることはすでに述べた。

上の「古池や」の句に対し、子規はいかなる評を述べているか。1895(明治28)年の『俳諧大要』の中でこう述べている。

初学の人俳句を解するに作者の理想を探らんとする者多し。しかれども俳句は理想的の者極めて稀に、事物をありのままに詠みたる者最も多し。しかして趣味はかへって後者に多く存す。

古池や蛙飛びこむ水の音 芭蕉
という句を見て、作者の理想は閑寂を現はすにあらんか、禅学上悟道の句ならんか、あるいはその他何処にかあらんなどと穿鑿する人あれども、それはただそのままの理想も何ものなき句と見るべし。古池に蛙が飛びこんでキャプンと音のしたのを聞きて芭蕉がしかく詠みしものなり。

稲妻やきのふは東けふは西 其角
といふは諸行無常的理想を含めたるものにて、俗人はこれを佳句の如く思ひもてはやせども文学としては一文の価値なきものなり。¹⁰

つまり子規によれば、芭蕉の「古池や」の句はなにも理想を詠んだものではなく、ただ事実ありのままを写しとったものにすぎないのだという。古池があり、その池にカエルが飛びこんで音がしたというだけのことである、と。ここには子規一流の写生重視の観点が出ている。芭蕉に対してなされる一般に理想主義的解釈に傾いた理解の仕方は捨てて、むしろ率直に事実ありのままを詠んだものとみるべきだといふのである。

ここには子規なりの鋭い指摘があるように思う。事実をありのままに写しとるところに俳句の趣向があり、作者の理想や教訓的なことがらを句の形を借りて述べようとするところにそれはないという子規の評は納得できるものである。子規が自然を力強く詠った与謝蕪村(1716-1783)を高く評価したことは知られている。「古池や」の芭蕉に対しては、やや批判的であるとはいえ、一定の評価はしているといえよう。芭蕉のあとにあげている其角の句については、そうした理想(ここでは諸行無常という観念)が先走っていて「文学としては一文の価値もない」と手厳しい評を下している。

ただ、子規のこの理想批判をもって、俳句における理念的なものを全面的に否定したというのは間違いであろう。子規のいう理想とは、作者の主観的な理想であり、

それは他者にとっては異質なものでしかない。したがって教訓もそうであるが、そうした作者の理想が表に出ることで、俳句のリアリティが損なわれるということを批判したのであり、その意味からもありのままの作為のない表現を通して示されるべきだといっているように思われる。

「古池や」の句に再度戻ってみよう。「古池や蛙飛びこむ水のおと」の句において、伝統的な「蛙一鳴き声」ではなく、「蛙一水の音」とすることが表現上の一つの革新であったことは理解できた。しかし、それだけで終わったならば、それだけの話でもある。わずかな新表現の提唱にすぎないことになる。それでは、あとから付加したとされている「古池や」とは何か。

「古池」は、語感からいえば「誰も氣にとめない、かなり前からそこにある池」とでもいいかえられるような池のことである。「この句の古池は、もと杉風(さんふう)深川の土地を所有し、芭蕉庵を造るなどして、芭蕉を経済的に支えた門下の人物)が川魚を活かしておいた生簀(いけす)の跡で、芭蕉庵の傍らにあったと思われる」¹¹と山本健吉は述べている。長谷川權は『古池に蛙は飛びこんだか』という著作の中で、古池は「ただ芭蕉の心の中にある古池である」¹²という。

長谷川は「古池や」という「切れ字」になっている点に注目する。「古池に」という普通の言葉であったらどうか。「古池に蛙飛びこむ水のおと」という句ならば流れとしてスムーズではあるが、なにか物足らない感じもする。また、「古池」の水と、「水のおと」の水が重複するから句全体が重くなる。「古池や」は明らかにそれとは違う雰囲気をもっている。上述したように、「蛙飛びこむ水のおと」だけで一つの革新的表現である。しかし、この「古池や」の表現に、この句のもつもう一つの大きな意義を長谷川は見いだしている。

和歌の規範を破っただけならば、古池の句は壇林の延長線上の一句にすぎないだろう。そもそも壇林とは和歌の規範を破っていく衝動であったからである。それだけなら、古池の句はかつて壇林に心酔した芭蕉の壇林的衝動の残り火が蛙を襲っただけの句にすぎない。

古池の句のもう一つのはるかに大きな意義、それは俳諧の発句にはじめて心の世界を開いたことだった。(中略)……芭蕉はこの古池の句以後、心の世界を映し出す句を堰を切ったように次々と詠む。¹³

長谷川は「古池や」という句頭の詞は、開かれた「心の世界」を映し出す役割をもっているというのである。言いかえれば「蛙飛びこむ水のおと」とは別次元の世界の開示であるということであろう。「蛙飛びこむ水のおと」という文章は、現象世界の記述であり、実際に経験されたことがらの表現である。ところが「古池や」はこの一語で独立した世界を意味し、具象的、経験的世界を超えたところにある世界を示しているという。長谷川は、現象世界、あるいは感覚的世界に対して心の世界といっている。『奥の細道』をよむ』という他の長谷川の著作¹⁴でも「古池や」

の句を「現実と心の世界の取り合わせ」とよび、「古池型」と名づけ、『奥の細道』の句を分類さえしている。

ただ、この長谷川の区分の仕方はあまりにも安易ではないだろうかと思われる。「古池や」は心の世界、「蛙飛びこむ水のおと」は現実の世界だというのは、単純な二元的世界論である。芭蕉は二元論者だったのか、おそらくそうではないだろう。

この点、正岡子規の洞察には鋭いものがある。「古池や」の句について子規はこう述べる。

……芭蕉は只^{ただ}、惘然^{もうぜん}として坐りたるまゝ、眠るにもあらず覺むるにもあらず。萬籟^{ばんさい}（*万物が立てる音）寂^{さび}として妄想全く断ゆる其瞬間、窓外の古池に躍蛙（飛び込む蛙）の音あり。自らつぶやくともなく人の語るともなく「蛙飛びこむ水の音」といふ一句は芭蕉の耳に響きたり。芭蕉は始めて夢の醒めたるが如く、暫く考へに傾けし首^{こうべ}をもたげ上る時^{あぐ}覺えず破顔微笑を漏らしぬ。

以上は我憶測する所なるを以て、實際は此の如くならざりしやも計り難けれども、芭蕉の思想が変遷せる順序は此外に出でずと思はる。¹⁵

子規は、芭蕉が「古池や」の句を発想したときの心境を推測しているが、この句がたんに現実を示した句であるとはしていない。「蛙飛びこむ水の音」という句には、芭蕉のある新しいものの見方、あるいは思想がある。まさにこの思想が受胎した瞬間こそ句を読んだ瞬間であったということであろう。子規は芭蕉の意はこの下二句で尽きているとし、「古池や」は「下二句のために場所を指定せる者のみ」¹⁶と述べている。

子規はあるがまを重視し、それと分離した理想は認めない。しかし、子規がすべて心的なもの、理念的なものを拒否したとはもちろんいえない。そうではなく、このあるがまま（自然）のなかにそうした心的なもの、理念を見出すのである。いわば、現実とところが一体となった句をもっとも高く評価しているように思われる。それは現実だけでもない、心だけでもない。それらが一体となったものであり、「真実」という表現があたるように思われる。たとえば子規が「老健雄邁^{ろうけんゆうまい}（*老練で勢いがあり、強くたくましい）」な句として評価する、芭蕉の「夏草やつはものどもの夢のあと」や「五月雨を集めて早し最上川」などの句にしても、この句が示す実際の情景、現象的なことだけを評価しているのではなく、そうした自然表現の中に、心をも含む「真実」の世界が表現されているがゆえに評価しているのだと思う。

ただ本稿筆者は、「古池や」の句に関して、この詞がたんに「下二句のために場所を指定せる者のみ」とした子規の考えには賛成しがたい（*本稿3を参照）。

2 二つの因果関係—カントの超越論的弁証論より

カントの『純粋理性批判』はその名のとおり理性批判の書である。理性はとくに人間に特有な働きとして考えられる。たんに自然界を中心とした経験にもとづく思

索のみならず、それを超えて、経験に縛られない(つまり純粋な)理性独自の思索をもたらす。そこに大いなるイデー(理念)の世界が広がるのである。たとえば代表的な理念として「魂」「世界」「自由」「神」などがある。人間は理念なくしては大きな仕事をなしえないともいえるし、理念をもつがゆえに芸術や宗教の世界とも結びつくのである。ただ理念は、そうした人間に希望をもたらすとともに、同時にそこにはある落とし穴があることを知らなければならない。それは、理念に関して、二つの矛盾する命題が提出されるということである。それが「純粹理性のアンチノミー(二律背反)」といわれるものである。カントは超越論的弁証論として、理性の大きな力とともに、そこにある矛盾した事態について明らかにしたのであった。

カントは、理性のおちいるアンチノミーに四つあるといているが、ここではその三番目の「自由(と必然)」に関するアンチノミーをとりあげる。これは因果関係の考察でもある。

およそある事象が存在するとき、それが成立するためにはそれを規定するものがないと考える、その規定のことを「原因」と呼ぶ。ここにいわゆる因果関係(因果律)があることになる。ところがこの因果関係について、対立するとみられる二つの考え方がある。

＜テーゼ＞ 自然法則にしたがう因果関係が唯一のものではない。自由による因果関係がある。

＜アンチテーゼ＞ すべては自然法則にしたがう因果関係によって成立する。自由による因果関係は存在しない。

みられるとおり、自由に関してこの二つの考え方は対立している。

＜テーゼ＞側にいわせると、自然法則の因果関係は「原因のまたその原因」という具合にどこまでも遡り、結局止まることがなく、第一の原因というものはありません。この因果関係の系列はどこまでいっても完結しないのであるから、＜アンチテーゼ＞側の主張はけっして普遍的なものとはなりえない。したがって自然法則とは異なる別の原因がなければならず、それは原因として絶対的な自発性をもったものでなければならない。ゆえに自ら系列を始めるところの原因、つまり自由がなければならない。

一方、＜アンチテーゼ＞側にいわせれば、絶対的自由という作用によって因果系列が始まるというのは、そもそも因果律に反している。そこには断絶があり、連続している経験的な統一を無視するから内容的にも空虚でしかない。つまり自由というのは、内容のない空虚な思惟物にすぎないのである。また、自由は法則によって規定されないから、それ自身無法則的なものであるといわざるをえない。自然か自由かは、合法則性か無法則性かということになろう。自由は幻影でしかない。

カントがここで示す「自由か必然(自然)か」という対立は、古くからある問題であるとともに、種々の場面で提起されてきた問題でもある。古代のプラトニズムと原子論の対立、世界創造説と形成説の対立、意志の自由をめぐるエラスムスとルタ

一の対立、近代の合理論と経験論の対立、道徳また法的責任のあり方をめぐっての主観説か客観説かの対立など、種々のものをあげることができる。この問題は、意志や目的をもつ人間にとって永遠の課題なのかもしれない。

カントは、この問題を理性自身がもつ問題としてとらえた。すなわち上の二つの立場が同じ理性によって提起されるということであるが、そこにまた解決のむずかしさもあるという。ここでは因果関係 (Kausalität) の考察が中心となって、自由という宇宙論的理念 (* 宇宙論的とは、すべて事象には原因がありその究極の原因を探究することを意味する) が導かれるのである。そもそもなぜ自由という理念が必要なのか。経験との関係ではどのようなことがいえるのか。カントは宇宙論的理念について述べる。

宇宙論的理念は、勝手に案出されたものではない。理性が経験的総合の進行を続けていくと、必然的にかかる理念に到達せざるをえないのである。つまり理性は、経験の規則にしたがって常に制限されてしか規定されることができないものを、一切の制限から解放して、その無制約な全体性を把握しようとするのである。¹⁷

経験的な進行において、原因—結果という系列は無限の進行となる。だからこそ経験はたえず新しい知見を積み重ねることができるのである。しかし、この世界のすべてを経験しつくすことはおそらく不可能である。「経験の全領域はそれがどれほど広がっていきこうと、たんなる自然の化身へと変えられるものでしかない。しかしこういう仕方では、因果関係における諸条件の絶対的全体性を求めることはできない」¹⁸のである。そこにこの経験的系列の束縛があり、この重さに通常は耐えることができないから、理性はこの系列から解放された状態—無制約な全体性—を想定するのである。そこにいわゆる第一原因というものが案出されるのである。すべては第一原因から始まるのであり、それは無条件なものであり、すべての開始である。このことで経験的系列の(完結しないという)不完全さは解消されることになる。キリスト教などでは、この無制約な全体性(全知全能なもの)として人格的な神 (= 創造神) を置いたともいえる。

カントは因果関係に関してきわめて重要なことを指摘している。われわれが経験的な因果系列を考えると、そこには時間的な経過が想定されているということである。しかし、「われわれがここで問題にしている絶対的に第一の始まりというのは、時間のそれではなくて因果関係に関することである」¹⁹。つまり、一般に経験的にいうところの因果関係は時間(経過する時間)を含んでいるとみられる。しかし本来、因果関係というのは時間とは別のものである。そこにこそ自由の場所があるのである。自由の原因というものは非時間的なものである。そこで、前者を時間的因果関係と呼び、後者つまり非時間的因果関係を原理的な因果関係と呼ぶことにしよう。そうすると、ここに異なる二種の因果関係があることになる。そこで次のように分類することができる。²⁰

- ① 自然にしたがう因果関係＝時間的因果関係……原因とは時間的な開始。
- ② 自由による因果関係＝原理的因果関係……原因とは原理的な開始。

ここで①を外的因果、②を内的因果ということも可能であろう。ともかくこの二種類をはっきり区別することが大切なのである。こうして因果関係に二つの種類があることがわかったうえで、ところでこの二つは果たして本当に対立するものであるのか。先にあげたアンチノミーでは、〈テーゼ〉と〈アンチテーゼ〉の主張は、自由による因果関係を認めるか認めないかという点で対立しているように見えた。しかし、いまここでまとめた①②は対立関係にあるとはいえない。なぜならそれらは因果関係の意味合いが異なるからである。すなわち同じ因果関係という概念を用いてはいるが、時間的に進行する因果関係と、時間とは無関係な(いわばゼロ時間の)原理としての因果関係である。ということは、世界における事象に関するこの二つの因果関係は、対立するどころか、むしろ両立する、あるいはひょっとすると相互に補完するという可能性もあることになるのではないか。

ここから振り返っていえば、最初の〈テーゼ〉〈アンチテーゼ〉の表明も、じつは矛盾するかのように見えたにすぎないということもはっきりしてくる。自由の存否をめぐる使われた「因果関係」という概念がもともと異なる意味において使われていたのであり、論理学というところの「媒概念曖昧の虚偽」にあたるからである。

カントは「理性の宇宙論的自己矛盾の批判的解決」という節において、このことをはっきり述べている。

ここから次のことが明らかになる。宇宙論的な理性推理の大前提は、条件付きのもの(媒概念)を純粹カテゴリー(理念)の超越論的な意味において受け取り、また小前提はこの同じ条件付きのものを、現象にのみ適用された悟性概念の経験的な意味において受け取っている。そしてここに弁証的虚偽がある。これは大前提と小前提とに現われる媒概念をそれぞれ異なる意味に解したために生じた虚偽である。²¹

この文章は、一般に宇宙論的推理について述べているのであるが、われわれの論じている第三アンチノミーでいえば、「自由による因果関係がある」という命題と「自然にしたがう因果関係がある」という命題において、同じ「因果関係」という概念が異なる意味において使われているということである。すなわち前者は超越論的な意味、後者は経験的な意味において使われている。しかし論理法則によれば、媒概念は同じ意味において使われなければならない。先の〈テーゼ〉〈アンチテーゼ〉においては、この媒概念が同じ条件において用いられてはいないのであり、対立は(同じ条件の概念だとする)仮象の上に成り立っていたのである。したがってこのアンチノミーは、論理的な虚偽にもとづいたものであり、思い違いであったといつてよいわけである。結局のところ大切なことは、①と②の峻別ということになる。すなわち因果関係に二種類の異なるものがあるということを知ることである。

次にあげるカントの文章は、この二種の因果関係を明確に定位している。

生起するものについては二種類の因果関係しか考えることができない。自然にしたがう (nach der Natur) 因果関係なのか、それとも自由による (aus Freiheit) 因果関係なのかのどちらかである。(中略) ……ところで現象の因果関係は、時間的条件下に基づいている、したがってもし前の状態がずっと存在し続けているとしたら、時間的に初めて発生するような作用をもたらすことはできない。こうして、生起し発生するものの原因の原因性は、それ自身また発生したものであるから、悟性の原則にしたがってさらにそのまた原因を求めねばならないことになる。

これに反して、私が宇宙論的意味において自由というのは、ある状態をみずから始める能力のことである。したがって自由の因果関係は、自然法則にしたがって時間的に規定するような別の原因にふたたび支配されることはない。この意味において自由は純粋な超越論的理念である……。²²

この文章の下段で言われているように、宇宙論的意味の自由、すなわち第一原因としての自由とは「ある状態をみずから始める能力」である。この自由をまた「超越論的自由」とよぶのである。理性にはこの超越論的自由がある。「超越論的」とは自己自身に関係することであり、他の支配を受けることがないことを意味しているが、また、この自己関係は自発性を意味し、己自身を知るという自己知をも意味している。この超越論的自由によって理性は、現象世界に規定されることのない自分自身の世界を獲得するのである。それは他によらず自ら思考することである。

ところでここに一つ問題がある。それは自由による因果関係と自然にしたがう因果関係との関係である。すでに二つの因果関係は対立するものではないということを見た。しかし、それでは両者はまったく無関係かということではないのである。結果である事象については共通するものである。異なるのはその原因の性格の相違なのである。つまり、ある現実の事象について、その事象は自然必然的に成立したものなのか、それとも自由(超越論的自由)の原因性から生じたものなのかということである。つまり、ここに同じ一つの事象について二つの原因性が考えられるということになる。これについて、『純粹理性批判』でのカントの叙述とは離れるが、プラトンの『パイドン』に語られるものをあげてみたい。

(ソクラテスは牢獄で死刑の執行を待ちながら座っていて、友人と自分がここにいる原因について対話をしている。ソクラテスは、ここに自分が座っている原因について、ある人がこう語ったと友人に話しかける場面である)

僕(ソクラテス)の身体は骨と腱から形作られており、骨は固くて相互に分離していながら関節でつながっている。腱は伸び縮みできて肉や皮膚とともに骨を包み、皮膚がこれらすべてのものを一つのものにまとめている。そこで、骨が関節の中で自由に揺れ動くのだから、腱が伸びたり縮んだりすることによって、僕はいま脚を折り曲げることができるのであり、この原因によって僕はここで脚を折

り曲げて座っているのである、と。さらにまた、君たちといま対話していることについても、彼は他の同じような原因を語ることだろう。音声とか、空気とか、聴覚とか、その他無数のそのようなことを原因として持ち出して、本当の原因を語ることがなおざりにするのである。²³

いうならばこれは、ある人が事象(ソクラテスが座っていること)の原因として「自然にしたがう因果関係」を述べたということである。ソクラテスは、こうした説明を本当の原因とは認めない。

だが、本当の原因とは次のことである。アテナイ人たちが僕に有罪の判決をくだすことをより善いと思ったこと、それ故に僕もまたここに座っているのをより善いと思ったこと、そして、彼らがどんな刑罰を命ずるにせよ留まってそれを受けるのがより正しいと思ったこと、このことなのである。²⁴

ソクラテスが本当の原因と認めるものは、自分自身の判断にあるという。どう判断するかは自分の自由である。彼はより善い、より正しいと思うほうを選んだ。その結果としていま座っているのだというわけである。すなわち、彼が座っているのは「自由による因果関係」によるものだということができる。

しかしながらこの二つの因果関係は矛盾するのでもない。たしかに座るには身体的なもの(関節や腱など)が原因とならなければ座ることはできない。だからそう説明する人がいても間違いとはいえないのである。しかし、そうしたことは別にソクラテスを座らせている原因がある。それはソクラテス自身の価値判断であり、意志である。この判断、意志に働いているのはカントのいう超越論的自由である。つまり、自然にしたがう因果関係と自由による因果関係とは、座っているという事象において矛盾なく接合しているのである。カントも『純粹理性批判』において、「行為的主観」また「実践理性」という概念をもちだし、行為あるいは実践的な自由において、二つの因果関係は結びつくと言っている。

こうして、(理性をもった)人間にとってすべての事象は自然の因果関係によって成り立つものであると同時に、自由の因果関係によって同時に成り立っているといつてよい。「SはPである」という判断あるいは命題は、理論理性では「○○である」という事実判断であるが、意志(実践理性)では「○○であるべき」という当為判断である。

人間が行為するということが、そこに実践的自由がある。そこではいかに自然にしたがった因果関係が作用しようとして、それにもかかわらず自由による因果関係が働きうるのである。こうしてとくに自由の因果関係において、「意志」の意義が大きく浮かび上がってくるといえる。この意志論の展開は、『純粹理性批判』の後に書かれた『道徳形而上学の基礎付け』で論じられ、『実践理性批判』へといたる。

そしてカントの第三批判書である『判断力批判』は、正面から上に述べてきたような自然と自由の接合の問題に焦点を当てている。この書からの一節を引用する。

ところで感性的なものとしての自然概念の領域と、超感性的なものとしての自由概念の領域との間には、見極めがたい溝がたしかにあり、そのため自然概念の領域から自由概念の領域への移行は(理性の理論的使用を介しては)可能ではなく、あたかも前者から後者へのどのような影響も及ぼしえないような多くの相異なる世界が存在するかのようなのである。それにもかかわらず、後者の世界は前者の世界に対してある影響を及ぼすべきである。すなわち、自由概念はその諸法則によって課せられた目的を感性界のうちに実現すべきであり、したがって自然もまた、自然の形式の合法則性が少なくとも自然のうちに自由の諸法則にしたがって実現されるべき諸目的の可能性と調和し(zusammenstimmen)うるというように、考えられなければならない。²⁵

つまり、自然界はたんに自然の因果関係にしたがってのみ規定されているように見え、自由の因果関係とは関係のないように思われるのであるが、じつは自然界の合法則性と自由が自然のうちに実現する目的が合致することが可能でなければならないのである。こうして自然の因果関係と自由の因果関係はいわば調和すると考えられるのである。

この『判断力批判』に述べられるところの展開は別稿に委ねざるをえない。カント哲学は人間哲学としての大きな意義をもっているが、それはまた自然と自由の関係の問題を論じた哲学でもあった。人間はもともと自然と関係する感性と、自由をもつ理性の関係性の中で生きているといえ、カントはこの関係性の中で哲学を追究した(カントの「アプリアリな総合判断はいかにして可能か」という課題は、自然と自由の調和の問題でもあった)のであった。

3 芭蕉の句の論理構造

ここでふたたび芭蕉の句に戻ろう。以上みてきたカントの哲学的観点は、芭蕉の句に即していかなることを語りうるか。「古池や蛙飛びこむ水のおと」という句について、カントの観点を踏まえて再度アプローチしてみよう。

まず句の「蛙飛びこむ水のおと」という部分であるが、この文章はひと連なりになっており、表象的にも理解しやすい。つまり、この文はひとまず自然の因果関係(「原因:「蛙が飛びこんだ」⇒結果:「水の水音がした」」)を示しているといえる。しかし、俳諧としての文はそれだけではない。この文が自然にしたがう因果関係を示すだけならば、たんに即物的な現象の記述にすぎないことになる。少なくとも俳句、俳諧が文芸であるかぎり、この句が成立することにおいて、そこには作者のなんらかの主體的な関与があるとみられる。

「蛙飛びこむ水のおと」はたしかに一つの具体的な事象を示しているが、いまこの文章を判断・命題の形で書き直すとすれば、「水の水音がしたのは、蛙が飛び込んだからである」、あるいは「蛙が飛び込んだから、水の水音がした」ということになる

うか。この判断は事実をそのまま描写した事実判断とみられるが、それと同時に、「そうあることが善い」あるいは「そうあるべき」とする判断、つまり価値や当為を内に含んだ判断とみることが可能ではないだろうか。もし可能ならば、ここには作者の主体的な関わりがあることになる。この句では、作者とはむろん芭蕉自身である。

つまり芭蕉の句において、この下句に示された事象は自然の因果関係だけで説明が尽くされるものではないということである。ここにカントのいう自由の因果関係という考えを適用するならば、この「蛙飛びこむ水のおと」という事象は、読み手である芭蕉自身の自由によって生じた事象とみることができるのである。つまり眼前の事象は、原理的に芭蕉自身が引き起こしたものとみることができるということである。逆に言えば、芭蕉がいなかったならば、この事象そのものも成立しなかったといえる。……しかしながら、通常こうした解釈はなされることはほとんどないし、もしあったとしても、そうした解釈はあまりにも主観的な観点であるとして忌避されるようにも思われる。そこで芭蕉自身がどう考えているかをみてみよう。

芭蕉に『笈おいのこぶみ小文』(*芭蕉の死後、門人によって出版された)という作品があるが、そのはじめに芭蕉自身の俳諧論が語られている。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其の貫道かんどうする物は一なり。しかも風雅におけるもの造化にしたがひて四時しいじを友とす。見る処花かたちにあらざるといふ事なし。おもふ所月いできにあらざるといふ事なし。像、花にあらざる時は夷狄にひとし。心、花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。²⁶

この一段は、はじめに西行、宗祇、雪舟、利休などをあげそれら優れた先人たちは皆、同じ天地自然(造化)に立脚しているということを述べている。つづく「風雅におけるもの」とは芭蕉自身をさしているといつてよい(作品の中では風羅坊という名の主人公)。芭蕉もまた芸の先人たちと同じく自然にしたがひ、四季の風物の中に過ごしているのである。

つぎの「見る処花にあらざるといふ事なし。おもふ所月にあらざるといふ事なし」との文は、田中善信によれば「この言葉は世俗的な世界にいながら、その中に美を見いだしていこうとする芭蕉の姿勢を示したもの」²⁷ だという。芭蕉は世俗を離れるということをけっしてしなかった。世俗的な世界を離れて俳諧は成立しないというのが彼の基本的なスタンスであったと考えられる。この世界はたんに客観的世界ではなく、この世界はまた美の世界でもあるのだ。「見る処」すべて花であり、「おもふ所」すべて月なのである。これ以下の文章は「目で見たり心で思ったりするものが花や月のように美しくなければ、野蛮人や鳥獸と同じである。こうした粗野なあり方から脱出して、天地自然に身を任せ、そこへと帰るべきである」という意味である。

この芭蕉の文章は、一方で現実の事象をどこまでも重視し、自然の因果(つまり世俗的な世界)から離れてはならない、しかし他方、同時にそこに美の世界をみる

べきことを主張しているといつてよい。美の世界、それは理念(イデー)の世界である。そこでは自由からの因果が認められる。つまり「自然を離れずそこにまた同時に自由を見いだすこと」、それが芭蕉の俳諧の哲学である。一つの事象に二つの因果がみられる。そのことは一つの文章(判断)に二つの意義が込められているということに反映する。先に述べたように、ヘーゲルは「哲学の役割は表象を思想に変えること」と言っていた。一見、「蛙飛びこむ水のおと」は表象的文章であり、事実を記しただけのもののように思われるが、この文章に作者の思想を読みとるところに哲学の役割がある。ここに自由からの因果関係という観点を見出すとき、芭蕉の心を読むことに通じるように思う。

詩人タゴール(1794-1846)に「宇宙論」とのタイトルをもった論稿があるが、その冒頭に掲げられた詩はつぎのような文章で始まっている。

わたしの意識の色の中で
エメラルドは緑となり、
ルビーは紅となった。
わたしが空に向けて眼を開くと、
光が東から西に輝きわたった。
わたしが薔薇を見て
「なんと美しい」と言うと、
薔薇は美しくなった。²⁸

エメラルドがグリーンであり、ルビーが紅であることは自然の因果といつてよい。また登る太陽の光が東から西へと輝くこと、薔薇の美しさも自然のなすわざである。しかし、この事象は同時に人間(タゴール自身)の意識が成立させているものであることを、この詩は明瞭に述べている。ここには自由からの因果の存在がはっきり主張されているのである。

ここに文芸あるいは芸術というものの普遍的な意義が示されているといつてよいように思う。一つ一つの事象が自然のものであると同時に自由な人間自身のものであること、このことに気がついたとき、そしてそのことを表現したときにだけ真の文芸作品が生まれるのだということである。この点において芭蕉はタゴールとも通じるものをもっているといつてよいように思う。

芭蕉の句における句頭の「古池や」の意義についても再度考える必要がある。この詞が切れ字であって、他の文とはある距離をもっていることについてはすでに注意した。句の中に一つの別次元をもちこんでいるといつてもよい。これについて長谷川權は、「古池や」を心の世界としているが、たんにそうした意味だけではないと思う。長谷川は「俳句は「場」の文芸である」²⁹とも言っている。氏の言わんとするところは、俳句ができるのは「場」があるからであり、俳句の言葉はこの「場」を前提にしている(したがって読む場合もこの「共通の場」に参加することが必要である)という

ことである。筆者(石神)はこの長谷川の表現を俳句全体ということではなく、むしろ切れ字に当てはめて考えてみたい。つまり、「切れ」において「場」が示されるということである。

筆者のこの解釈の背景には、西田哲学がある。西田哲学は「場の哲学」ともいわれるが、それは「何かがあるということはそれを成立させている場がある」とする理解の立場である。この意味で、芭蕉の句を見てみた場合、「蛙飛びこむ水のおと」という事象が成り立つということは、それを成立させている場があるということにほかならないということである。

「蛙飛びこむ水のおと」が二義性をもった文だということを述べた。すなわち、自然的因果と自由の因果である。この両義は句の中でけっして対立するものでなく、異なるものでありつつも両立し、むしろ両者がある意味で結合しているとみるべきである。さらにいえば芭蕉という人間の中で、この両義は調和し一つになっていると考えられるのである。「造化にしたがひ造化にかへる」とは、二つの因果が調和している姿のことを表したのではないだろうか。

つまり、ここにはたしかに芭蕉自身における「場の開け」があるといえる。それは科学的な客観世界の展望でもなく、また心理的な内面世界の洞察でもない。芭蕉に開かれた「場」とは、自然世界であると同時に人間世界であるという「場」である。言いかえればそれが文芸の「場」であり、他の諸道と同じく俳諧がそこで精神的な高みをもちうる「場」である。そしてそれはまた自分だけの世界ではなく、共通の世界でなければならない。なぜならば、俳諧は個人のものではなく、皆のものだからである。皆が共有するもの、それは自然世界であり、人間世界である。この「場」においてこそ、真の文芸が成り立つのである。それゆえ芭蕉は「古池や」という詞を句頭に置いたのだと考えられないだろうか。

支考が「葛の松原」で言うように、「古池や」はのちに加えた詞である。芭蕉が「蛙飛びこむ水のおと」と詠んだとき、芭蕉はこの詩文に自分の俳諧のあるべき姿を知った。そして、二つの因果のありかたを全体として成立させている場について思いをこらした。とその時、その「場」として浮かび上がったもの、それが「古池」であった。古池という場においてこそ、「蛙飛びこむ水のおと」という命題が成り立つのである。華やかな「山吹」ではない。「古池」という、誰もが知っている共通の場でありながら、しかし通常は意識から隠れている古層ともいえるべきものを芭蕉はあえて拾い出したのである。

このことによって、「古池」はにわかに歴史の古層から蘇り、その存在の大きさが示される。それは共通の場の開示でもある。いわば眠れるものが目覚める、その本来もっているポテンシャルを示すにいたるということ、このことを芭蕉は「古池や」で示す。こうして芭蕉は、新しい自分の立場を古来の世界に根づいたものとして世に示すことができたのである。「古池といふ五文字は質素にして實也。實は古今の貫道なればならし。されど華實のふたつはその時にのぞめる物ならし」(前出)という支考の言葉は、こうした経緯を語るもののように思われる。

芭蕉の「古池や」の句は、こうして蕉風といわれる新しい俳諧のあり方を示す代

表的な句となった。ここには芭蕉という人間が躍如している。そして彼は、新しい境地をさらに深めるために旅に時を費やし、弟子や知己を訪ね、多数の歌集を撰し、驚くべき文芸活動をしていったのである。「古池や」の句を詠んだ1686(貞享3)年以後、よく知られた旅だけでも「鹿島詣」(1687)、「笈の小文」(同)、「更科紀行」(1688)、「奥の細道」(1689)と続いている。子規はこれをさして「芭蕉死後かつて漂泊の境涯に安んじたる俳人を見ず」³⁰と述べている。

そして、なくなる4日前に「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」の句を残した。そのとき七・五を「なおかけ廻る夢心」とも詠み、弟子の支考にどちらがよいかと尋ねたという³¹。実際、彼は旅において病気になったといわれるが、なにもそのことを句にしたのではなく、それほど旅を求め続けたということであろう。芭蕉は旅において自然と自由の調和に生きた人であった。つまり、彼にとっては旅こそが彼の生きる「場」であったと考えられる。

注

- 1 文中括弧内に*印を付した説明は本稿筆者による。以下同じ。
- 2 Hegel, *Enzyklopädie* I, Suhrkamp, § 20.
- 3 『校本芭蕉全集 第七巻』富士見書房, 1989, p.240.
- 4 『古典俳文学大系10 蕉門俳論俳文集』集英社, 1970, p.219.
- 5 支考の「葛の松原」をめぐる解釈については、堀切実『俳聖芭蕉と俳魔支考』角川選書, 2006、長谷川權『古池に蛙は飛びこんだか』中公文庫, 2013などの記述を参考にした。ただし、本稿での解釈は筆者に責がある。
- 6 正岡子規「芭蕉雑談(ぞうだん)」、『明治の文学 第20巻 正岡子規』筑摩書房, 2001, p.161.
- 7 各務支考『俳諧十論』第一「俳諧の伝」、『日本哲学思想全書 第12巻』平凡社、1980, p.36.
- 8 堀切実『俳聖芭蕉と俳魔支考』角川書店, 2006, p.83.
- 9 上記、正岡子規「芭蕉雑談」p.161.
- 10 正岡子規『俳諧大要』岩波文庫, 2002, pp.22-23.
- 11 山本健吉『芭蕉全発句』講談社学術文庫, 2012, p.221.
- 12 上記、長谷川權『古池に蛙は飛びこんだか』p.54.
- 13 同上 pp.65-66.
- 14 長谷川權『「奥の細道」をよむ』ちくま新書, 筑摩書房, 2007.
- 15 上記、正岡子規「芭蕉雑談」pp.165-166.
- 16 同上 p.167.
- 17 Kant, *Kritik der Reinen Vernunft, Kants Werke III*, Akademie Textausgabe, B490. (訳は『純粹理性批判(中)』篠田英雄訳, 岩波文庫, 1984, p.143を参照した)。
- 18 *ibid.*, B561. (同上 p.207).
- 19 *ibid.*, B478. (同上 p.132).
- 20 この二区分は筆者なりにまとめたものである。

- 21 *ibid.*, B527-528. (同上 p.176).
- 22 *ibid.*, B560-561. (同上 p.206).
- 23 プラトン『パイドン』岩田靖夫訳, 岩波文庫, 98C-D.
- 24 同上, 98E
- 25 Kant, *Kritik der Urteilskraft*, *Kants Werke V*, Akademie Textausgabe, SS.175-176.
(訳は『判断力批判』序論Ⅱ, 牧野英二訳, 『カント全集 8』岩波書店, 1999, p.21 を参照した)。
- 26『古典俳文学大系5 芭蕉集』集英社, 1970, p.456.
- 27 田中善信『芭蕉』中公新書, 2010, p.234.
- 28『タゴール著作集 第7巻』森本達雄訳, 第三文明社, p.319.
- 29 長谷川權『俳句の宇宙』中公文庫, 2013, p.13.
- 30 上記、正岡子規「芭蕉雑談」p.194.
- 31 支考「笈日記」, 『日本俳書大系 第3巻』日本俳書大系刊行会, 1926, p.12.

活動日誌〔平成26年度〕

平成26年5月27日（火）16時30分～18時

創価大学の本部棟10階第4会議室において、平成26年度通信教育部学会総会を開催した。

平成26年8月10日（日）

『通信教育部論集』第17号を発刊した。

平成26年7月30日（水）15時～17時

創価大学の本部棟10階第4会議室において、通信教育部学会第5回定例研究会を開催した。「第2回滝山祭記念講演「スコラ哲学と現代文明」の解説」のテーマで、山崎達也講師が報告した。

平成26年8月17日（日）19時～20時30分

創価大学の本部棟 M401 教室において、夏期スクーリング恒例の講演会を開催した。講師に島田歌穂氏（女優・歌手、大阪芸術大学教授）を招き「出会いは人生の宝物―女性の生起を生きる―」と題して講演を行った。

平成27年2月20日（金）10時～12時

滝山城址において、通信教育部学会第6回定例研究会を開催した。「滝山城研究の現状と課題」のテーマで、城跡研究家・中田正光氏のガイドにより現地視察を行った。



創価大学通信教育部学会規約

(平成10年4月1日 制定)

改正 平成22年5月26日

- 第1条 本会は、創価大学通信教育部学会と称し、事務局を創価大学通信教育部共同研究室におく。
- 第2条 本会は、本学の建学の理念に基づき、広く学術の研究と通信教育に関する調査・研究を通じて、教育・文化・平和の向上発展に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会は、目的の達成のために、つぎの事業を行う。
- 1 通信教育に関する研究
 - 2 広く人文社会科学系統の学問の研究
 - 3 機関誌『通信教育部論集』の発行
 - 4 研究会および講演会の開催
 - 5 その他適切な事業
- 第4条 本会は、つぎの会員をもって構成する。
- 1 正会員 本学通信教育部専任教員
 - 2 準会員 本学通信教育部の講義を担当する本学の専任・非常勤の教員で本会に入会を希望し総会で承認された教員
 - 3 学生会員 入会を希望し所定の手続を経た通信教育部生
 - 4 卒業生会員 入会を希望し所定の手続を経た本学通信教育部卒業生
 - 5 賛助会員 本会の目的に賛同し、総会の承認を得た者
 - 6 名誉会員 本会に名誉会員をおくことができる。
- 第5条 会員は、本会の機関誌その他の刊行物の配布を受け、また各種の会合に出席することができる。
- 第6条 会員は、所定の会費を納めなければならない。
- 第7条 総会は、毎年1回これを開く。ただし必要があるときは、臨時に開くことができる。
- 第8条 総会は、正会員をもって構成する。総会は会長が召集し、正会員の過半数の出席によって成立し、議決は出席会員の過半数による。
- 第9条 本会につぎの役員を置く。
- 1 会長 1名
 - 2 委員 若干名
 - 3 監査 1名
- 2 役員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし会計および監査については、再任を認めない。
- 第10条 会長は、本会の会務を統括し、本会を代表する。
- 2 会長は、通信教育部長とする。

- 第11条 委員は、委員会を構成し、会計、編集、庶務などの本会の運営にあたる。
- 2 委員は、総会において正会員のなかから互選される。
 - 3 委員会は、会長が召集し、議長となる。
- 第12条 監査は、本会の会計を監査し、その結果を総会に報告する。
- 2 監査は、総会において互選される。
- 第13条 委員会は、毎年度の事業計画および実績報告書、並びに予算書および決算書を総会に提出して、その承認を得なければならない。
- 第14条 本会の経費は、会費、大学の補助金、その他の収入をもってこれにあてる。
- 第15条 本規約の改廃は、総会の議決による。
- (附 則)
- 第1条 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。
- 第2条 本規約は、平成10年4月1日より実施する。
- 第3条 本会の会費は、つぎのとおりとする。
- 1 正会員 年額 6,000 円
 - 2 準会員 年額 6,000 円
 - 3 学生会員 年額 1,000 円 (入学時に4年分一括納入とする)
 - 4 卒業生会員 年額 1,000 円
 - 5 賛助会員 年額 6,000 円
 - 6 名誉会員 会費を免除する。

創価大学通信教育部学会会員一覧

正会員

花見	常幸	本学通信教育部長・法学部教授・会長
高橋	強	本学通信教育部副部長・文学部教授
吉川	成司	本学通信教育部副部長・教職大学院教授
木村	富美子	本学通信教育部教授・会計
有里	典三	本学通信教育部教授・監査
山本	忠行	本学通信教育部教授・企画委員
坂本	幹雄	本学通信教育部教授・編集委員
劉	繼生	本学通信教育部教授・編集委員
柴田	博文	本学通信教育部准教授
加納	直幸	本学通信教育部准教授・企画委員
山崎	勝	本学通信教育部准教授・会計
堂前	豊	本学通信教育部准教授・企画委員
黄	國光	本学通信教育部専任講師・庶務委員
開沼	正	本学通信教育部専任講師・庶務委員
石野	日出夫	本学通信教育部専任講師
福島	良樹	本学通信教育部専任講師
山本	誠一	本学通信教育部専任講師
青木	正	本学通信教育部専任講師
清水	研一郎	本学通信教育部専任講師
清水	百合香	本学通信教育部専任講師

準会員

浅山	龍一	本学文学部教授
池田	秀彦	本学法学部教授
石神	豊	本学文学部教授
尹	龍澤	本学法科大学院教授
岡部	史信	本学法学部教授
黒木	松男	本学法科大学院教授
佐瀬	恵子	本学法科大学院准教授
島田	新一郎	本学法科大学院教授
高村	忠成	本学法学部特命教授
寺林	民子	本学教職大学院准教授
長島	明純	本学教職大学院教授
西	穰司	本学教育学部教授
西浦	昭雄	本学学士課程教育機構教授
宮川	真一	本学通信教育部講師

山崎 達也 本学通信教育部講師

名誉会員

岸野 文雄 本学名誉教授

佐瀬 一男 本学名誉教授

尾熊 治郎 本学名誉教授

特集

花見 常幸	本学通信教育部長
有里 典三	本学通信教育部教授
坂本 幹雄	本学通信教育部教授
尾熊 治郎	本学名誉教授

講演会

島田 歌穂	女優・歌手・大阪芸術大学教授
-------	----------------

本号執筆者紹介（専攻）

木村 富美子	環境経済学
山本 忠行	日本語教育・言語政策
劉 繼生	情報科学・行政学
堂前 豊	金融論
石神 豊	哲学・倫理学

通信教育部論集 第18号

2016年3月16日 発行

発行者 創価大学通信教育部学会（会長 花見常幸）

〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236

© The Academic Association of the Division of Correspondence Education, Soka University 2016
ISSN 1344-2511